

瀬戸風峠遺跡

1998

松山市教育委員会
(財) 松山市生涯学習振興財團
埋蔵文化財センター

瀬戸風峠遺跡



1998

松山市教育委員会
(財) 松山市生涯学習振興財團
埋蔵文化財センター



卷頭図版1 調査地全景（東より）



卷頭図版2 濑戸風峠4号墳木炭床（東より）

序

瀬戸風峠は、松山市の市街地から北東3kmの丘陵部に位置します。古くは交通の要所として知られ、また峠からの眺望は素晴らしい、道後や市街地を眼下にし、瀬戸内海の島々の美しい風景が広がる風光明媚な峠です。現在は、峠近くに展望所の整備がなされ、ドライブや散策のコースとして親しまれています。

このような瀬戸風峠周辺の丘陵部には、古来数多くの古墳が分布していることで知られていましたが、発掘例は少なく詳細な内容は不明でした。

今回、瀬戸風峠周辺の宅地開発に伴う事前発掘調査を実施し、その成果をまとめました。

本遺跡の調査により、7世紀代の全国的にも珍しい木炭床をもつ瀬戸風峠4号墳や、多量の鉄製品の副葬をみた瀬戸風峠1号墳、ガラス製の勾玉が出土した瀬戸風峠5号墳のほか、箱式石棺、石蓋土坑墓といった墳墓が確認され、古墳の立地や構築法、葬法、副葬品など今後の古墳研究を進めるうえで貴重な資料を得ることができました。

発掘調査及び本書の刊行にあたり、ご指導、ご協力をいただいた関係機関の皆さん、並びに地権者に対しまして、厚くお礼申し上げます。

また、本書が埋蔵文化財の調査・研究の一助となり、ひいては文化財保護、教育文化の向上に寄与できることを願っています。

平成10年9月30日

財団法人 松山市生涯学習振興財団
理 事 長 田 中 誠 一

例　　言

- 1 本書は、松山市教育委員会、財松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センターが平成7年4月～平成9年12月にかけて実施した松山市下伊台町乙243番地1外106筆に所在する瀬戸風峠遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 古墳名は、既に周知古墳として知られる瀬戸風峠1号墳、同2号墳はそのまま呼称し、新たに見つかった古墳については3から番号を付記した。箱式石棺、石蓋土坑墓などの埋葬施設は通し番号を1から付記し、1号箱式石棺・3号石蓋土坑・4号箱式石棺とした。木棺墓には番号を付記していない。その他の造構については土坑：SK、性格不明造構：SXと表示し、通し番号を1から付記した。
- 3 造構と遺物の実測および製図は、相原浩二、小玉亜紀子、山邊進也、酒井直哉、高松健太郎、上河敦浩、金子育代、二神千春、仙波ミリ子、仙波千秋、高尾久子、東山里美が行った。
- 4 遺物の実測図は、土製品を1／3、鉄製品を1／2、装飾品2／3を基本とした。なお、遺物実測図のスケールドには縮分値を記した。
- 5 造構の撮影は大西朋子、相原浩二、大森一成、小玉亜紀子が行い、遺物の撮影と図版作成は大西朋子が行った。
- 6 本書に使用した方位はすべて磁北である。
- 7 自然科学分析では徳島環境研究所に、保存科学分析では財元興寺文化財研究所に協力をいただいた。
- 8 本報告書に関する図面と遺物は、財松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センターが保管、収蔵している。
- 9 調査においては徳島文理大学石野博信氏、宮崎大学柳沢一男氏、九州大学田中良之氏、同大学金宰賢氏、櫻原考古学研究所前園実知男氏、林部均氏にご教示をいただいた。
- 10 本書の執筆は相原浩二が行い、編集と校正は梅木謙一、水口あをい、二神千春の協力を得た。
- 11 製版 カラー写真・写真図版- 175綴
印刷 オフセット印刷
用紙 カラー写真・本文 マットコート 110 k
写真図版 マットコート 135 k
製本 アジロ綴り

本文目次

第1章 調査に至る経過	
1. 調査に至る経緯	2
2. 調査・刊行組織	3
第2章 遺跡の概要	
1. 遺跡の立地	4
2. 歴史的環境	4
第3章 調査の概要	
1. 調査の経過	8
第4章 B区の調査	10
1. 検出遺構	2.
瀬戸風峠1号墳	3.
瀬戸風峠3号墳	4.
石蓋土坑墓	5.
箱式石棺	
6. SX1	7.
B区表採遺物	
第5章 C区の調査	52
1. 検出遺構	2.
箱式石棺	3.
C区表採遺物	
第6章 D区の調査	56
1. 検出遺構	2.
瀬戸風峠4号墳	3.
木棺墓	
第7章 E区の調査	68
1. 検出遺構	2.
瀬戸風峠6号墳	3.
E区表採遺物	
第8章 F区の調査	74
1. 検出遺構	2.
瀬戸風峠5号墳	
第9章 自然科学分析	〔歴古環境研究所〕 104
第10章 保存科学分析	〔財〕元興寺文化財研究所 125
第11章　まとめ	127

挿 図 目 次

第1図	瀬戸風峠遺跡位置図（縮尺1／50,000）	2
第2図	瀬戸風峠遺跡周辺の地質図（縮尺1／125,000）	4
第3図	瀬戸風峠遺跡の位置と周辺の遺跡（縮尺1／25,000）	6
第4図	調査地の範囲と調査区位置図（縮尺1／5,000）	9
第5図	B区調査前測量図（縮尺1／400）	11
第6図	B区調査後測量図（縮尺1／200）	13
第7図	瀬戸風峠1号墳墳丘上層図(1)（縮尺1／60）	15
第8図	瀬戸風峠1号墳墳丘上層図(2)（縮尺1／60）	17
第9図	瀬戸風峠1号墳墳丘土層図(3)（縮尺1／60）	18
第10図	瀬戸風峠1号墳天井石測量図（縮尺1／50）	19
第11図	瀬戸風峠1号墳石室測量図（縮尺1／60）	20
第12図	瀬戸風峠1号墳墓道測量図（縮尺1／60）	21
第13図	瀬戸風峠1号墳石室内出土遺物測量図（縮尺1／25）	23
第14図	瀬戸風峠1号墳石室内土器分布図（縮尺1／50）	24
第15図	瀬戸風峠1号墳石室内出土遺物実測図(1)（縮尺1／3）	25
第16図	瀬戸風峠1号墳石室内出土遺物実測図(2)（縮尺1／3, 1／5）	26
第17図	瀬戸風峠1号墳石室内出土遺物実測図(3)（縮尺1／3）	27
第18図	瀬戸風峠1号墳石室内鉄器分布図（縮尺1／50）	27
第19図	瀬戸風峠1号墳石室内出土遺物実測図(4)（縮尺1／2）	28
第20図	瀬戸風峠1号墳石室内出土遺物実測図(5)（縮尺1／2）	29
第21図	瀬戸風峠1号墳石室内出土遺物実測図(6)（縮尺1／2）	30
第22図	瀬戸風峠1号墳石室内出土遺物実測図(7)（縮尺1／2）	31
第23図	瀬戸風峠1号墳石室内出土遺物実測図(8)（縮尺1／2）	32
第24図	瀬戸風峠1号墳石室内出土遺物実測図(9)（縮尺1／2）	33
第25図	瀬戸風峠1号墳石室内出土遺物実測図(10)（縮尺1／2）	34
第26図	瀬戸風峠1号墳石室内出土遺物実測図(11)（縮尺1／2）	35
第27図	瀬戸風峠1号墳石室内装飾品分布図（縮尺1／50）	35
第28図	瀬戸風峠1号墳石室内出土遺物実測図(12)（縮尺2／3）	36
第29図	瀬戸風峠1号墳石室外出土遺物実測図(1)（縮尺1／3）	38
第30図	瀬戸風峠1号墳石室外出土遺物実測図(2)（縮尺1／3, 2／3）	39
第31図	瀬戸風峠3号墳測量図（縮尺1／80）	40
第32図	瀬戸風峠3号墳出土遺物実測図（縮尺1／2, 1／3）	40
第33図	3号石蓋土坑墓測量図（縮尺1／40）	42
第34図	3号石蓋土坑墓出土遺物実測図（縮尺2／3）	42
第35図	4号箱式石棺測量図（縮尺1／30）	43

第36図	5号箱式石棺測量図(縮尺1/30)	43
第37図	6号箱式石棺測量図(縮尺1/30)	44
第38図	7号箱式石棺測量図(縮尺1/30)	45
第39図	7号箱式石棺人骨測量図(縮尺1/20)	46
第40図	8号箱式石棺測量図(縮尺1/30)	47
第41図	8号箱式石棺出土遺物実測図(縮尺1/3)	48
第42図	9号箱式石棺上部土層図(縮尺1/20)	48
第43図	9号箱式石棺測量図(縮尺1/30)	49
第44図	S X 1測量図(縮尺1/20)	50
第45図	B区出土遺物実測図(縮尺1/3, 1/2)	51
第46図	C区調査前測量図(縮尺1/200)	53
第47図	C区調査後測量図(縮尺1/200)	53
第48図	1号箱式石棺測量図(縮尺1/30)	54
第49図	2号箱式石棺測量図(縮尺1/30)	55
第50図	C区表採遺物実測図(縮尺1/3)	55
第51図	D区調査前測量図(縮尺1/200)	56
第52図	D区調査後測量図(縮尺1/200)	57
第53図	瀬戸風岬4号墳埴丘土層図(縮尺1/80)	58
第54図	瀬戸風岬4号墳石室測量図(縮尺1/40)	59
第55図	瀬戸風岬4号墳石室内遺物出土状況(縮尺1/30)	60
第56図	瀬戸風岬4号墳石室内出土遺物実測図(1)(縮尺1/3)	61
第57図	瀬戸風岬4号墳石室内出土遺物実測図(2)(縮尺1/3)	62
第58図	瀬戸風岬4号墳石室内出土遺物実測図(3)(縮尺1/2)	63
第59図	瀬戸風岬4号墳石室内出土遺物実測図(4)(縮尺1/2, 2/3)	64
第60図	木棺墓検出図(縮尺1/20)	65
第61図	木棺墓測量図(縮尺1/20)	66
第62図	木棺墓出土遺物実測図(縮尺1/4)	67
第63図	E区調査前測量図(縮尺1/200)	68
第64図	E区調査後測量図(縮尺1/100)	69
第65図	瀬戸風岬6号墳埴丘土層図(縮尺1/40)	70
第66図	瀬戸風岬6号墳石室測量図(縮尺1/30)	71
第67図	瀬戸風岬6号墳石室内遺物測量図(縮尺1/20)	72
第68図	瀬戸風岬6号墳石室内出土遺物実測図(縮尺1/2)	73
第69図	E区出土遺物実測図(縮尺1/3)	73
第70図	F区調査前測量図(縮尺1/100)	75
第71図	F区調査後測量図(縮尺1/100)	76
第72図	瀬戸風岬5号墳埴丘土層図(1)(縮尺1/40)	77
第73図	瀬戸風岬5号墳埴丘土層図(2)(縮尺1/40)	78

第74図	瀬戸風峠 5号墳石室測量図（縮尺 1／40）	79
第75図	瀬戸風峠 5号墳石室内遺物測量図（縮尺 1／20）	81
第76図	瀬戸風峠 5号墳石室内出土遺物実測図(1)（縮尺 1／3）	82
第77図	瀬戸風峠 5号墳石室内出土遺物実測図(2)（縮尺 1／2）	83
第78図	瀬戸風峠 5号墳石室内出土遺物実測図(3)（縮尺 2／3）	84
第79図	瀬戸風峠 5号墳における植物珪酸体分析結果	107
第80図	瀬戸風峠 1号墳墳丘トレンチ T1 束壁における植物珪酸体分析結果	108
第81図	瀬戸風峠遺跡の植物珪酸体顕微鏡写真(1)	109
第82図	瀬戸風峠遺跡の植物珪酸体顕微鏡写真(2)	110
第83図	瀬戸風峠 5号墳出土炭化材の顕微鏡写真	112
第84図	瀬戸風峠 4号墳出土炭化材の顕微鏡写真	114
第85図	瀬戸風峠 4号墳の寄生虫卵分析	117
第86図	瀬戸風峠 4号墳石室内における植物珪酸体分析結果	122
第87図	瀬戸風峠 4号墳の植物珪酸体顕微鏡写真(1)	123
第88図	瀬戸風峠 4号墳の植物珪酸体顕微鏡写真(2)	124
第89図	耳環測量部図	125
第90図	耳環の顕微鏡写真と分析表	126

表 目 次

表1	瀬戸風峠1号墳石室内出土遺物観察表（土製品）	86
表2	瀬戸風峠1号墳石室内出土遺物観察表（鉄製品）	87
表3	瀬戸風峠1号墳石室内出土遺物観察表（耳環）	90
表4	瀬戸風峠1号墳石室内出土遺物観察表（玉類）	90
表5	瀬戸風峠1号墳石室外出土遺物観察表（土製品）	92
表6	瀬戸風峠1号墳石室外出土遺物観察表（玉類）	93
表7	瀬戸風峠3号墳出土遺物観察表（土製品）	93
表8	瀬戸風峠3号墳出土遺物観察表（鉄製品）	93
表9	瀬戸風峠3号石蓋土坑墓出土遺物観察表（耳環）	94
表10	8号箱式石棺出土遺物観察表（土製品）	94
表11	B区出土遺物観察表（土製品）	94
表12	B区出土遺物観察表（鉄製品）	94
表13	C区表採遺物観察表（土製品）	94
表14	瀬戸風峠4号墳石室内出土遺物観察表（土製品）	94
表15	瀬戸風峠4号墳石室内出土遺物観察表（鉄製品）	95
表16	瀬戸風峠4号墳石室内出土遺物観察表（耳環）	96
表17	瀬戸風峠4号墳石室内出土遺物観察表（玉類）	97
表18	木棺墓出土遺物観察表（鉄製品）	97
表19	瀬戸風峠6号墳出土遺物観察表（鉄製品）	97
表20	E区出土遺物観察表（土製品）	97
表21	瀬戸風峠5号墳出土遺物観察表（土製品）	98
表22	瀬戸風峠5号墳出土遺物観察表（鉄製品）	98
表23	瀬戸風峠5号墳出土遺物観察表（耳環）	101
表24	瀬戸風峠5号墳出土遺物観察表（玉類）	101
表25	瀬戸風峠1号墳と5号墳における植物珪酸体分析結果	106
表26	瀬戸風峠5号墳の石室床面から出土した炭化材の樹種同定結果	111
表27	瀬戸風峠4号墳から出土した炭化材の樹種同定結果	113
表28	試料と方法	115
表29	測定結果	115
表30	瀬戸風峠4号墳における寄生虫卵（含む花粉分析結果）	117
表31	瀬戸風峠4号墳石室内における植物珪酸体分析結果	121
表32	耳環の法量	125

写真図版目次

- 卷頭図版1 調査地全景（東より）
卷頭図版2 濑戸風峠4号墳木炭床（東より）
- 図版1. 1 B区遠景（東より）
図版2. 1 濑戸風峠1号墳床面検出状況（西より）
図版3. 1 濑戸風峠1号墳石室内出土遺物
図版4. 1 7号箱式石棺人骨検出状況（西より）
図版5. 1 濑戸風峠4号墳石室内出土遺物
図版6. 1 濑戸風峠5号墳床面検出状況（北東より）
図版7. 1 濑戸風峠5号墳石室内出土遺物
図版8. 1 B・D・F区遠景（南西より） 2 B区遠景（南より） 3 B区遠景（南上より）
図版9. 1 濑戸風峠1号墳調査前（南より） 2 濑戸風峠1号墳調査前開口部（南より）
3 濑戸風峠1号墳盗掘坑（東より）
図版10. 1 濑戸風峠1号墳調査前（西より） 2 濑戸風峠1号墳墓道上層（西より）
3 濑戸風峠1号墳閉塞部遺存状況（西より）
図版11. 1 濑戸風峠1号墳T1西壁土層（南東より） 2 濑戸風峠1号墳T1東壁土層（南西より）
図版12. 1 濑戸風峠1号墳調査前石室内（西より） 2 濑戸風峠1号墳調査前石室内（東より）
図版13. 1 濑戸風峠1号墳閉塞部（西より） 2 濑戸風峠1号墳天井石（玄室内より）
3 濑戸風峠1号墳天井石検出状況（西より）
図版14. 1 濑戸風峠1号墳天井石遺存状況（東より） 2 濑戸風峠1号墳天井石遺存状況（北東より）
図版15. 1 濑戸風峠1号墳床面検出状況（西より）
図版16. 1 濑戸風峠1号墳遺物出土状況（東より） 2 濑戸風峠1号墳遺物出土状況（南より）
3 濑戸風峠1号墳遺物出土状況（北より）
図版17. 1 濑戸風峠3号墳検出状況（北より） 2 濑戸風峠3号墳石室検出状況（南より）
図版18. 1 3号石蓋土坑墓検出状況（北より） 2 3号石蓋土坑墓完削状況（東より）
3 5号箱式石棺（西より） 4 4号箱式石棺（北東より）
図版19. 1 6号箱式石棺検出状況（北西より） 2 7号箱式石棺と1号墳（北西より）
図版20. 1 7号箱式石棺検出状況（西より） 2 7号箱式石棺人骨出土状況（西より）
3 7号箱式石棺頭骨（西より）
図版21. 1 8号箱式石棺検出状況（東より） 2 9号箱式石棺検出状況（西より）
図版22. 1 9号箱式石棺（西より） 2 9号箱式石棺（東より）
3 8・9号箱式石棺（南西より）
図版23. 1 C区遠景（北より） 2 2号箱式石棺人骨検出状況（北西より）
図版24. 1 1号箱式石棺検出状況（南より）
図版25. 1 D区遠景（東より） 2 濑戸風峠4号墳木炭床検出状況（西より）

- 図版26. 1 濑戸風峠4号墳遺物出土状況（南より） 2 濑戸風峠4号墳遺物出土状況（真上より）
- 図版27. 1 濑戸風峠4号墳木炭床近影（南東より） 2 濑戸風峠4号墳木炭床半截状況（東より）
- 図版28. 1 濑戸風峠4号墳石室内遺物出土状況（北東より） 2 D区全景（北より）
- 図版29. 1 D区木棺墓検出状況（東より） 2 D区木棺部掘削状況（東より）
3 D区木棺墓鉄釘検出状況（東より）
- 図版30. 1 濑戸風峠6号墳調査前（東より） 2 濑戸風峠6号墳（西より）
- 図版31. 1 濑戸風峠6号墳遺物出土状況（北より） 2 濑戸風峠6号墳床面検出状況（西より）
- 図版32. 1 濑戸風峠5号墳検出状況（北より） 2 濑戸風峠5号墳床面検出状況（北より）
- 図版33. 1 濑戸風峠5号墳遺物検出状況（南より） 2 濑戸風峠5号墳遺物検出状況（西より）
- 図版34. 1 濑戸風峠5号墳全景（南より）
- 図版35. 1 濑戸風峠5号墳羨道部土層断面（南より） 2 濑戸風峠5号墳完掘状況（南より）
- 図版36. 1 濑戸風峠1号墳石室内出土遺物①
- 図版37. 1 濑戸風峠1号墳石室内出土遺物②
- 図版38. 1 濑戸風峠1号墳石室内出土遺物③
- 図版39. 1 濑戸風峠1号墳石室内出土遺物④
- 図版40. 1 濑戸風峠1号墳石室内出土遺物⑤
- 図版41. 1 濑戸風峠1号墳石室内出土遺物⑥ 2 濑戸風峠1号墳石室外出土遺物
3 濑戸風峠3号墳出土遺物 4 3号石蓋土坑墓出土遺物 5 B区出土遺物
- 図版42. 1 濑戸風峠4号墳石室内出土遺物①
- 図版43. 1 濑戸風峠4号墳石室内出土遺物②
- 図版44. 1 濑戸風峠4号墳石室内出土遺物③ 2 D区木棺墓出土遺物
3 濑戸風峠6号墳出土遺物 4 E区出土遺物
- 図版45. 1 濑戸風峠5号墳石室内出土遺物① 2 濑戸風峠4号墳出土遺物
- 図版46. 1 濑戸風峠5号墳石室内出土遺物②
- 図版47. 1 濑戸風峠5号墳石室内出土遺物③

第1章 調査に至る経緯

1. 調査に至る経緯

平成5年5月、緑映都市開発㈱より、松山市下伊台町、祝谷東町、山田町の3町にかかる大規模宅地開発に伴う埋蔵文化財の確認申請が、松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。申請地は、松山市の指定する包蔵地『No52. 濑戸風峠古墳群』内にあたり周知の遺跡地として知られている。文化教育課と『松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター』（以下、埋蔵文化財センター）は、開発者である緑映都市開発㈱と協議を行い申請地の遺跡の有無について試掘調査を行うこととなった。

試掘調査は埋蔵文化財センターが主体となり、平成6年4月1日より平成7年3月31日の間行い、周知古墳である瀬戸風峠1号墳と、古墳4基、箱式石棺4基を検出した。

試掘調査の結果に基づき、文化教育課、埋蔵文化財センターと緑映都市開発㈱の三者は、事業計画の具体案をもとに本格調査に向けての協議を重ね、開発によって失われる遺構・遺物に対し調査を行う事となった。

なお、調査にあたっては緑映都市開発㈱より調査費用をはじめとし、調査のための条件整備等で多大な協力を頂き、関係各位の方々に厚くお礼申し上げる次第である。



第1図 濑戸風峠遺跡位置図

(S=1:50,000)

2. 調査・刊行組織

調査地 松山市下伊台町乙243番地1外106等地

遺跡名 瀬戸風峠遺跡

調査期間 1995(平成7)年4月4日～1996⁷(平成9)年12月25日

調査面積 257,349m²

調査委託 緑咲都市開発㈱

(平成10年9月30日現在)

松山市教育委員会 教育長	池田 尚郷
事務局局長	大野 嘉幸
次長	岩本 一夫
次長	丹下 正勝
文化教育課 課長	松平 泰定

財松山市生涯学習振興財團

理事長	田中 誠一
事務局長	池田 秀雄
事務局次長	河口 雄三

埋蔵文化財センター

所長	河口 雄三
次長	田所 延行
調査係長	田城 武志
調査主任	栗田 正芳 (文化教育課職員)
調査員	相原 浩二 小玉 並紀子 大西 明子

第2章 遺跡の概要

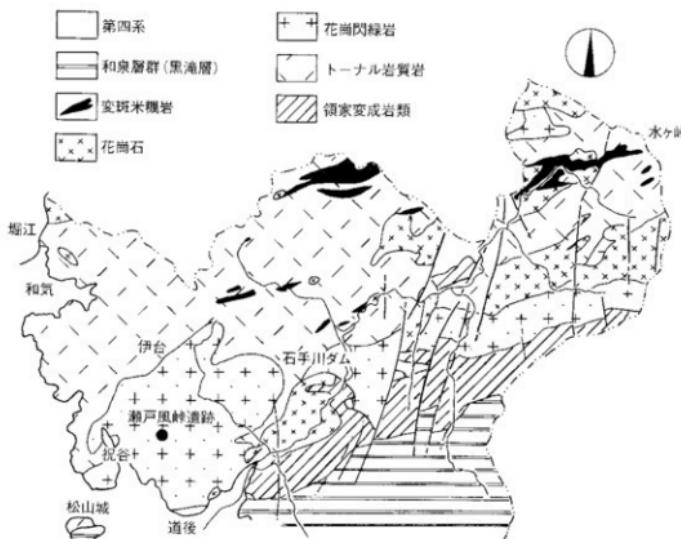
1. 遺跡の立地

瀬戸風峠遺跡は松山城から北東4km、高綱山系南西部の標高220m～255mの丘陵部に立地する。調査地は松山市下伊台町、山田町、祝谷東町の3町にまたがり、遺跡のある丘陵部一帯は松山側では城市、伊台側では頂城と呼ばれている。瀬戸風峠は市内から伊台町に入る峠道のひとつで、瀬戸風峠の標高は212mを測り、伊台側は緩やかであるが、市内道後側は急峻な坂道となっている。天正時代白水峠を越える県道が開通してからさびれてきたが、近年になって農道の整備により再び脚光をあびる様になり、散策コースとして親しまれている。調査地は、この瀬戸風峠の西側にある小高い丘陵の頂部と尾根上に位置する。

高綱山系の地質は、中生代の領家帯貫入岩類の松山型花崗閃緑岩が大部分を構成する独立丘陵である。瀬戸風峠の地質も主に花崗岩類から成り立っている。

2. 歴史的環境

松山平野内をまとまりのある遺跡群（下條信行 1991）を分けて捉えると、瀬戸風峠遺跡は道後城北遺跡群の北部に位置する。したがって、瀬戸風峠遺跡の所在する丘陵部は、松山平野の主要な遺跡



第2図 瀬戸風峠遺跡周辺の地質図 (S=1:125,000)

歴史的環境

である道後城北遺跡群を眼下に見下ろすことになる。以下、各時代の遺跡について道後城北遺跡群と瀬戸風岬遺跡周辺の丘陵部に限って概観することにする。

旧石器時代

瀬戸風岬遺跡のある丘陵から西に下った祝谷地区には祝谷丸山遺跡から細石核や細石刃が表採されている。これ等の資料は、多田 仁氏(多田 仁1992)によって詳細な検討がなされている。周辺には旧石器時代の遺跡が確認される可能性が高い地域である。

縄文時代

道後城北遺跡群の中で最も古い資料は縄文時代中期の土器片が1点、東中学校構内（文京遺跡4次調査地）から出土している。後期は文京遺跡11次調査地と道後櫛又遺跡で、土器や焼土が検出され、居住地としての機能を果たした地域と考えられている。晩期には、道後今市遺跡10次調査地で土坑と共に土器が出土し、集落の一端が伺える。

弥生時代

弥生時代になると道後城北遺跡群に集落遺跡が多くなる。特に、愛媛大学構内の文京遺跡では中期から後期にかけての大規模な集落が報告されている。

前期では、松山東中学校構内（文京遺跡4次調査）からは前半の円形竪穴式住居址2棟が検出されている。後半は、持田町3丁目遺跡で墓が多数検出され、副葬品には磨製石剣や石鎌、管玉などが出土している。前期末～中期初頭には、大溝や多数の土坑をもつ岩崎遺跡がある。

中期では、瀬戸風岬遺跡の対岸丘陵裾部に中期前半の祝谷六丁堀遺跡があり、多量の土器と石器が出土している。土製品には分銅形土製品を10点余、石器には石戈1点・石庖丁などがあり、平野を代表する遺跡である。中期後半には愛媛大学構内を中心とする文京遺跡が著名である。これまで数次の調査により、遺構には大型円形住居址、大型掘立柱建物址、周溝状遺構などがあり、遺物では青銅鏡、鉄器、ガラス洋などが出土している。

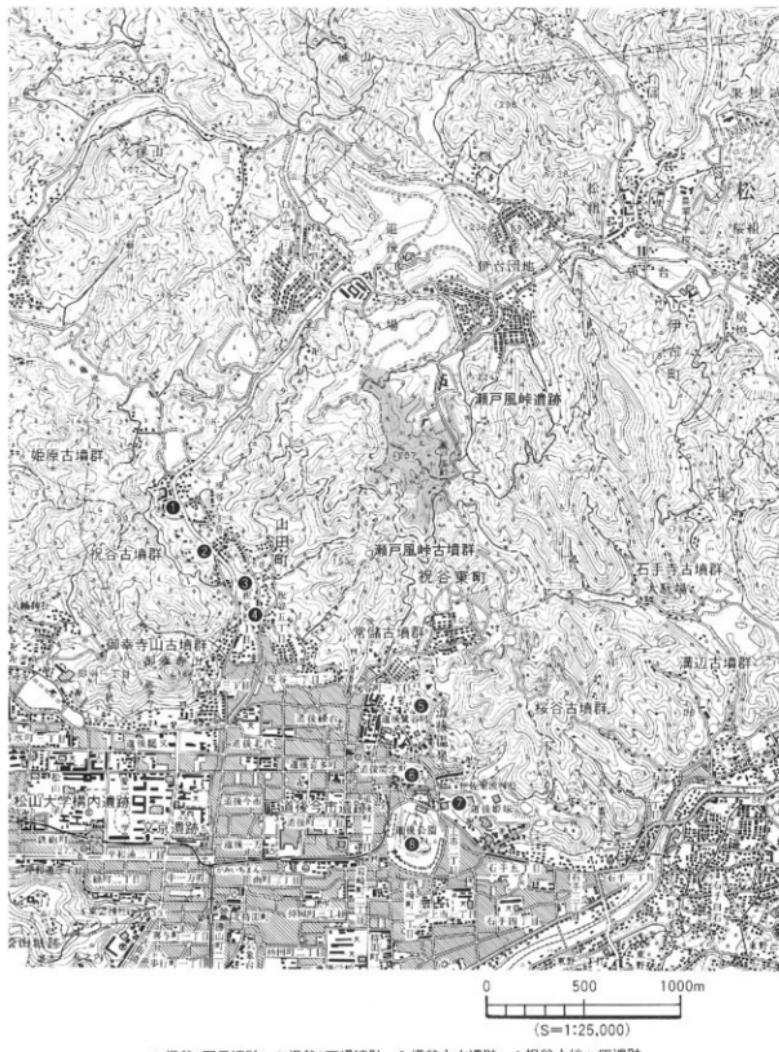
後期では松山大学構内遺跡での数次の調査があげられ、竪穴式住居址から朱の付着した石杵が出土している。松山城西麓の若草町遺跡からは円形・方形の周溝墓が検出されている。

古墳時代

瀬戸風岬遺跡を含む一帯の丘陵部には、瀬戸風岬古墳群、祝谷古墳群、常信寺古墳群、桜谷古墳群、石手寺古墳群など数多くの古墳群があるが、調査例は少ない。埴輪を有し鐵鎌や馬具などが出土した水室谷古墳、鐵鎌・鋤先・裝飾品が出土した祝谷1号墳～5号墳、鐵器が出土した三味線山古墳、鐵鎌・裝飾品・裝飾須恵器などが出土した桜谷1号墳などがあり、いずれも6世紀以降の古墳である。

集落は道後城北遺跡群に前期の松山北校遺跡、中期の松山大学構内遺跡と道後今市遺跡、後期の愛媛大学構内遺跡があり、竪穴式住居が多数検出されている。伊台地区では、前期とされる竪穴式住居址を検出した伊台憩部遺跡がある。

遺跡の概要



第3図 濑戸風崎遺跡の位置と周辺の遺跡

歴史的環境

古代以降

古代の道後地区には湯之町廃寺や内代廃寺があり、白鳳期の瓦などが採取されている。中世においては、14世紀に河野氏が湯榮城を築いている。湯榮城は調査によって、中世から近世への移行期の城郭研究にとっては貴重な資料であることが確認されている。近世は、勝山（松山城）西麓の若草町遺跡からは多量の遺物や屋敷削造構、礎石、井戸等を検出している。松山城周辺には近世城下町遺跡が数多く残っている。

参考文献

- 下條信行 1991 「松山平野と道後城北の共生文化」『松山大学構内遺跡－2次調査－』松山大学・松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター
- 多田 仁 1992 「松山平野の石器文化」『祝谷アイリ遺跡』御松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
- 真鍋昭文 1995 「持田町3丁目遺跡」御愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 多田 仁・瀬西一成・林 奈美 1994 「道後今市遺跡X」御愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 栗田茂敏 1992 「文京遺跡－2・3・5次調査－」愛媛大学・御松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
- 宮崎泰好 1991 「祝谷六丁場遺跡」松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター
- 梅木謙一 1991 「松山大学構内遺跡－第2次調査－」松山大学・松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター
- 宮内惟一 1995 「松山大学構内遺跡II－第3次調査－」松山市教育委員会・御松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
- 土井光一郎・伊藤裕二 1996 「若草町遺跡II」御愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 愛媛県史編纂委員会 1986 「愛媛県史 資料編 考古」

第3章 調査の概要

1. 調査の経過

調査にあたっては、対象面積が広大なためまず試掘調査を行い、申請地内の遺跡の有無について調査をした。試掘調査は、平成6年4月1日から平成7年3月までの間に行い、丘陵支群ごとに任意でA区～F区までの6区画に区分した。その結果、A区を除いた各区で造構・遺物が検出された。この結果をうけ、各区内で造構や遺物を確認した地点とその周辺部について本格調査を行うこととし、平成7年4月5日から実施した。試掘調査の概要と本格調査の工程及び所在地は以下である。

(1) A区の調査

A区は申請地の北側丘陵部にある。丘陵頂部と尾根上に30本の試掘トレンチを入れたが、造構や遺物は検出されなかった。よって、A区は本格調査を行っていない。

(2) B区の調査

B区はA区の南側の丘陵部にある。丘陵頂部と尾根上に30本の試掘トレンチを入れた結果、周知古墳である瀬戸風峠1号墳と新しく古墳1基、及び石棺2基を検出した。造構を検出した地点と周辺の約1200m²に対して平成7年6月1日～同年12月15日と平成8年12月1日～平成9年12月25日の間、本格調査を実施した。B区の行政地番は松山市下伊台町乙243-1、山田町乙429である。

(3) C区の調査

C区はB区の東側の丘陵部にある。尾根上に20本のトレンチを入れた結果、石棺2基を検出した。造構を検出した地点と周辺の約300m²について平成7年4月5日～同年5月31日の間、本格調査を実施した。C区の行政地番は松山市下伊台町乙248、乙249、乙255である。

(4) D区の調査

D区はB区の西側の丘陵部にある。丘陵頂部と尾根上に10本の試掘トレンチを入れた結果、古墳1基を検出した。古墳を検出した地点と周辺の約300m²について平成8年9月1日～平成9年1月31日の間、本格調査を実施した。D区の行政地番は松山市山田町乙523-1である。

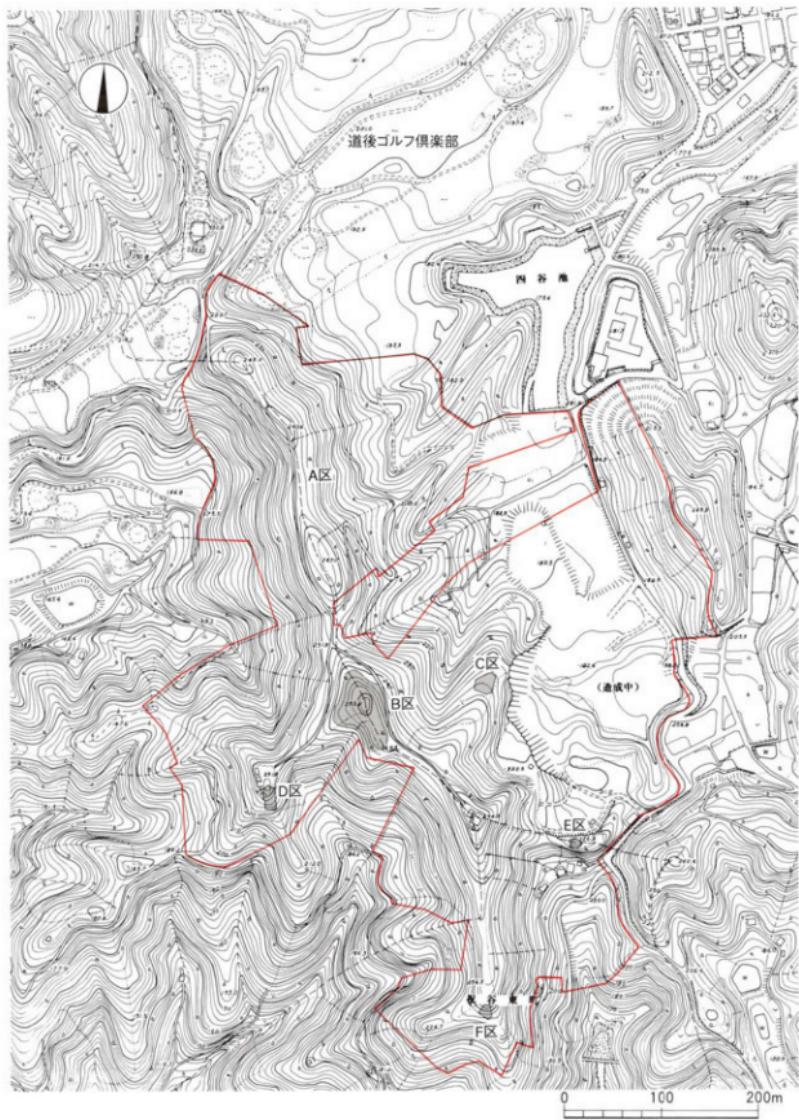
(5) E区の調査

E区はB区の南東側の丘陵部にある。尾根上に4本の試掘トレンチを入れた結果、古墳1基を検出した。古墳を検出した地点と周辺の約100m²について平成9年6月10日～同年10月30日の間、本格調査を実施した。E区の行政地番は松山市下伊台町乙274、乙275-4、祝谷東町乙690-1である。

(6) F区の調査

F区はB区の南側丘陵部である。尾根上に11本のトレンチを入れた結果、古墳1基を検出した。古墳を検出した地点と周辺の約150m²について平成8年11月14日～平成9年5月30日の間、本格調査を実施した。F区の行政地番は松山市祝谷東町乙688-1である。

調査の経過



第4図 調査地の範囲と調査区位置図

(S=1:5,000)

第4章 B区の調査

1. 検出遺構

B区は、瀬戸風峠1号墳を頂きとし、南北方向と西方向にのびる丘陵尾根上に立地する。1号墳のある頂部には箱式石棺3基があり、南にのびる緩やかな尾根上には右蓋土坑墓1基、箱式石棺1基、古墳1基を検出し、西にのびる尾根上には箱式石棺2基を検出している。したがって検出遺構数は試掘調査よりも増加している。

2. 瀬戸風峠1号墳（第5・6図）

（1）位置と現状

瀬戸風峠1号墳は標高255mの丘陵頂部に占地する。1号墳からの眺望は松山平野はもとより瀬戸内海の伊予灘、斎灘に浮かぶ島々をも見渡せる見渡らしの良い景観である。

調査前の丘陵上には、盗掘坑があり、石室の奥壁上部の右側を貫いた大きい穴が開いていた。石室への侵入はこの穴から容易に出入りできるようになっている。石室内には流土の堆積をみるが、人が立って動ける程の空間は確保されていた。玄門部付近は多量の流土により埋まっていた。内部から見た石室の壁体は奥壁と左側側壁の一部が損壊しているものの比較的の遺存状態は良好である。

この古墳は古くから地元住民に知られるもので、話によれば昭和の前半期には開口部からも石室内に入れ、遺物も多少拾われたという事である。また、終戦直後には人が住んでいたという話も聞いている。なお、調査は時間の関係から、墳丘はトレンチ調査に限られた。

（2）墳丘（第7～9図）

墳丘は西側が削られ、全容は不明であるが、直径18m前後の円墳と考えられる。1号墳は7・8・9号箱式石棺を一部破壊して造られていた。墳端を示す周溝などの外部施設は検出していない。墳端の検出にあたっては、石室主軸方向のトレンチT3と主軸に直交するトレンチT1・T2、墳丘裾部にT4～T7のトレンチを設定し、盛土の範囲確認を行った。T3では、盛土は旧表土層と思われる黒色土ないし黒灰色土（第7図17）の直上から構築され、玄窓中央部の基準点（以下、基準点と略記する）から東7.4mまでにある。T1東壁では、旧表土層はみられない。盛土は地山上に施され、基準点から南8.4mまでにある。T1東壁では、盛土は旧表土層上及び地山上にあり、ポイントfから南7.8mまでにある。T2東壁では、盛土は旧表土層と地山直上にある。基準点から北8.4mまで検出した。T4・T6・T7では、盛土は旧表土層の直上にある。T4ではポイントhから東3.6m、T6ではポイントjから南東5.3m、T7ではポイントdから北へ7.1mまで検出した。T5では、盛土が地山上にあり、ポイントiから北東端へ4mまで検出した。各トレンチ壁で検出した盛土の端をもとに、遺存する盛土域を推定すると第6図になる。

地山整形は、盛土の除去を行っていないため正確な範囲が不明である。盛土は旧表土層上と地山直上とで検出されるものがあり、旧表土層のみられない部分は地山整形が行われているものと判断した。

盛土の構築法は、トレンチ内の土層状況から大きく3工程に分けられる。第1工程は、まず地山を削平しつづいて部分的に盛土（盛土:1）を施し、墳丘基底面の整地を行う。第2工程は、石室構築に

瀬戸風峠 1号墳



第5図 B区調査前測量図

B 区の調査

伴うもので、墓坑を掘削し石室を構築していく。石室周囲には粘質土と砂質土で版築を行い、石室全体を盛土（盛土2）で覆う。第3工程は、石室周囲に盛土を施した後、盛土2の上に盛土3を用いて墳丘全体に盛土を施す。盛土3には、純まりのない土が使用されている。

（3）墓坑（第7・8・10図）

墓坑は丘陵頂部にあり、東側の墓坑掘り方は盛土1の黄灰色土（第7図12）から掘り込み、南北側の墓坑掘り方は地山面から掘り込まれている。なお、墓坑の平面形態を検出し、掘り下げを行っている時点では3基（7号・8号・9号）の箱式石棺を検出し、1号墳は7号・8号・9号の箱式石棺を切っていることを確認した（第8図T1東壁）。墓坑の平面形態は、長方形を基本にするが、玄門部に向かって幅狭となる。

（4）石室（第10・11図）

1号墳の主体部は、主軸方位をN73°Eにとり、全長6.05mの両袖式の横穴式石室で、西側に開口する。石室は、右奥壁と左側壁中央上部の一部が石室内に落し、閉塞石の七部石が失われている。石室は、約2/3の高さが墓坑内に構築され、知い渢道部前面には墓道がとりついている。石室の壁体と閉塞石には花崗岩が使用され、右袖部には1点だけ小ぶりの河原石が隙間を塞ぐように使用されている。渢道部は玄室より1段高く、玄室に入るにはこの段を降りる構造となっている。

（5）玄室（第11図）

玄室の規模は室長3.95m、幅1.65m～2.40m、室高2.10m～2.40mを測る。平面形態は歪みのある長方形を呈する。左右の側壁は奥壁から弧状にやや張り出し、玄門部に向かって幅狭となっている。両側壁の持ち送りは基底石から3・4段目からはじまり、天井部での左右の側壁間は最も幅の狭い所で60cm程度となっている。壁体に使用された石材の大きさにみる特徴は、基底石から3～4段目までの石材が上部より小さいことである。

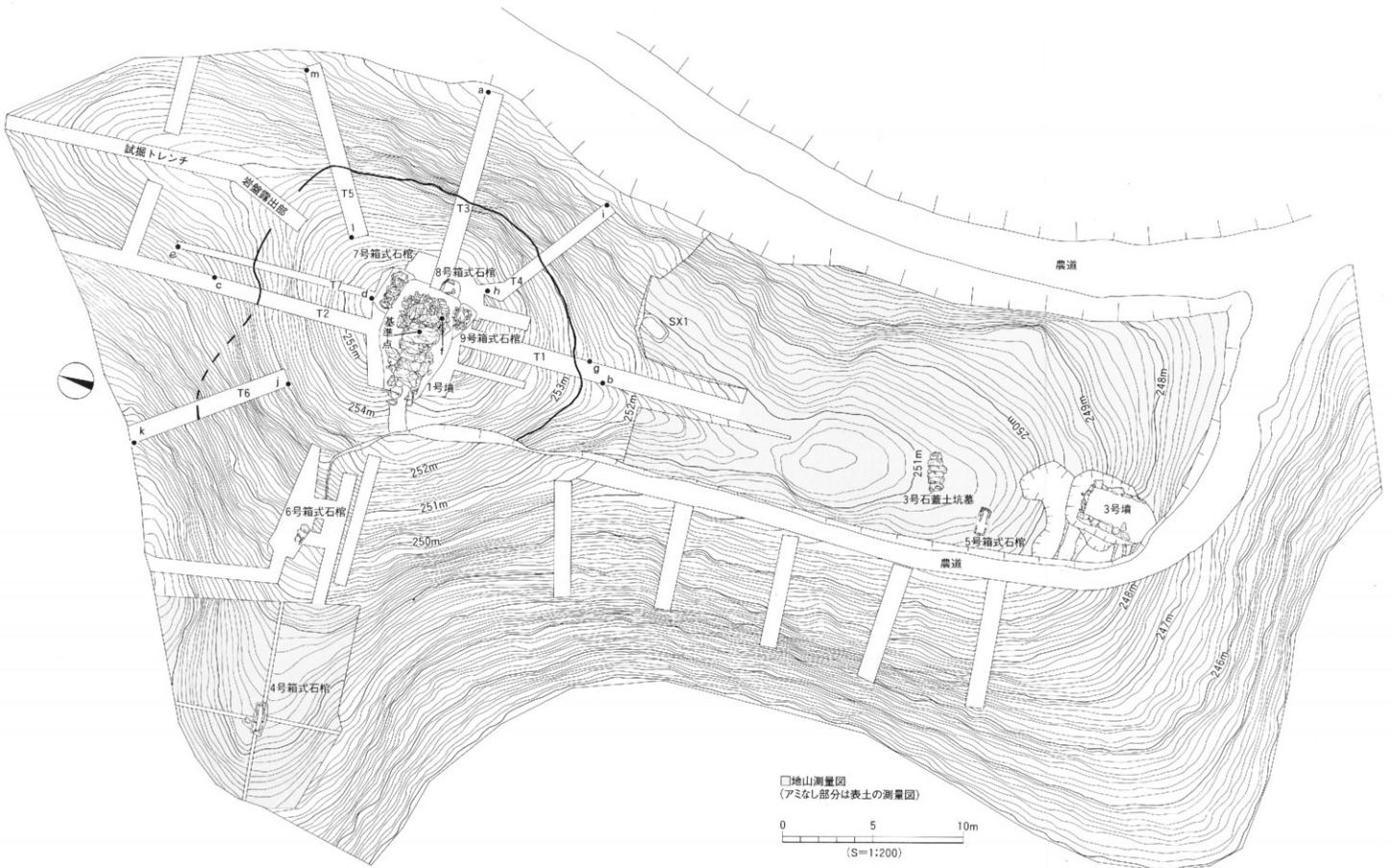
天井部は、縦長の塊石を玄室上に4枚を用いている。床面から天井部までの高さは、奥壁側が高く、玄門部に向かい僅かに低くなっている。

床面は直径5cm前後の河原石と花崗岩の割石が地山上に敷かれ、礫床となる。礫の隙間には黒灰色粘質土がみられる。床面の高さは、北側に対して南側が高くなる。特に玄室の南西隅部は高くなっている。礫床は玄室右奥と左奥、玄室南西部と玄室左側の中央部から玄門部までに花崗岩の割石が多く敷かれている。玄室中央部には広い範囲で敷き石が見られない。この区域は、平面形態が長方形を呈し、規模は縦2.0m、横1.2mを測る。床面は黒灰色粘質土である。同地点からは少数の須恵器（小片）が出土したにすぎない。この部分は盗掘による攪乱が考えられる。

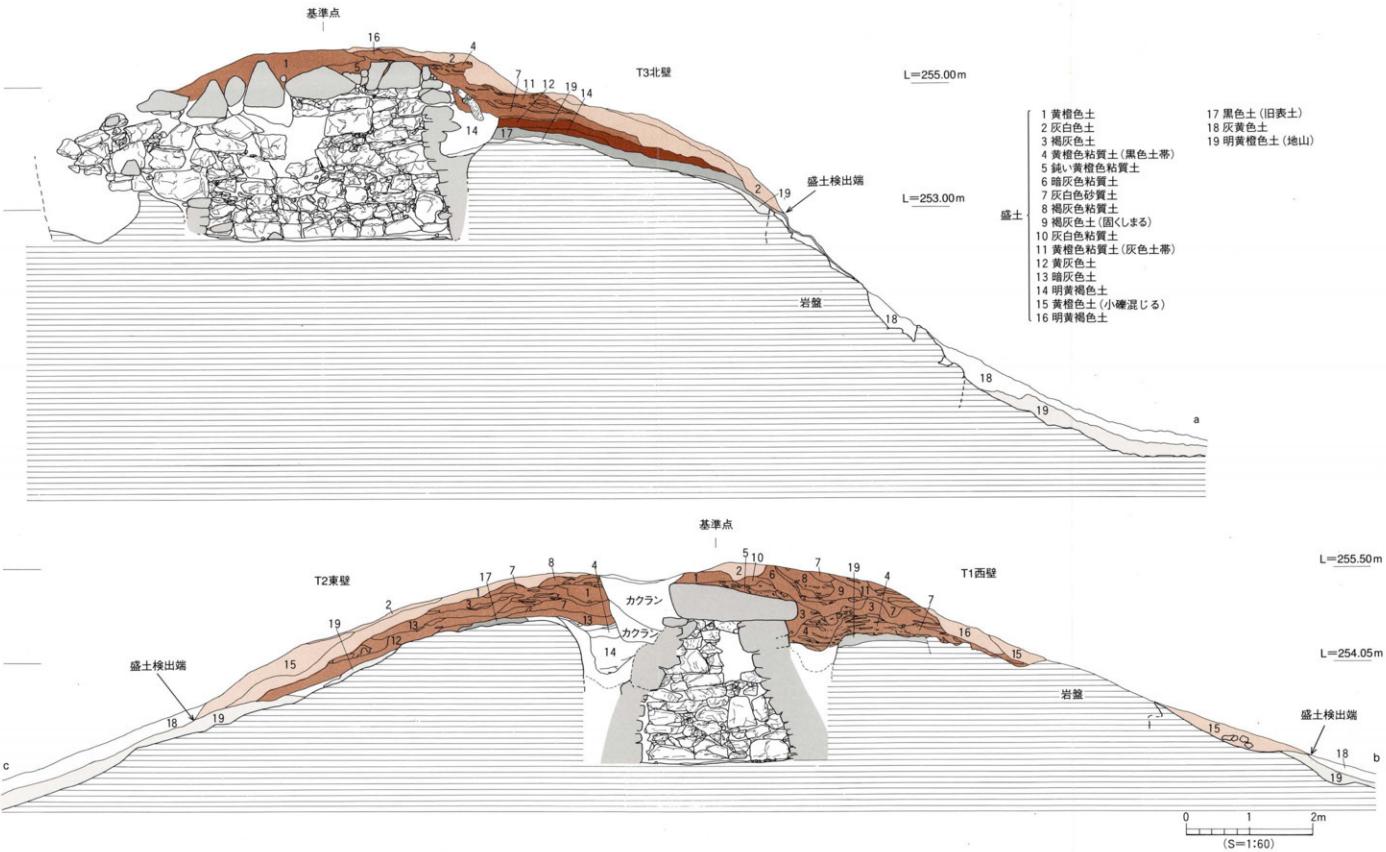
玄門部は両袖を配し、玄室に入るには段（2段）を降りる構造になっている。袖石は板石の上に築かれている。左袖石は右袖石ほど明確な隅角を造らない。玄室の入口には花崗岩の塊石3個を基台とし、その上にやや幅広の不整形な平石を置き階段状の施設をつくる。

（6）渢道

渢道規模は渢道長2.10m、幅0.84m～0.96mを測る。渢道幅は玄門部側と入り口側がほとんど変わ

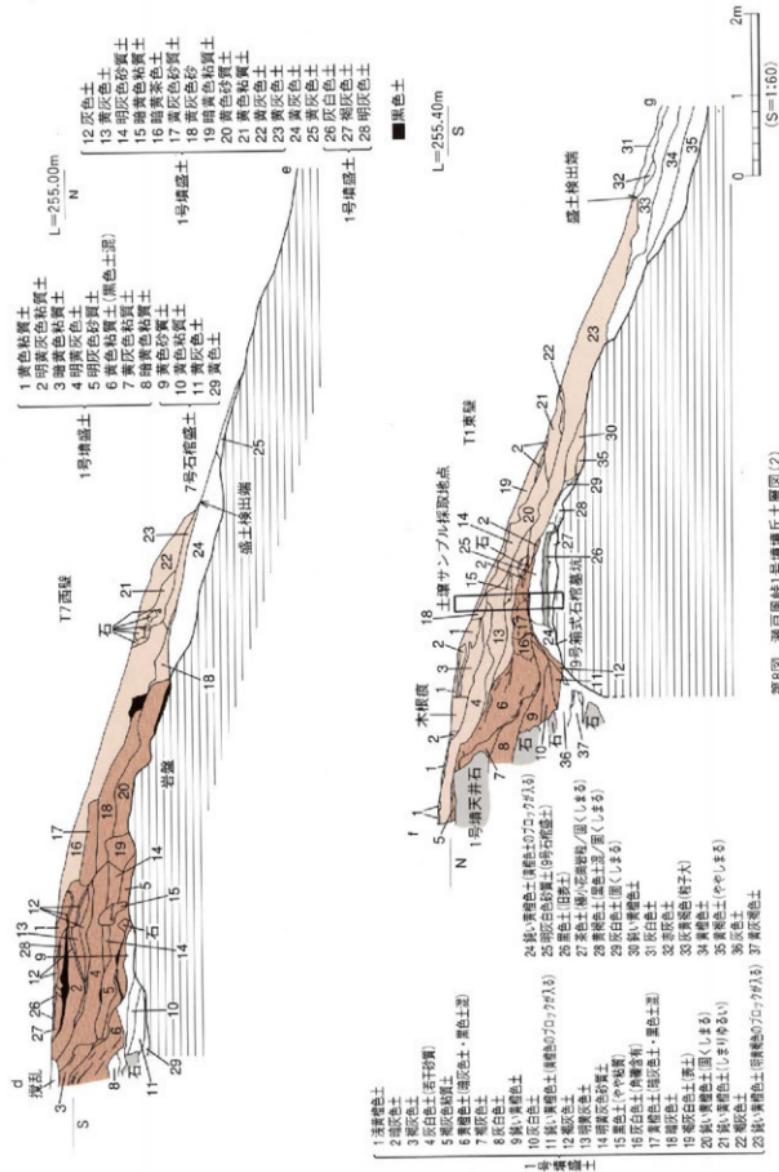


第6図 B区調査後測量図



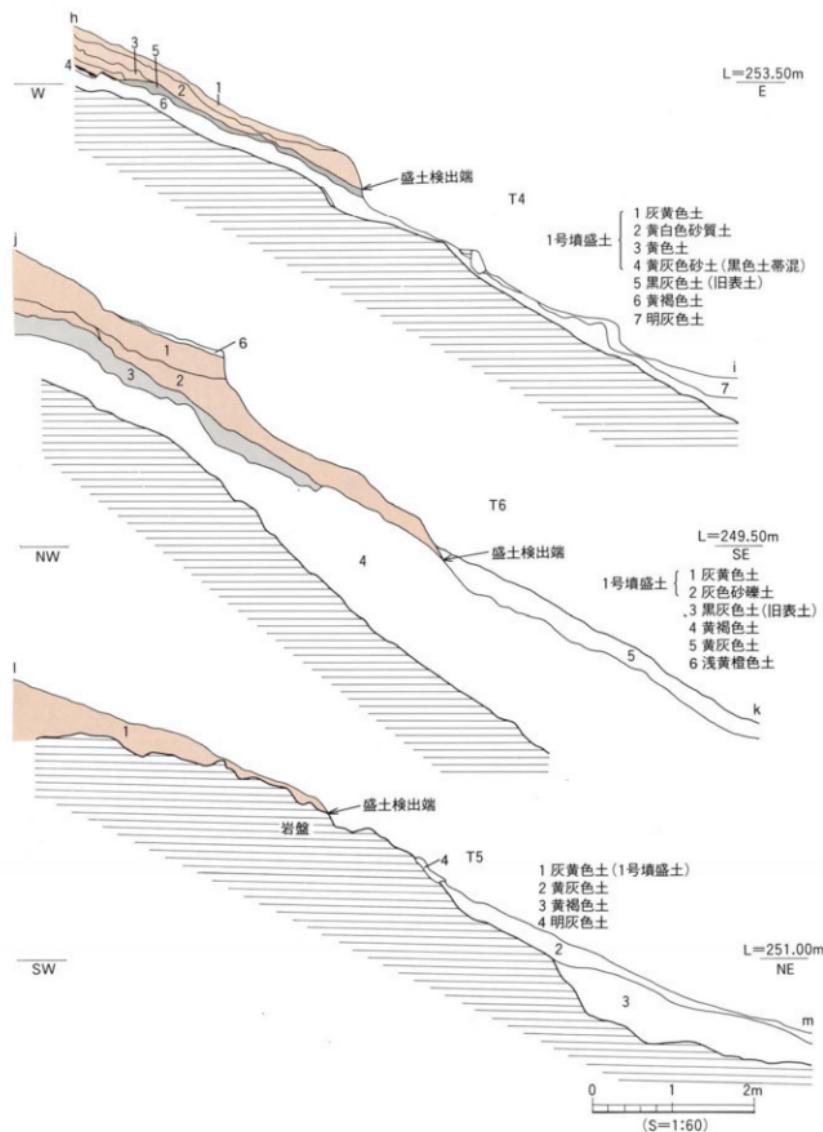
第7図 濑戸風峠1号填境丘土層図(1)

瀬戸風峯1号墳



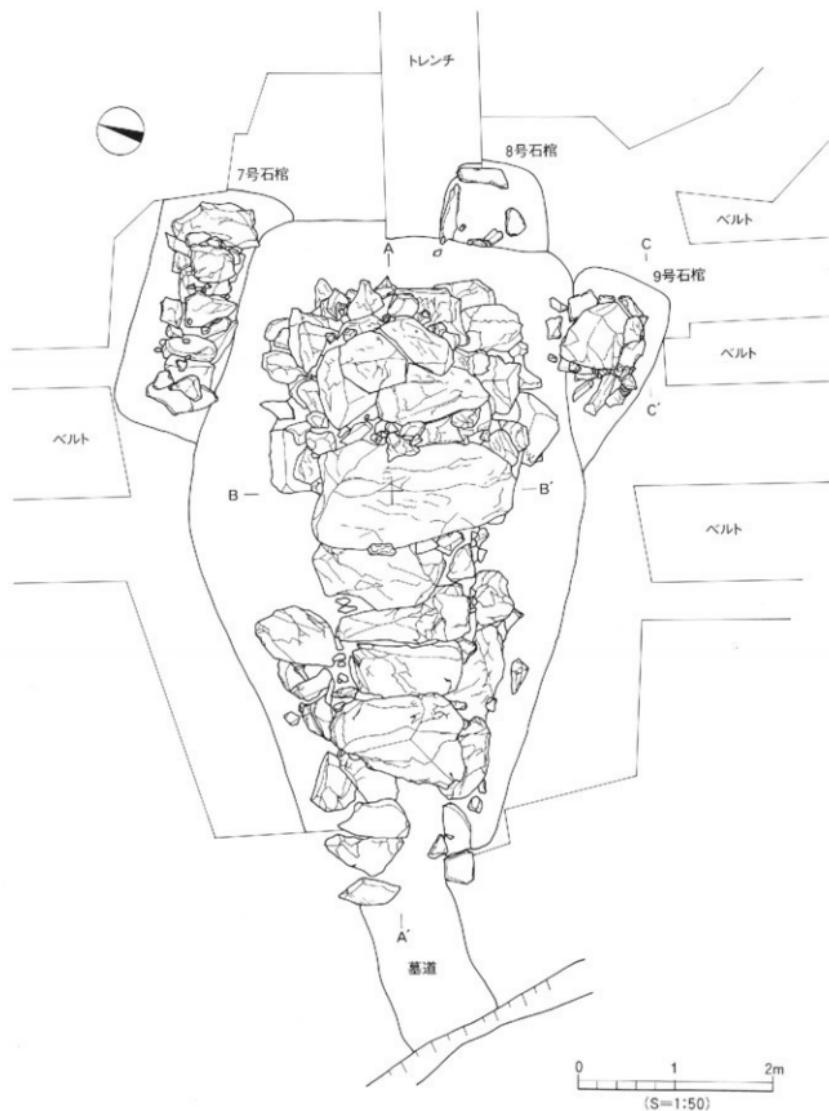
第8圖 濱戶風峰1号填埋丘土壤圖(2)

B 区の調査



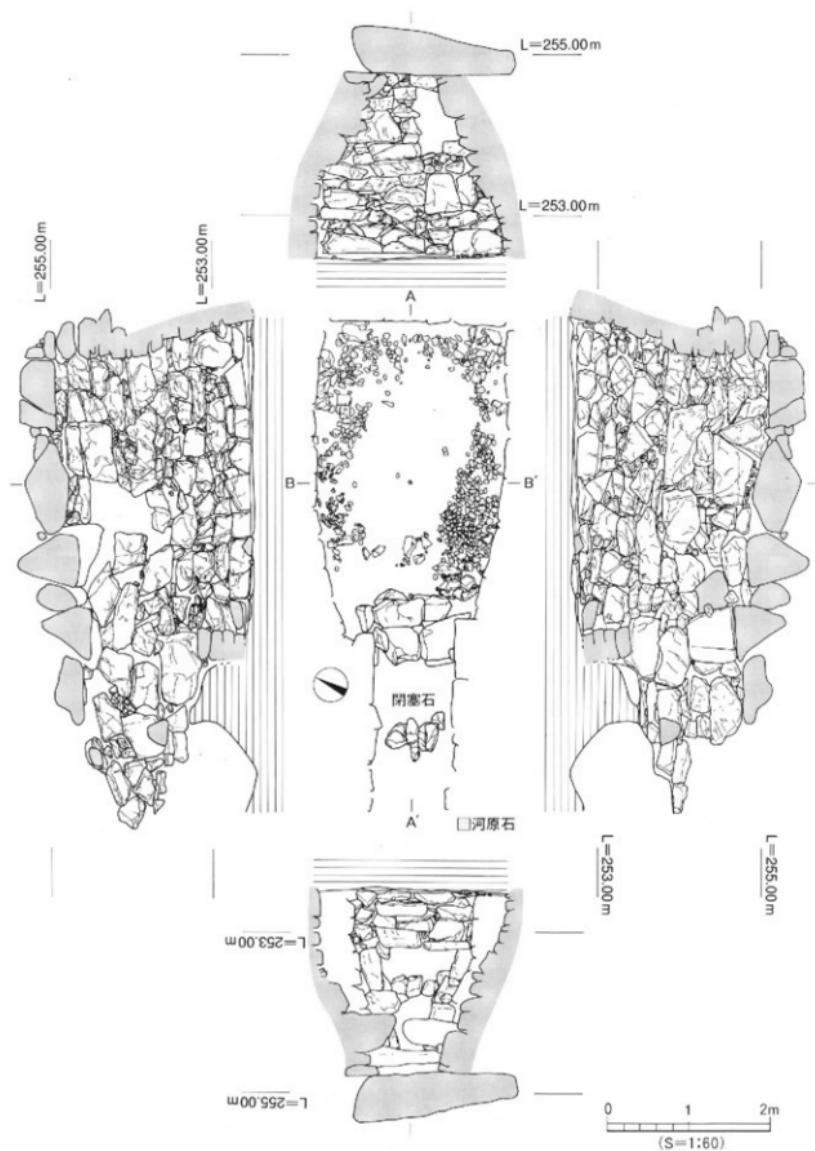
第9図 濑戸風峠1号填填丘土層図(3)

瀬戸風峠1号墳



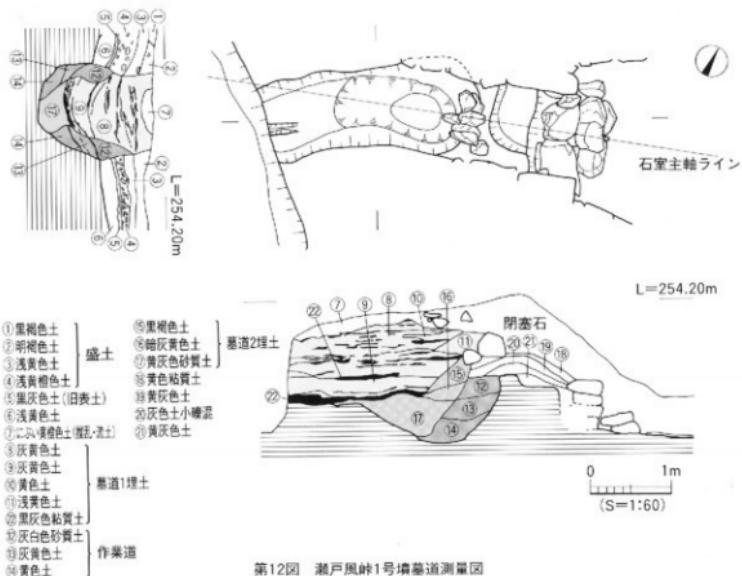
第10図 瀬戸風峠1号墳天井石測量図

B 区の調査



第11図 濑戸風峠1号填石室測量図

瀬戸風峠1号墳



第12図 瀬戸風峠1号墳墓道測量図

らない。漢道部の壁面は持ち送られ、玄門部に近い方では大ぶりの塊石を、入り口に近い方では小ぶりの塊石を積み上げている。天井部は、縦長の塊石が2枚遺存する。右側漢道部側壁は、地山面に掘えられ、左側壁は後述する作業道の埋土の上に構築されている。

漢道部の基底面には深く掘られた部分がある。この部分の埋土上には、漢道部の左側壁の基底石が据えられている。このことから、基底面に残る掘り方は、漢道部の壁体を構築する前に掘られたものとみてよく、石室構築時の作業道と考えた。作業道は漢道構築時には埋められており、初葬の際に一部が掘られていることを土層で確認した。掘り方の最下部は玄室の基底面より7cm程深い。作業道の横断面の形態は袋状となっている。

閉塞施設は漢道部に設けられる。樋石から漢道部へ1.22mの間には、高さ25cm~40cmの蒲鉾形状の盛り土がある。この盛り土は、玄室の樋石の背後から漢道部側の作業道の埋め土までにみられる。盛り土の上には閉塞石があり、人頭程のやや偏平な割石が用いられる。閉塞石は、現存で下部の1~2段が遺存し、上部は失われている。閉塞石と天井石との間には縦70cm、横35cm~80cm程の隙間がある。

(7) 墓道 (第12図)

墓道は漢道部の前面に1.60mが検出された。前庭部は現代に削平され失われている。墓道は石室主軸に対しやや南に振る。横断面土層の観察では2つの掘り方を検出し、さらに縦断面土層との比較検討により最終的に2つの墓道を確定した。墓道はそれぞれ新しいものから墓道1、墓道2と呼称する。

墓道1は、墳丘盛土上面から掘削され、墓道2を切り漢道部にとりついている。規模は幅0.85m~1.00m、深さ0.80m~1.00mを測る。墓道の埋土は漢道部西側の埋土からつづくもので、埋土中には

B 区 の 調 査

帯状の黒色土層が多数検出された。墓道2は墓道1よりも深く、閉塞部側では一段低く掘り込まれて、作業道を切っている。検出規模は幅0.50m、深さ1.00mである。

(8) 石室内の遺物出土状況（第13図）

遺物は玄室内と閉塞部から出土している。玄室の遺物には、須恵器、鉄製品と装飾品が出土している。土器は須恵器で占められ、土師器は1点も出土していない。遺物の出土状況は玄室右奥、玄室左奥、玄室南西隅に集中している。玄室右奥の遺物群からは須恵器、鉄製品、装飾品、玄室左奥の遺物群からは鉄製品と装飾品、玄室南西隅の遺物群からは須恵器と鉄製品が出土している。したがって、鉄製品は3地点、土器は2地点、装飾品は奥壁側の2地点で出土し、出土状況に違いがみられる。奥壁右側の遺物付近の土中からは少量の赤色顔料が採取されている。

閉塞部では、閉塞石の下、盛り土上面（第12図⑩）から管玉1点が出土している。

(9) 石室内出土遺物

須恵器（第14～17図）

坏蓋（1～3）

1は玄室袖部右側から出土した完形品である。口径14.0cm、器高3.9cmを測る。天井部は偏平で天井部と口縁部の境は不明瞭である。2・3は小片で流土からの出土である。

坏身（4～6）

4～6は玄室内の流土除去中に出土したもので出土位置が不明である。4・5は小片、6は1/2程度残っている。4のたちあがりは内傾して短くのびる。5はたちあがりは内傾して立ち上がり端部は丸くおさめる。6のたちあがりは内傾して上方に立ち上がり、端部は丸くおさめる。底部は丸い。

短頭壺（8・9）

8は玄室右奥、9は玄室袖部右側で出土したものである。8は口径9.2cm、器高14.0cmである。口縁部は短く外反し端部は下方に肥厚しやや丸みをもつ。9は口径12.2cm、器高15.0cmである。口縁部は短く外反し端部は丸い。胴部は偏球形で底部は丸い。

広口壺（7）

玄室袖部右側の出土である。口径14.9cm、器高22.9cmを測る。口縁部は外反し端部は稜をなす。口縁部に上下2条の波状文を施し、波状文下に2条の凹線を巡らす。肩部上に他土器片が融着する。

長頸壺（10）

10は玄室右奥での出土である。口径7.1cm、器高15.0cmを測る。口縁部は外傾して上方にのびる。口縁端部は丸い。胴上半の肩部には2条の凹線に区画された間に刺突文を施している。

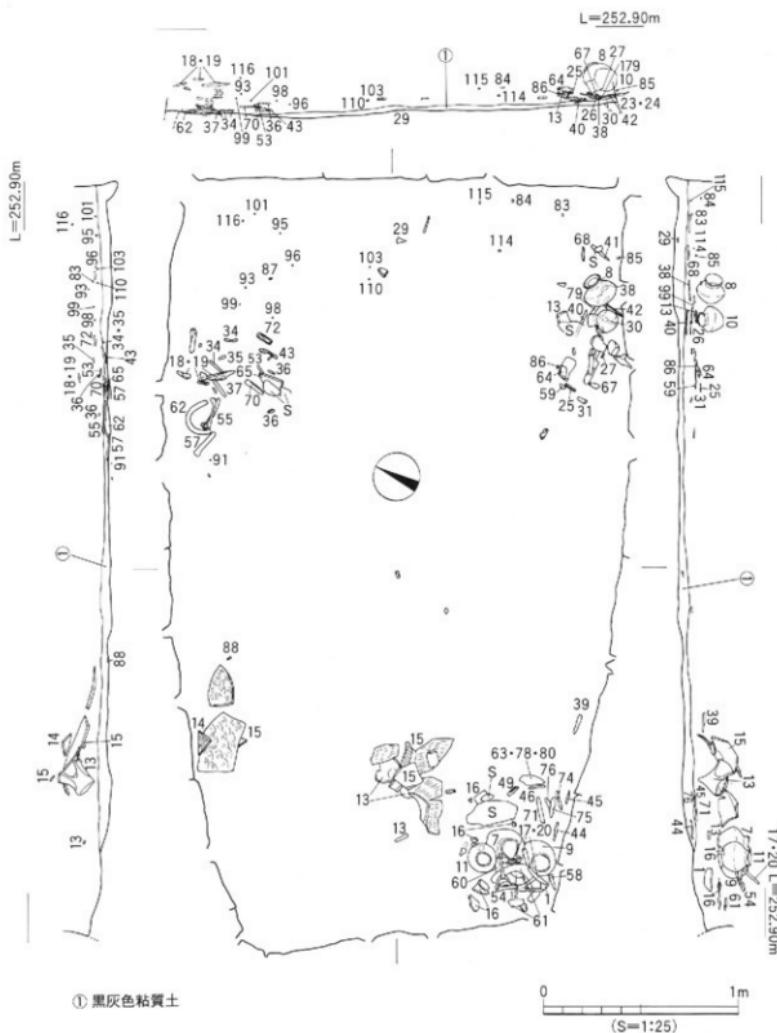
脚付短頭壺（11・12）

11・12は玄室袖部右側で出土したものである。11は口径8.6cm、器高15.9cmを測る。口縁部は直立して短くのびる。胴部中位に1条の凹線と肩部に2条の凹線が巡る。脚部は「ハ」字状に開き端部は内に接地する。脚端部は中央がくぼむ。12は口径8.4cmを測る。口縁部は直立して上方にのびる。

脚付壺（13）

13は玄室袖部側中央での出土である。胴上半から口縁部までが欠失しているため全体の形は知れないと、ここでは壺として扱った。胴部と脚の接合部は稜を有する。脚部は焼き歪んでいるため製作時

瀬戸風峠1号墳



第13図 瀬戸風峠1号墳石室内遺物測量図

B 区の調査

の形態が正確にはつかめない。現況での脚は中央部から外反して開き端部近くで短く内湾したのち端部で短く外反する。

壺 (14・15)

14・15は玄室袖部よりの中央での出土で、口縁部から胴上半にかけての破片である。両土器とも石室内からは底部片の出土はない。14は推定口径21.4cmを測る。口縁部は肥厚し端部は丸い。15は推定口径46cmの大壺である。口縁部は外反して開き、端部は上下に拡張する。口縁部には2条の沈線で区画した上下2段に刺突文を施している。

器台 (16)

玄室袖部右側での出土である。脚部のみの出土で焼き歪みが著しい。脚には波状文を施したち三角形のスカシを施す。

鉄製品 (第18~26図)

大刀 (17~21)

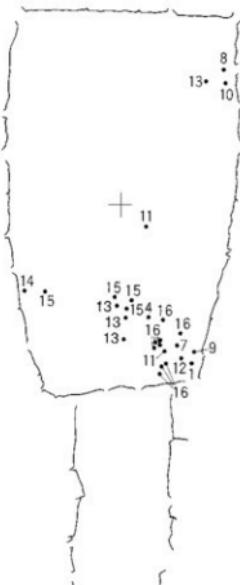
18・19は玄室奥左側、17・20・21は玄室袖部右側での出土である。18・19は同一のものと思われるが出土状況は散在していた。18・19は鋒化と剝離が著しい。刀身部と思われるが、切先、茎部は遺存していない。刀身幅は少なくとも3.6cm以上あるものと思われる。17・20も同一のものと思われるが出土時は折れており、互いに直交する形で出土している。17は把部から刀身にかけての遺存である。20は刀身部と思われる。21は無窓の鐔で倒卵形を呈する。長径7.5cm、短径6.0cmを測る。

鉄鎌 (22~53)

22~25は三角形箇板平根鎌である。22~25とも玄室奥右側での出土である。26~33は鑿頭式平根鎌である。26~28、30~32は玄室奥右側、29は玄室中央奥壁側、33は玄室奥左側での出土である。31の茎は欠失しているが、その他の茎には木質が遺存している。34~53は細根の長頭鎌である。鎌身が残るものについては鋒化が著しく正確には把握しきれないが片刃形式のもの34・36・38~47があり、柳刃形式と考えられるもの35・37・48がある。49は48と同一のものと思われる。茎部が遺存するものには全て木質が残っている。また、41・42・49・51は樹皮を巻いた痕跡が看取される。

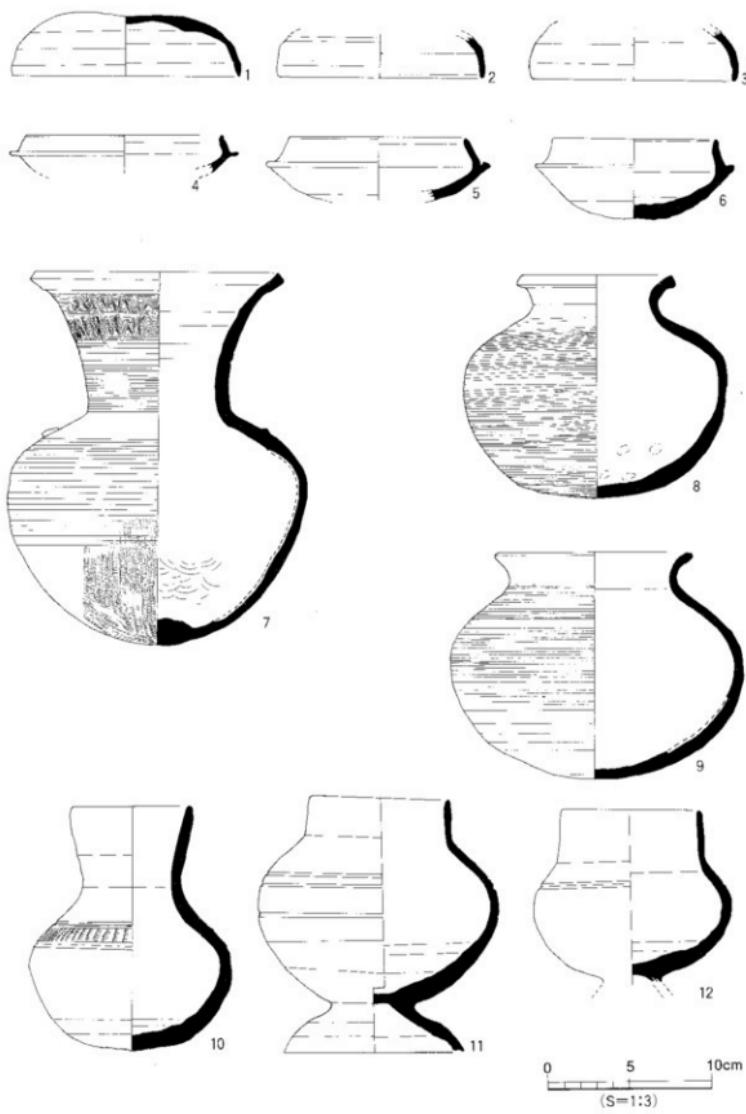
轡 (54~55)

54は玄室袖部右側の出土である。鋒化と剝離が著しいが鏡板・引手が完存している。鏡板は外径8.0cmの素環である。鉄棒の両端を曲げて環にした長さ9.3cmのものを2本繋げたものである。引手は径1.3cmを測る鉄棒の両端を折り曲げ環にした長さ17.0cmのもので、環によって鏡板と連結している。鏡板に繋がらない側は角度をもって曲げられている。立闘は2連の鎖で構成される。55は玄室奥左側で出土したもので、54より小型である。鏡板・引手が完存している。鏡板は外径6.1cmの素環である。柄は鉄棒の両端を曲げて環にした長さ8.3cmのものを2本繋げている。引手は径1.1cmの鉄棒の両端を折り曲げ環にした長さ15.5cmのもので、環によって鏡板と繋がっている。鏡板に繋がらない側は角度



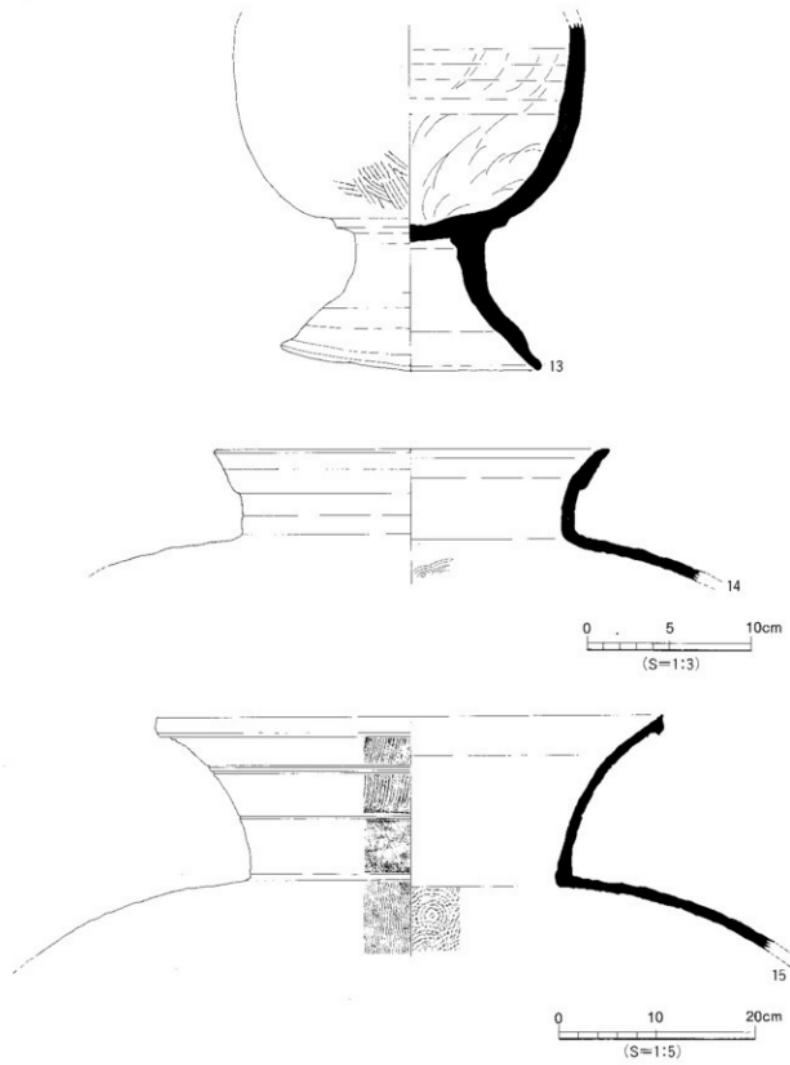
第14図 深戸廻崎1号墳石室内土器分布図 (S=1:50)

瀬戸風峠1号墳



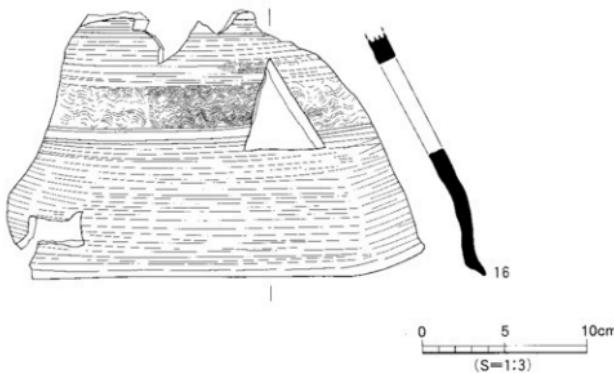
第15図 瀬戸風峠1号墳石室内出土遺物実測図(1)

B 区の調査



第16図 濑戸風峠1号墳石室内出土遺物実測図(2)

瀬戸風峠1号墳



第17図 瀬戸風峠1号墳石室内出土遺物実測図(3)

をもって曲げられている。

鎌 (56~59)

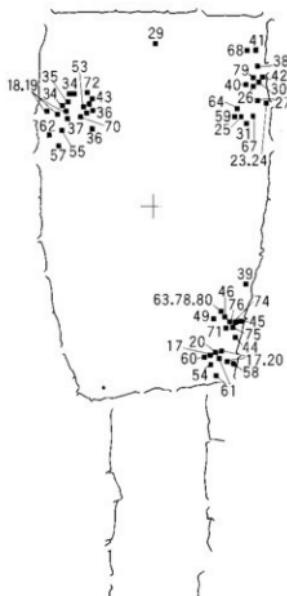
56・58は玄室袖部右側で出土したものである。56は先端部が湾曲する曲刃鎌である。全長16.4cm、幅3.1cmを測り、着柄部には刃部に対して直角の折り返しがある。58も曲刃鎌であるが刃先は欠失している。着柄部には木質が残っている。57は玄室奥左側で出土している。先端部が湾曲する曲刃鎌である。全長16.2cm、幅3.0cmを測る。59は刃先の破片で、玄室奥右側で出土している。

鍔・鍔先 (60~62)

60~62はU字形刃先で内側にV字溝を有し、V字溝内側には木質が残っている。60は長さ23cm、刃幅20.5cmを測る。61は長さ21.3cm、刃幅17.2cmを測る。61・62は玄室袖部右側で54の轡と供に出土している。62は長さ17.3cm、刃幅17.0cmを測る。玄室奥左側の出土で55の轡と共に出土したものである。

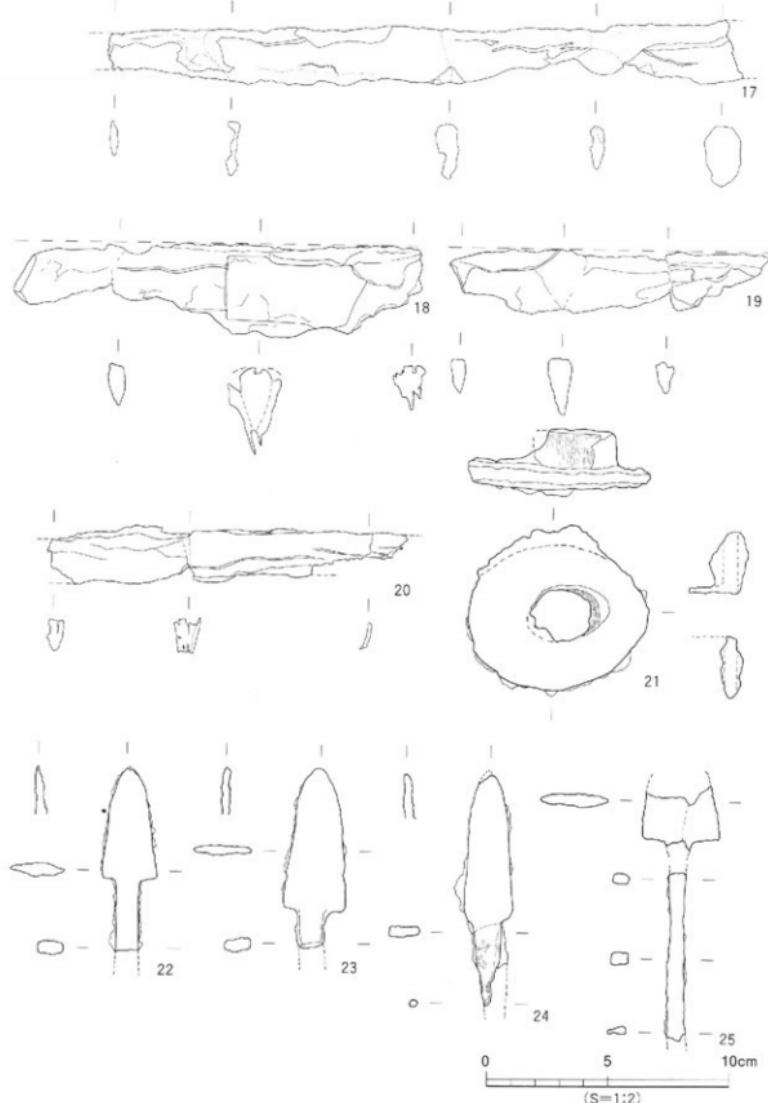
鉄斧 (63~65)

63は玄室袖部右側で出土したものである。長さ14.7cm、幅5.9cm、厚さ3.6cmを測る。着柄部は袋状となっており木質が残る。袋部折り曲げのつき合わせ部は鏽のため明確に見られない。64は玄室奥右側で出土



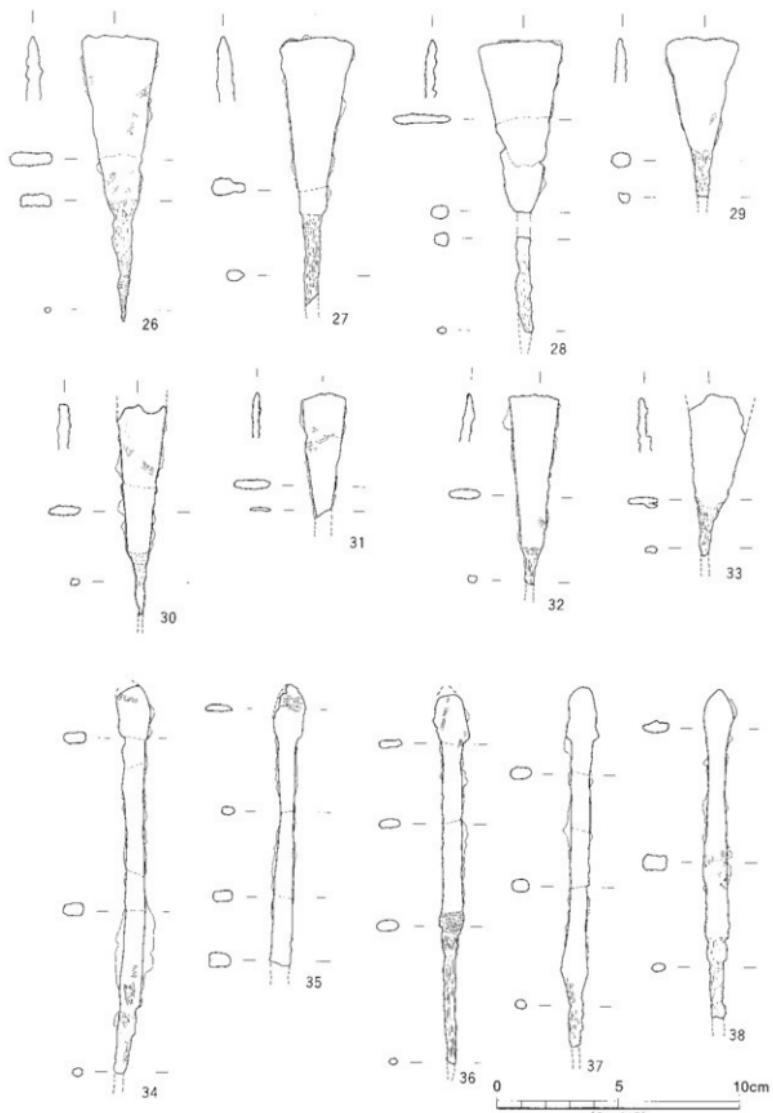
第18図 瀬戸風峠1号墳石室内鐵器分布図 (S=1:50)

B 区 の 調査



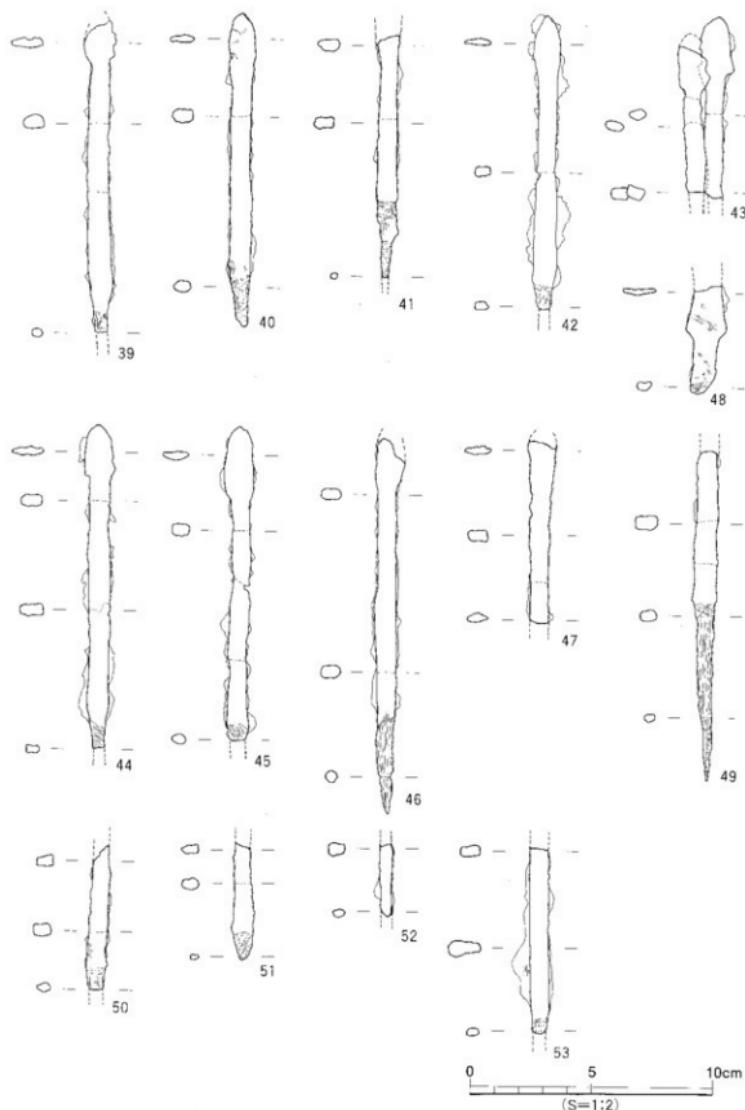
第19図 潤戸風峯1号墳石室内出土遺物実測図(4)

瀬戸風峠1号墳



第20図 瀬戸風峠1号墳石室出土遺物実測図(5)

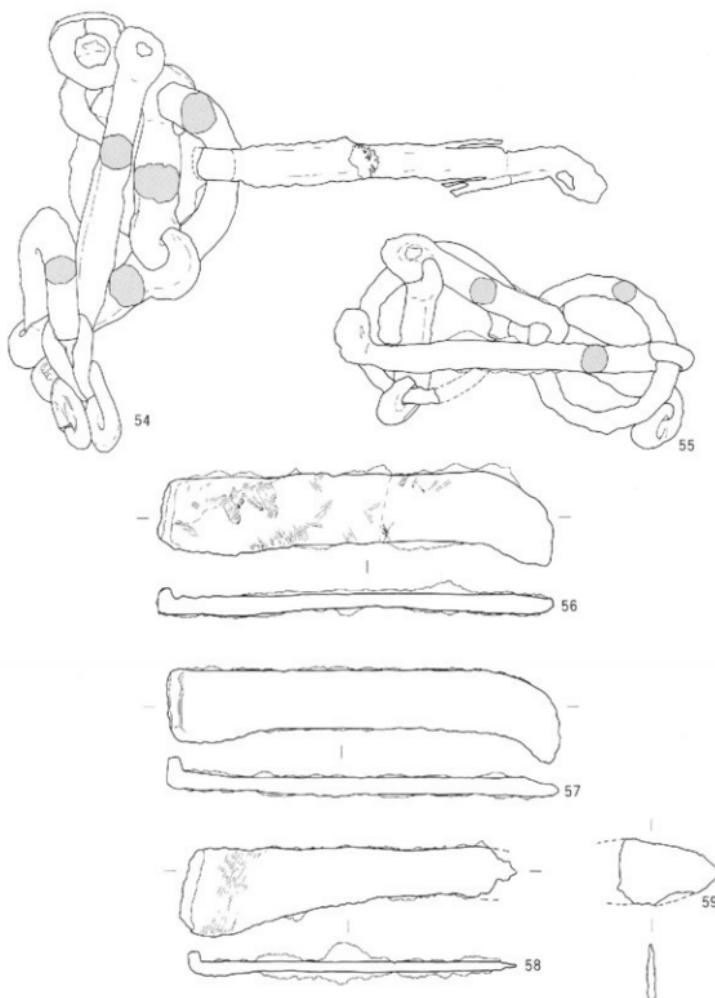
B 区の調査



第21図 濱戸風呂1号墳石室内出土遺物実測図(6)

瀬戸風峠1号墳

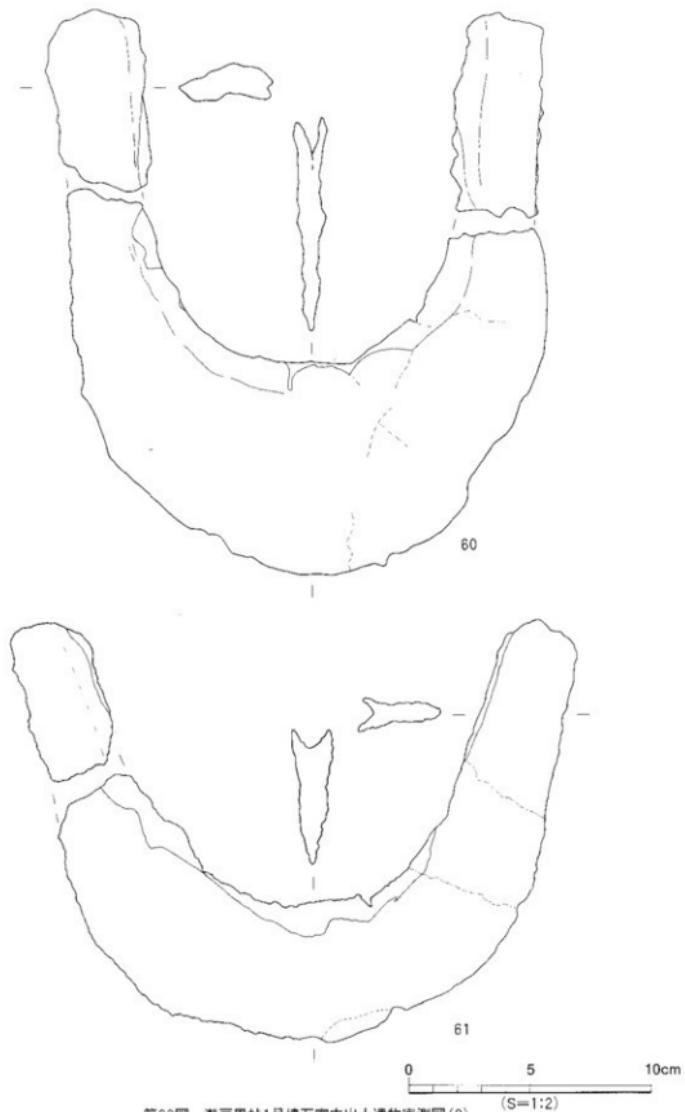
■断面



0 5 10cm
(S=1:2)

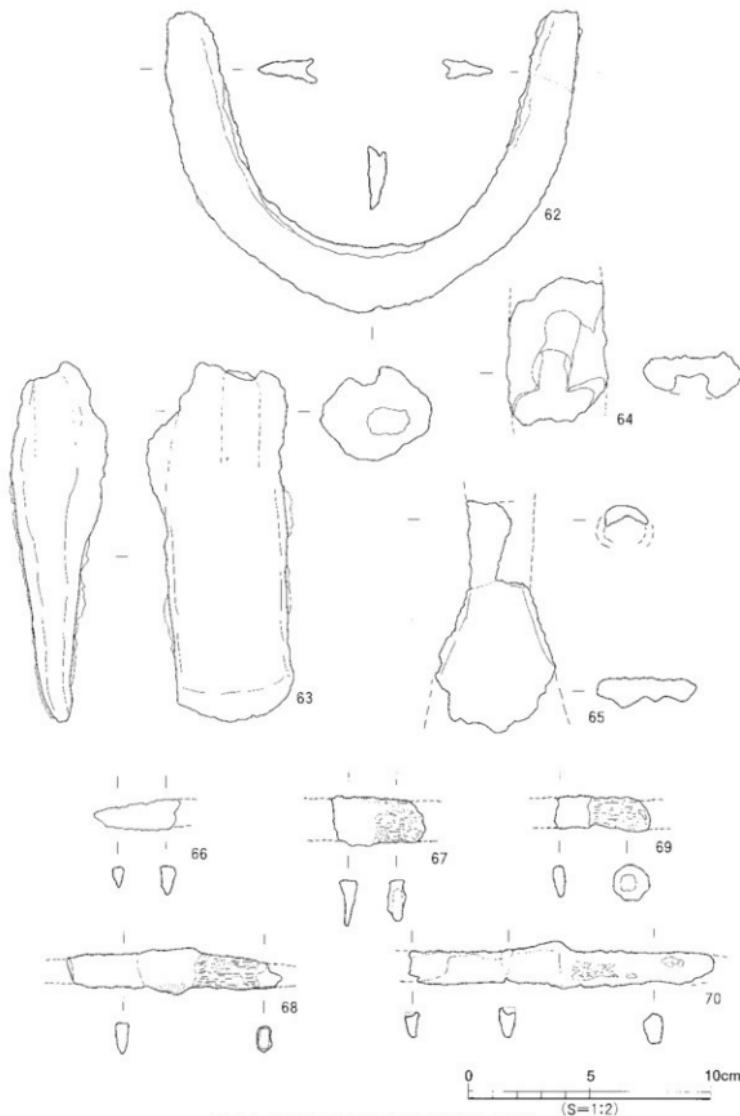
第22図 濑戸風峠1号墳石室内出土遺物実測図(7)

B 区の調査



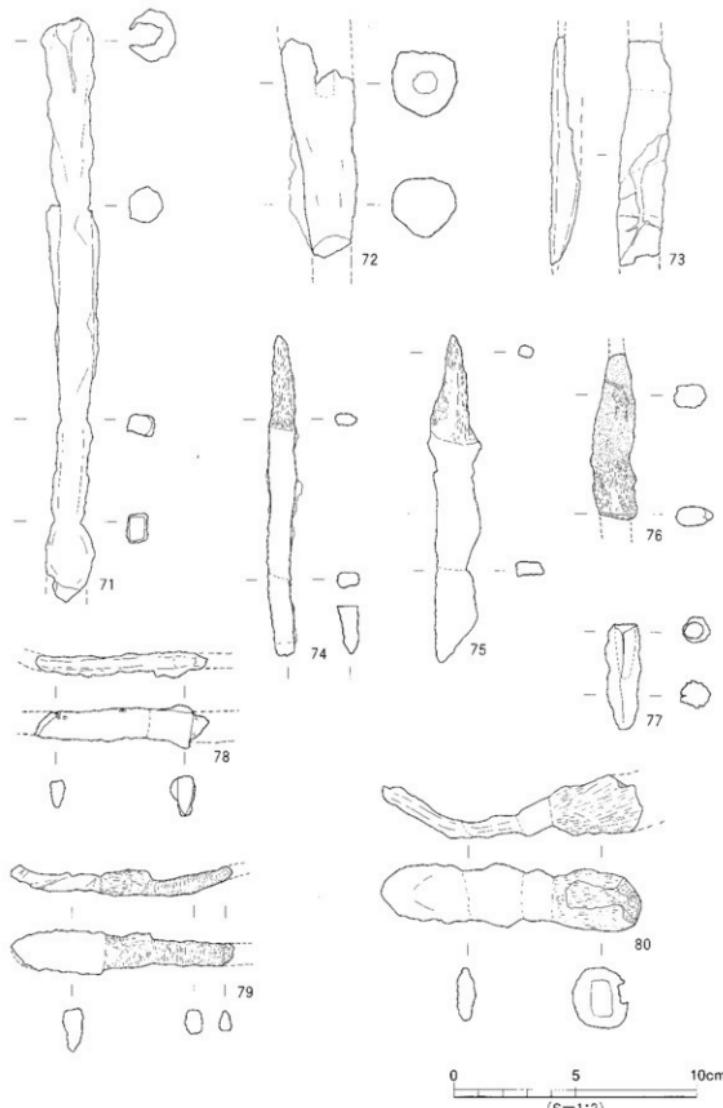
第23図 濑戸廻軒1号埴石室内出土遺物実測図(8)

瀬戸風峠1号墳



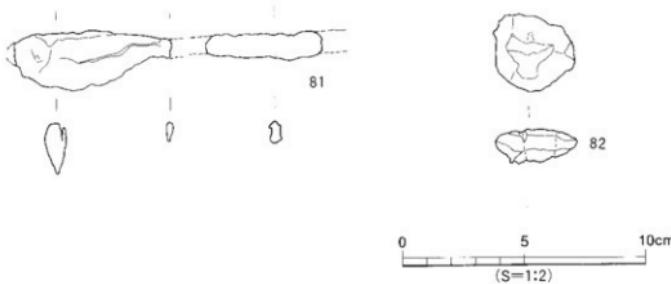
第24図 瀬戸風峠1号墳石室内出土遺物実測図(9)

B 区の調査



第25図 濑戸風呂1号墳石室内出土遺物実測図(10)

瀬戸風呂1号墳



第26図 瀬戸風呂1号墳石室内出土遺物実測図(11)

したものである。着柄部片で刃部は欠失している。65は玄室奥左側で出土したものである。有肩で着柄部の一部と刃部は欠失している。

刀子 (66~70)

66は現存長3.6cmの刃部片である。67~70は刃部から柄部にかけての破片である。柄部には木質が残っている。

鑿 (71~77)

71~77は鑿、または鑿と思われる片である。71は玄室袖部右側からの出土で、長さ23.9cmで柄部は逆円錐状の、折り曲げによる袋部がある。柱状身部断面は柄方向は円形で刃方向は方形となっている。刃部は欠失している。72は柄部で折り曲げのつきあわせ部が観察できる。73は片刃と思われる刃部片である。74は長さ13.1cm、幅1.1cm、厚さ0.6cmを測る。刃部は両刃である。75・76は茎形式のものである。77は折り曲げによるつきあわせ部である。

鉈 (78~80)

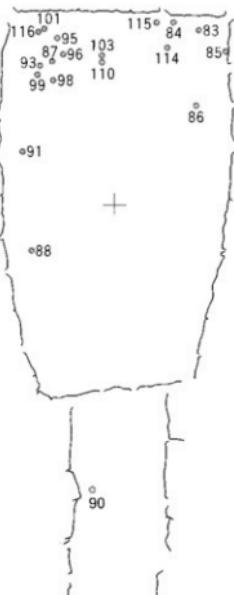
78は刃部片で先端部で曲がるのが観察できる。79の刃部は長さ3.8cm、幅1.8cmを測り、茎部は木質が残っている。80の刃部は長さ7.0cm、幅2.0cmを測る。断面長方形の茎部には木質が良好に遺存している。

不明品 (81・82)

81は断面長方形の柱状身部に半月形の刃部がつくものであるが剝離の影響で刃状になっているものと考えられる。82の平面形は直径3.4cmの円形を呈し、鏽化が著しい遺物である。

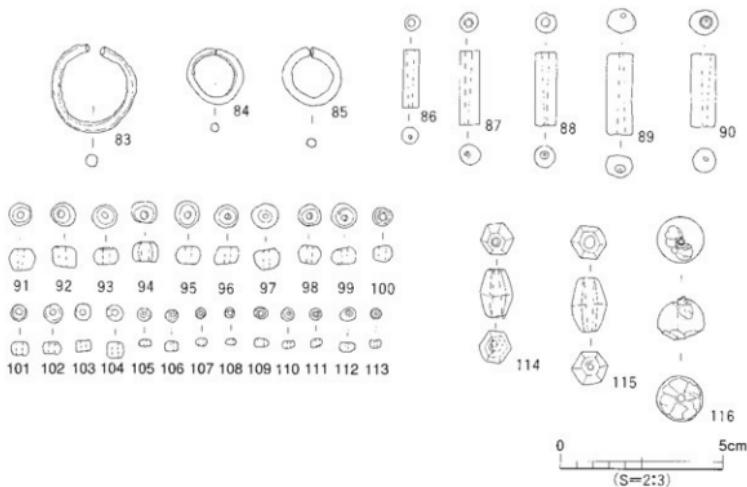
装飾品 (第27・28図)

耳環3点、管玉5点、ガラス製の丸玉・小玉23点、切小玉



第27図 瀬戸風呂1号墳石室内装飾品分布図 (S=1:50)

B 区の調査



第28図 濑戸風呂1号墳石室内出土遺物実測図(12)

2点、不明玉1点が出土している。

耳環 (83~85)

83は腐食が激しく緑銅が部分的に観察され、銅芯であることは間違いないようであるが、金張りになるのか銀張りになるか現時点では不明である。83の重量は2.33 gを測る。84・85の色調は黒灰色を呈し緑銅はみられない。恐らく銀製になるものと思われる。84の重量は1.14 g、85の重量は1.80 gを測る。

管玉 (86~90)

86~90はいずれも碧玉製で色調は暗緑色である。86~89は玄室内、90は閉塞石の下から出土したものである。86は長さ1.80cm、幅0.50cmを測る。87は長さ2.32cm、直徑0.65cmを測る。88は長さ2.28cm、直徑0.64cmを測る。89は長さ2.50cm、直徑0.80cmを測る。90は長さ2.28cm、直徑0.78cmを測る。

丸玉・小玉 (91~113)

すべてガラス製の丸玉、小玉で23点出土している。91~104は色調が濃青色の丸玉で、直徑は0.80cm~0.50cm、重量0.67 g~0.14 gを測る。105~113は小玉である。色調は105~107・110は濃青色又は青色を呈し、108・112は緑色、109・111は水色、113は黄色である。直徑は0.40cm~0.30cm、重量0.08 g~0.03 gを測る。

切子玉 (114~115)

114・115とも水晶製である。114は長さ1.52cm、最大幅1.0cm、重量1.86 gを測る。115は長さ1.70cm、最大幅1.10cm、重量2.26 gを測る。

不明玉 (116)

116は玄室床面から遊離した玄室内流入土中での出土である。116は円形を呈し、外面は赤桃色、内

画は白色で陶製と思われる。中心部には細い銅管が差し込まれている。銅管が差し込まれている両端は削痕がある。近現代の遺物と思われる。

(10) 石室外出土遺物

出土した遺物すべてが墳丘上の表採品で、須恵器、切小玉が出土している。墳丘盛土中から出土した遺物は無い。

須恵器（第29・30図）

壺蓋（117～119）

117は天井部が欠失している。天井部と口縁部の境は凹線によって丸い稜となっている。口縁端部は尖る。118は口縁部片で天井部と口縁部の境には凹線が巡る。119は口縁部片で天井部と口縁部の境は不明瞭である。

壺身（120～125）

120のたちあがりは内傾して端部近くで上方にのびる。たちあがり端部は丸い。受部はやや上方に短くのび、底部は丸い。121のたちあがりは内湾して上方にのびる。受部は水平で底部は平坦である。122のたちあがりは内傾して短くのびる。底部は欠失している。122のたちあがりは内傾して短くのびる。123のたちあがりは内傾し端部は丸い。受部は上方にのびる。124のたちあがりは内傾したち端部近くで上方にたちあがる。たちあがり端部は丸い。125のたちあがりは内傾し短くのびる。受部は水平にのびる。

広口壺（126・127）

126・127は広口壺の口縁部片である。126の口縁端部外面には櫛状工具による刺突文を施し、口縁部には3条と2条の凹線で区画された文様帶には2条の波状文が施される。

壺（128）

128は口縁部片で口縁端部は外方に肥厚し丸くおさめる。

装飾壺（129）

129は子持壺の破片である。

壺（130～132）

130は口縁部片である。口縁端部は丸く、端部直下に1条の凸帯が巡る。131は口縁部片で口縁端部の形態は断面方形である。口縁外面には浅い凹線で区画された文様帶に上下2条の波状文を施している。132は壺の胴部片である。内面には円弧の叩き目を残し、外面には格子状の叩き目を残す。

器台（133）

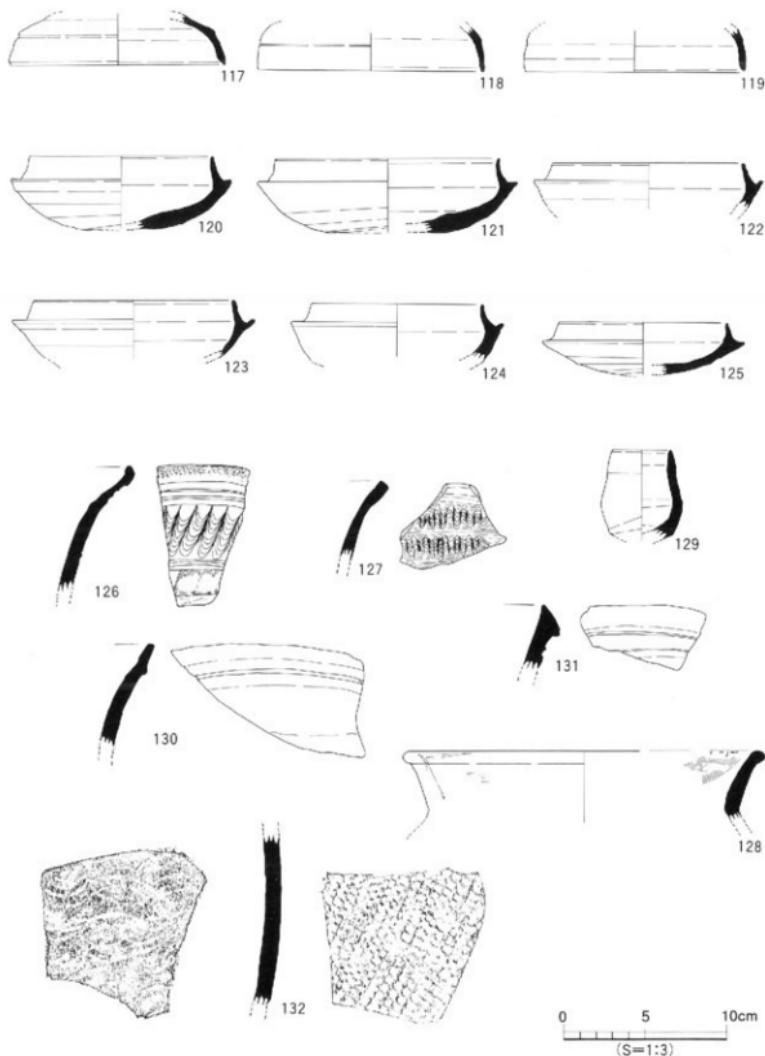
133は器台受部片である。口縁端部は屈曲し短くのびて丸くおさめる。口縁端部直下に1条の凸帯を巡らしている。外面には2条の凹線で区画された文様帶に波状文を施している。

装飾品（第30図）

切小玉（134）

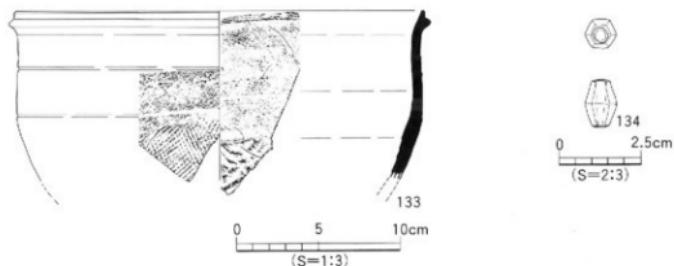
134は奥壁天井部上の表土で表採したものである。水晶製で長さ1.46cm、最大径1.0cm、重量1.58gを測る。

B 区 の 調 査



第29図 濑戸風呂1号墳石室外出土遺物実測図(1)

瀬戸風岬3号墳



第30図 瀬戸風岬1号墳石室外出土遺物実測図(2)

3. 瀬戸風岬3号墳

(1) 位置と現状

瀬戸風岬3号墳は、1号墳と同じ丘陵の南40m（石室間）にあり、馬の背状となった尾根線が緩傾斜から急傾斜に変わった傾斜変換点上、標高250mに立地する。主体部の南側は、急峻な傾斜となり谷につづいている。

主体部が位置する場所は窪地となり、石室の西側は農道の建設時に大きく削られ、石室中央部には農業灌水用パイプが横断し、天井石や壁体などはひどく破壊されていた。墓坑の西側には、方形の割石上に2基1対の小祠が祭られていた。

(2) 墳丘

盛土は現代の地形改変により既に消失し、盛土の構造や範囲は確認できなかった。また、周溝などの外部施設も検出されず、したがって墳形と規模は不明である。

主体部の西側は段状に削られ、小祠が祭られている。その前面からは、須恵器の広口壺1点が地山直上で出土した。北側には近現代坑があり、坑中からは花崗岩の小ぶりな割石が数点検出された。

(3) 主体部

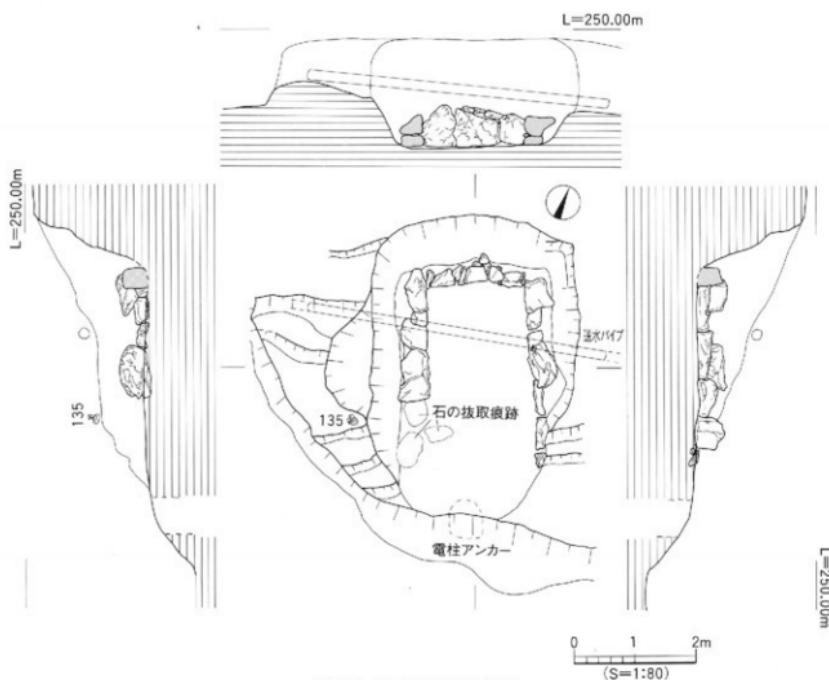
主体部は、南側に開口する横穴式石室で、主軸方位はN 8°Wにとり、石室規模は現存長3.70m、幅1.68mを測る。玄門部から前庭部までは現代に削平され失われている。

壁体の遺存状況は奥壁、側壁とも基底石の1段を残すのみで、側壁は奥壁から玄門へむけて3m程度が検出されたにすぎない。壁体に使用された石材はすべて花崗岩である。左側壁部分には基底石の抜き取り痕跡が2ヶ所と、その並びから石室内に飛び出した抜き取り痕跡が1ヶ所ある。後者の痕跡が袖部を構成したものと想定すれば玄室長は2.30m程度となる。

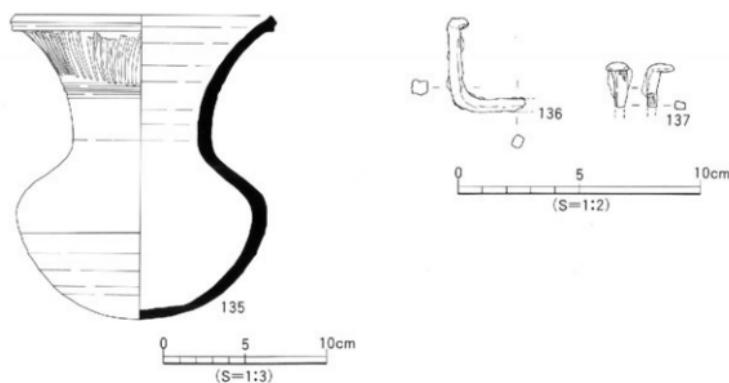
墓坑は、丘陵尾根筋の後背面を大きく削平し、地山層を掘り下げる。平面形態は、現況で隅丸長方形を呈する。検出規模は長さ4.40m、幅3.30m、深さ1.76m（奥壁側最深部）を測る。

遺物は、床面が削平されているため、何も検出できなかった。ただし、石室内埋土の洗浄中に釘が2点見つかっている。詳しい出土位置はわからない。

B 区の調査



第31図 濑戸風崎3号墳測量図



第32図 濑戸風崎3号墳出土遺物実測図

石蓋土坑墓

(4) 出土遺物

須恵器（第32図）

広口壺（135）

135は墓坑西側の小祠付近から出土したもので、石室内に副葬されていた可能性が高い遺物である。口縁部の一部が欠失しているが、ほぼ完形品で、口径15.5cm、器高18.7cmを測る。口縁端部の外面直下には1条の突帯を巡らし、口縁部外面には斜位のヘラ彫文を施している。

鉄製品（第32図）

鉄釘（136・137）

136・137は調査終了後に石室内の埋土を洗浄し、見つかったものである。136・137の釘頭は押しつぶして広げたもので、2点とも釘先は欠損している。断面形態は136が方形、137が長方形を呈する。136の棒状部は直角に曲がり、137には木質が残る。

4. 石蓋土坑墓

(1) 3号石蓋土坑墓（第33図）

1号墳と3号墳との間、3号墳の北7.5mに位置し、尾根線が平坦面となった標高250mに立地する。主軸方位はN54°Eにとる。

蓋石は、花崗岩の割石を7枚使用し横架する。西側の墓坑上には石蓋が見られないが、これは後世に抜き取られたものである。蓋石の隙間に大小の花崗岩を使用し、根詰めを行っている。蓋石の上からは、粘土は検出されていない。

墓坑は、尾根線に直交して地山層を2段に掘り込む。外側の掘り方は東西が削平され、平面形態と長さは不確定であるが、現況の規模は東西長2.04m、南北幅2.00m、深さ0.10mを測る。下部の掘り方は、平面形態は西側の幅がやや狭く舟形状になる。規模は長さ2.50m、幅0.80m～0.50m、深さ0.40mを測る。墓坑下部の断面形は逆台形状となるが、北側の掘り方は南側のそれに対して角度を浅くして掘られている。木質及び木棺痕跡は検出されず、棺構造は不明である。

遺物は、耳環が1点出土している。この遺物は調査後の土洗いで確認したもので、棺部の東側で採取した埋土から出土している。

(2) 出土遺物（第34図）

耳環（138）

138は銅芯銀張製の耳環である。銀張りが剥離している部分もあるがほぼ完形である。縦1.90cm、横1.70cm、径0.20cm、重量0.38gを測る。

5. 箱式石棺

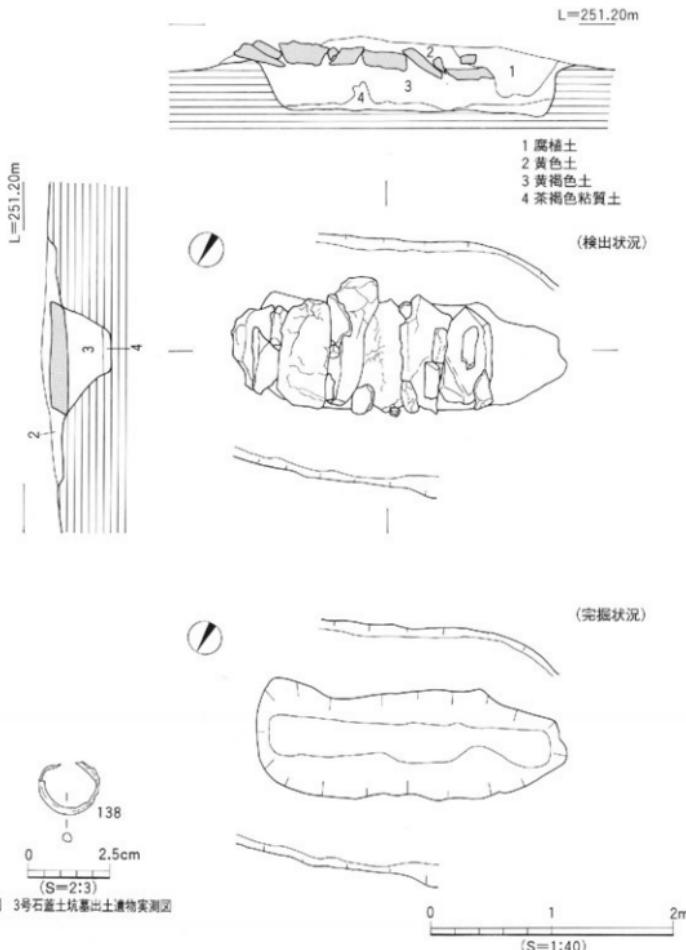
(1) 4号箱式石棺（第35図）

4号箱式石棺は、1号墳主体部の西23m、尾根線平坦部に位置し、1号墳から約8m下った標高248mに立地する。上部は削平され、蓋石は全て失われている。石棺の主軸方位はN90°Eである。石棺の

B 区の調査

規模は内法で長さ1.38m、幅0.22m～0.30m、高さ0.24m～0.30mを測る。石材は花崗岩の割石が使用されている。床面施設は検出していない。

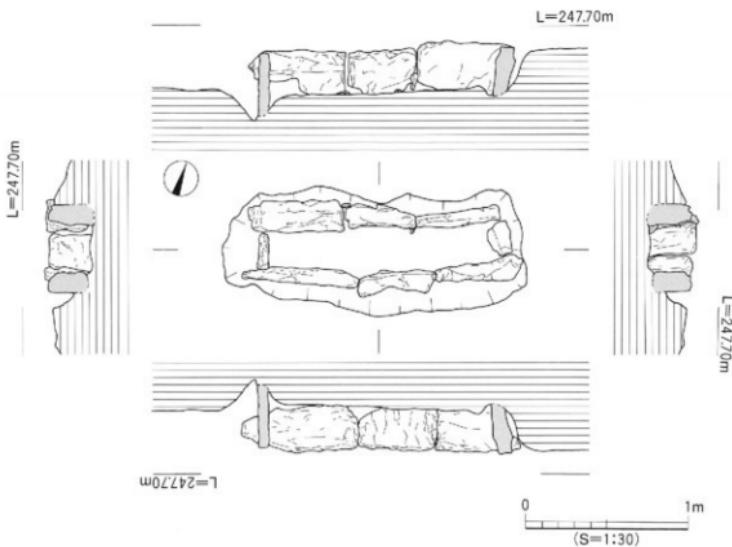
墓坑は、尾根の稜線に平行して地山を掘り込み、墓坑の両小口部は一段深く掘られている。平面形態は隅丸長方形を呈する。検出規模は長軸1.86m、短軸0.69mを測る。出土遺物は棺内、棺外とともにない。



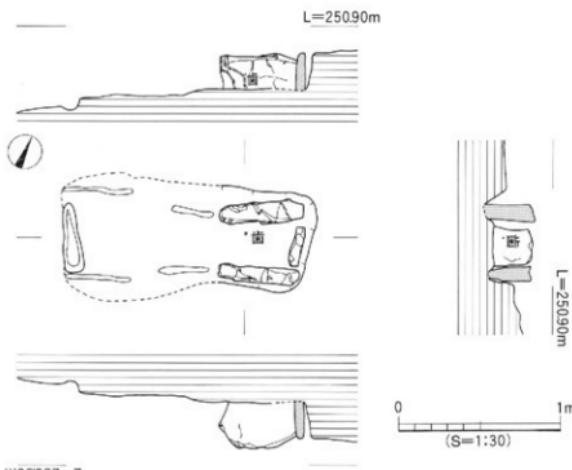
第34図 3号石蓋土坑墓出土遺物実測図

第33図 3号石蓋土坑墓測量図

箱式石棺



第35図 4号箱式石棺測量図

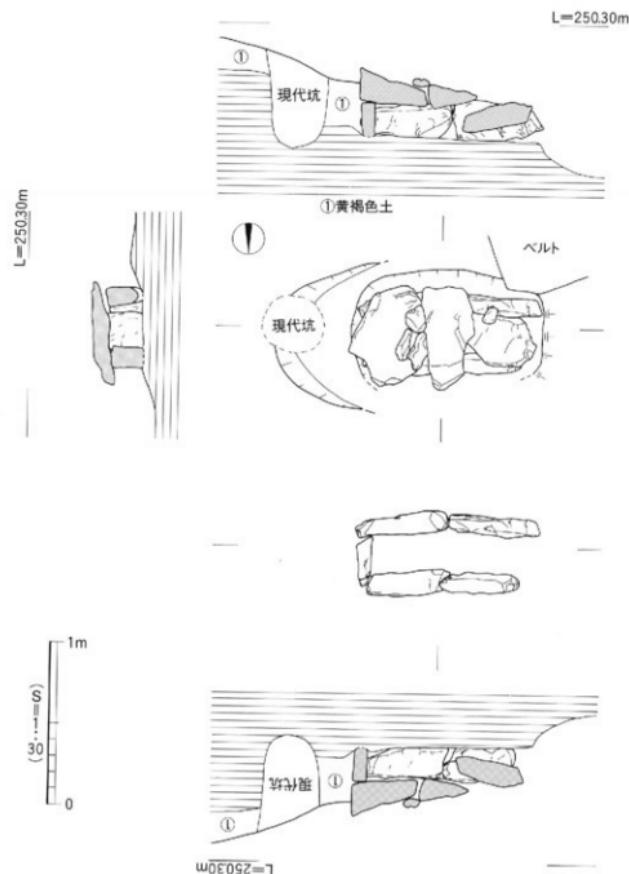


第36図 5号箱式石棺測量図

B 区の調査

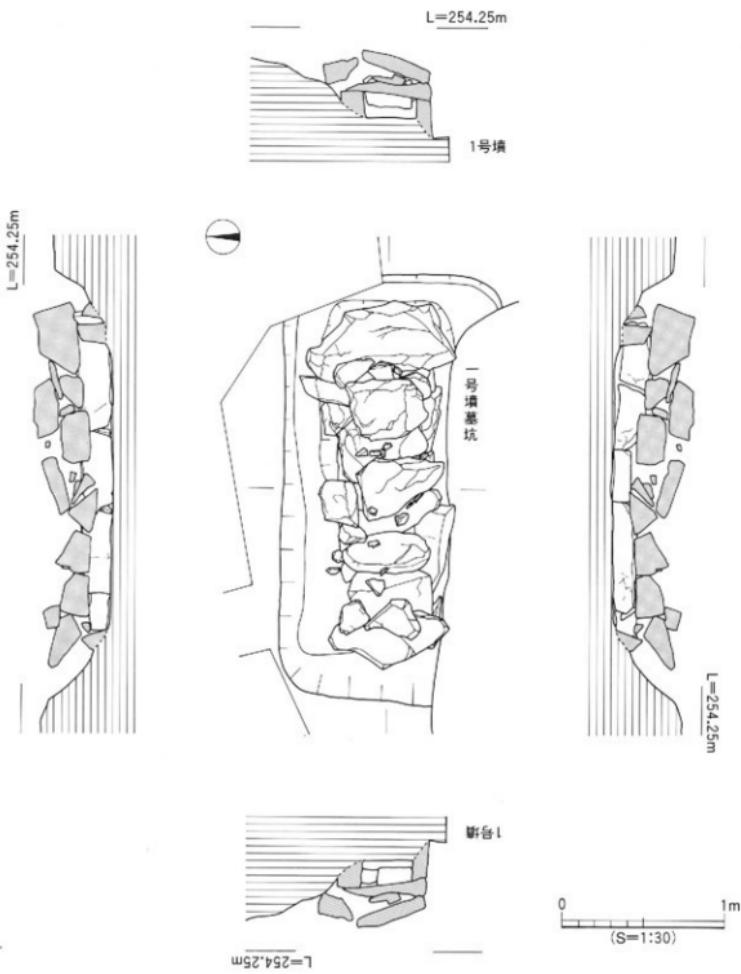
(2) 5号箱式石棺 (第36図)

5号箱式石棺は、3号石蓋土坑墓から南3mにあり、標高は250.7mである。石棺の主軸方位はN 90° Eになる。蓋石は全て失われ、石棺は東側の1/3が遺存しているにすぎない。西側2/3は石棺が抜き取られているが、抜き取り痕跡は検出している。石棺の規模は内法で長さ1.33m、幅0.24m～0.40m、高さ0.30mを測る。石棺の幅は抜き取り痕跡では、西側が広くなっている。両側壁と小口部の石材には花崗岩の割石を使用している。床面施設は検出していない。棺内東側で小児の歯が出土している。それ以外の遺物は出土していない。墓坑は西側2/3が失われている。検出規模は長さ50cm、幅60cm、深さ15cm～22cmを測る。



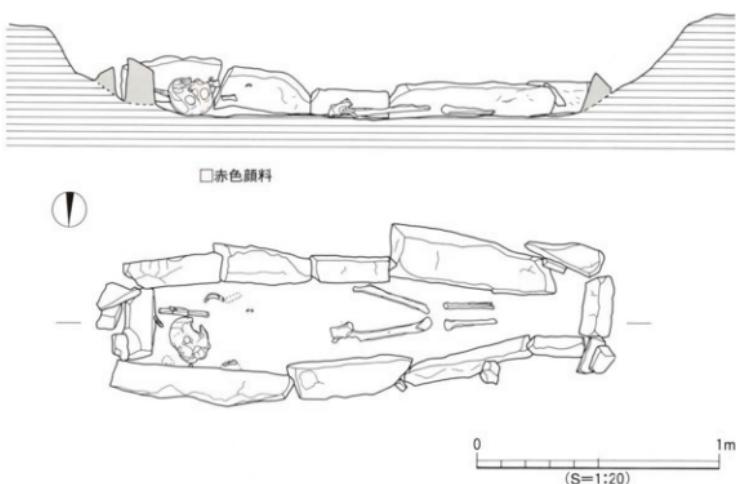
第36図 5号箱式石棺測量図

箱式石棺



第38图 7号箱式石棺测量图

L=254.25m



第39図 7号箱式石棺人骨測量図

(3) 6号箱式石棺 (第37図)

6号箱式石棺は、1号墳から西13m、1号墳墳頂部との比高差は5mを測り、標高250mに立地する。石棺の周囲は近現代に削平され、石棺は西側1/3が失われている。石棺の主軸方位はN109°Eである。蓋石は3枚を横架しているが、西側の1枚は棺内へ落下している。石棺の現存規模は内法で長さ1.05m、幅0.24m、高さ0.24mを測る。石材は花崗岩の割石と塊石を使用している。床面施設はなく、遺物は出土していない。

墓坑の全容は知れないが、東側が検出されている。検出規模は長さ60cm、幅90cm、深さ35cmを測る。

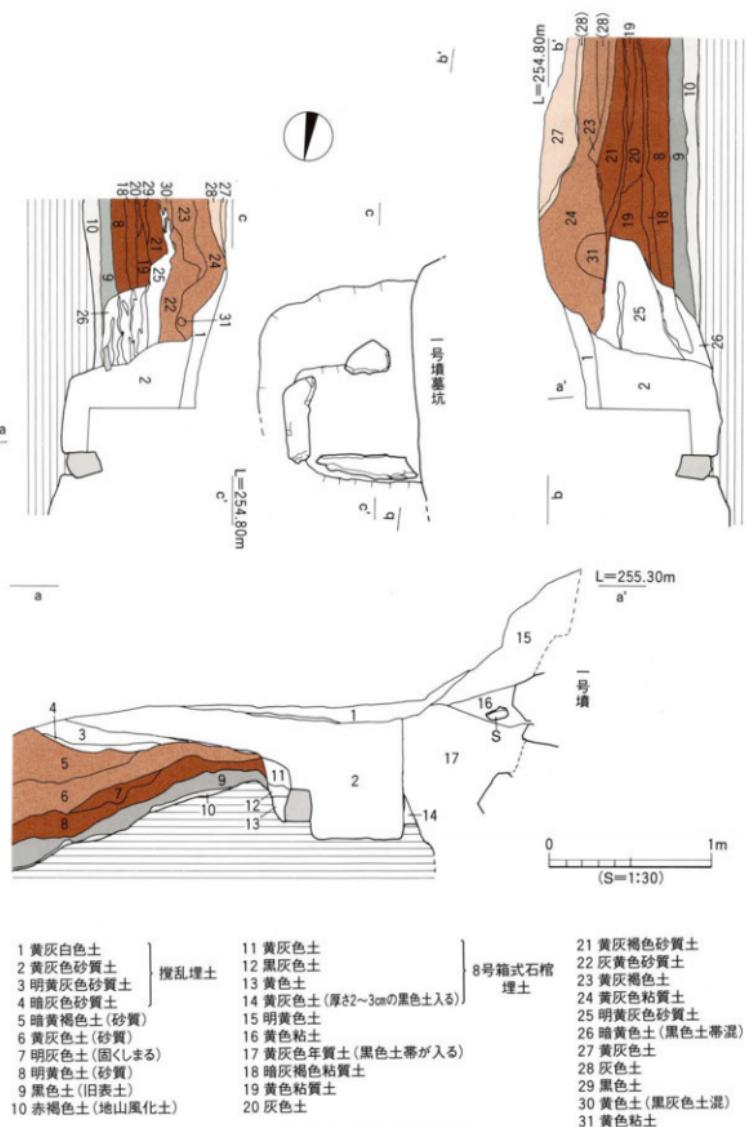
(4) 7号箱式石棺 (第38図)

7号箱式石棺は1号墳の主体部に隣接し、墓坑は1号墳の墓坑に切られている。標高は254mで石棺の主軸方位はN95°Eである。蓋石は完存しており、9枚が横架され、小ぶりな割石や塊石で隙間を塞いでいる。さらに東側の隙間には粘土も使用されている。石棺の規模は内法で長さ1.75m、幅0.20m～0.34m、高さ0.14m～0.22mを測り、石棺西側が幅狭くなっている。石材はすべて花崗岩である。棺内からは成人男性1体が出土した。頭位は東で、頭蓋骨は頭頂部が基底面に接し、逆さをむいた状態であった。顔面には、赤色顔料が塗布されている。

なお、東側の蓋石の隙間には粘土があり、西側のそれには粘土がない。これは、1号墳造営時に東側の蓋石が開けられた可能性を示唆するものである。

墓坑は、東側では旧表土の黒色土とその上にある暗黄色土（厚さ10cm）を、西側では地山層を掘り込んでいる（図は未掲載）。黒色土上の暗黄色土は当墓の整地層と考えている。平面形態は隅丸長方

箱式石棺



第40図 8号箱式石棺測量図

B 区の調査

形を呈する。規模は長軸2.61m、短軸1.35m、地山からの深さは0.45mを測る。蓋石は、西側の蓋石上部までが墓坑内に収まるようになっている。副葬品は出土していない。

(5) 8号箱式石棺 (第40図)

8号箱式石棺は、1号墳主体部の東側にあり、石棺の西側は1/2~2/3ほどが1号墳の墓坑に切られている。標高は254mになる。8号石棺には盗掘坑が検出され、蓋石はすべて失われ、石棺内部は削平をうけている。壁体は東側小口部と北側の側壁1枚が遺存にとどまる。石棺の主軸方位はN82°Eで、現存の規模は内法で長さ0.67m、幅0.50m、高さ0.15mを測る。墓坑の平面形態は盜掘坑のため判然としない。

さて、8号箱式石棺の南北の土層断面（第40図）には1号墳の墓坑断面がわずかにかかっている。この土層の堆積状況からは旧表土と思われる黒色土（9）上に厚さ10cm前後の暗黄色土（8）、暗灰褐色粘質土（18）、黄色粘質土（19）の3つの層があり、これ等の層を切って1号墳の墓坑が掘られている。よって、これら3つの層は、8号箱式石棺の被覆土及び、整地土と考えられる。

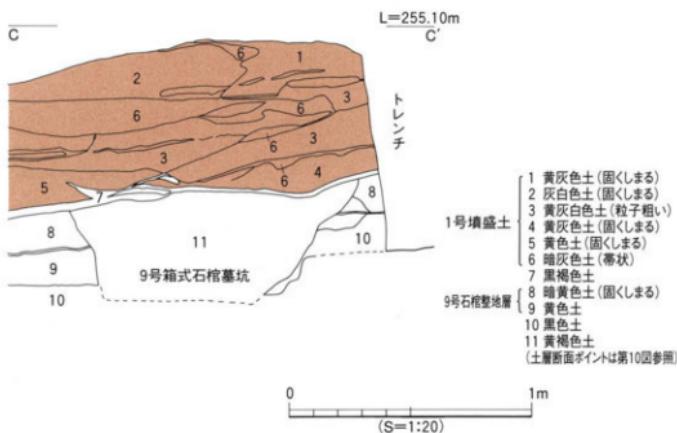
出土遺物は、石棺内の現代の盜掘坑埋土から須恵器が1点出土している。この須恵器は時期比定に適していない。

出土遺物

須恵器（第41図）

広口壺（139）

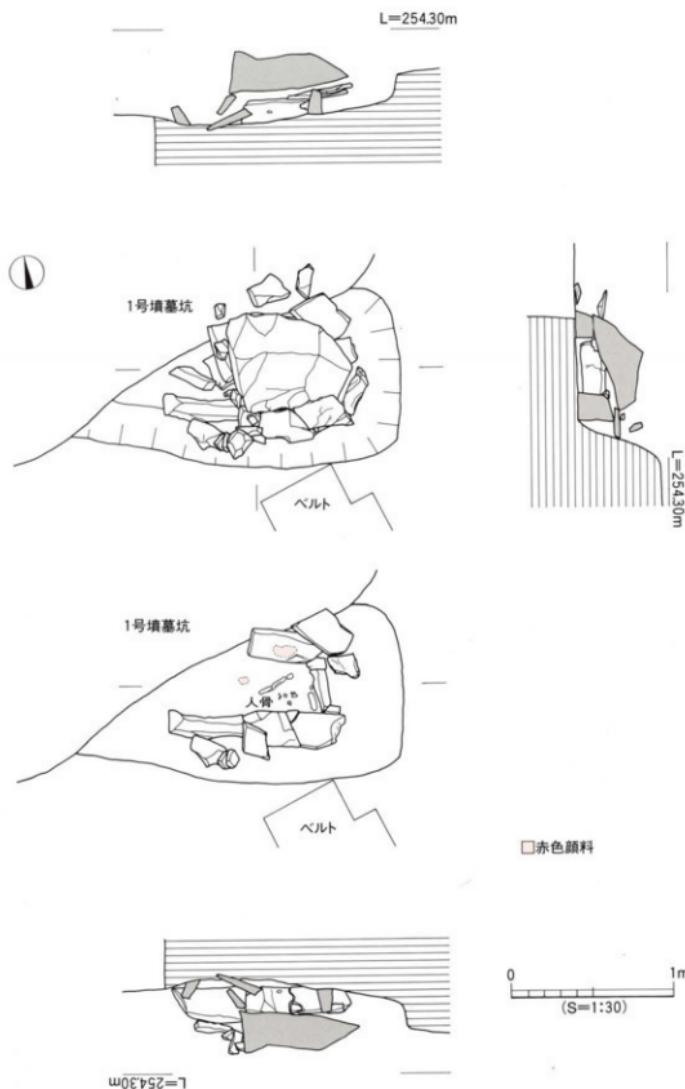
139は広口壺の口縁部片である。口縁端部と端部外面に刺突文を施し、口縁部には波状文を施す。



第41図 8号箱式石棺出土遺物実測図

第42図 9号箱式石棺上部土層図

箱式石棺



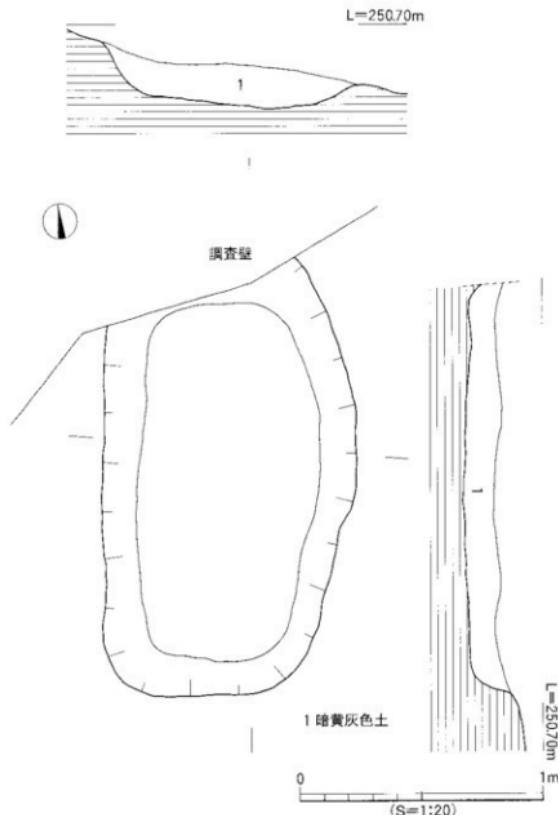
第43図 9号箱式石棺測量図

B 区の調査

(6) 9号箱式石棺 (第42・43図)

9号箱式石棺は、1号墳の主体部に南接し、1号墳の墓坑に切られ、西側の1/3～2/3は失われている。標高は254.20mで、主軸方位はN102°Eである。蓋石には花崗岩の塊石が使用され、1枚が遺存している。石棺の現存規模は内法で長さ0.89m、幅0.30m、高さ0.20mを測る。棺床と北側側壁の上面には、赤色顔料が付着し、棺内の東側では頭部と上腕骨が出土した。九州大学大学院田中良之氏と同金宰賢氏の指導によれば、埋葬人骨は幼児という事であった。副葬品は出土していない。なお、棺内西側で蓋石を支えていた小ぶりな塊石は、1号墳造営時の際に設置されたものと考えている。

墓坑は平面形態が明確でない。掘り方は、7号箱式石棺と同様に黒色土(旧表土)および暗黄色土(厚さ15cm前後)上から掘られている。暗黄色土は、9号箱式石棺の整地層と考えている。



第44図 SX1測量図

6. 性格不明遺構

(1) SX 1 (第44図)

S X 1は、表土掘削後に地山面で検出したもので、1号墳と3号石蓋土坑墓の間に位置し、標高250.60mに立地する。長軸方向はN 5°30' Eで、平面形態は隅丸長方形を呈する。検出規模は長さ1.69m、幅1.04m、深さ0.12mを測る。埋土は暗黄灰色土の一層で、出土遺物はない。

7. B区表採遺物

須恵器 (第45図)

坏蓋 (140)

140は坏蓋の口縁部片である。推定口径12.2cmを測る。口縁部と天井部の境は不明瞭である。

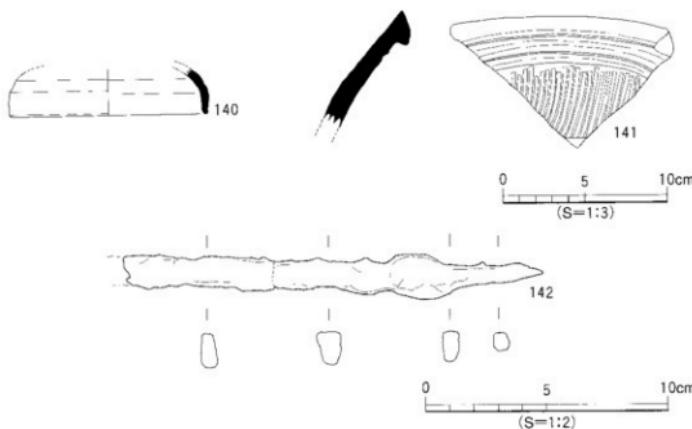
広口壺 (141)

141は広口壺の口縁部片である。口縁部外面の文様帶には斜位のヘラ模文が施される。

鉄器 (第45図)

鉄鎌 (142)

142は長頭鎌と思われる。鎌身部は欠失しており、鋸化が著しい。



第45図 B区出土遺物実測図

第5章 C区の調査

1. 検出遺構（第46・47図）

C区は1号墳のある南北主丘陵から東へ派生する尾根上にあり、調査地は緩傾斜からやや急傾斜に変化する傾斜変換点上にある。B区からは東120m、B区より低く、比高差は30mとなる。調査区は、試掘調査の結果をうけて、石棺を中心に設定した。C区では箱式石棺2基を検出した。

2. 箱式石棺

（1）1号箱式石棺（第48図）

1号箱式石棺は、調査区の中央部、尾根の稜線上に位置し、標高226.30mに立地する。主軸方位はE20°Sにとり、尾根線に直交して構築されている。墓坑の平面形態は隅丸長方形で、断面形態は隅が丸い箱形となる。石棺の上部は削平されており、蓋石は西側3枚が辛うじて横架している状況であった。棺内は、東側に比べ西側の幅が狭くなっている。規模は内法で長さ1.70m、幅0.25m～0.40m、高さ0.18m～0.20mを測る。南北の側壁は4枚の割石からなり、西側の小口を挟む構造になっている。石材は花崗岩である。棺床は、墓坑の基底面上に厚さ15cm前後の黄褐色土を床土としている。

棺内からは、出土遺物はない。

（2）2号箱式石棺（第49図）

2号箱式石棺は1号箱式石棺の北側2mに並列してあり、標高247.70mに立地する。主軸方向はE14°Sとなり、尾根線に直交して構築されている。墓坑の平面形態は隅丸長方形を呈し、断面形態は箱形になる。蓋石は全て失われ、西側の小口も削り取られている。石棺の現存規模は内法で長さ1.40m、幅0.30m～0.40m、床面からの高さ0.25mを測る。東側小口は両側壁に挟まれる。石材は花崗岩であるが、側壁には割石、東西両小口には板石を使用する。東側の小口石は、角を面取りしたような加工痕跡をともなう。棺内には厚さ13cm前後の黄褐色土を敷き、床土としている。床面には頭位を東にして脊髄、大腿骨の一部が遺存していた。この人骨は田中良之氏・金宰賢氏の指摘では、熟年～老年の男性と推察されている。

棺内からは、人骨以外の出土遺物はない。

3. C区表採遺物

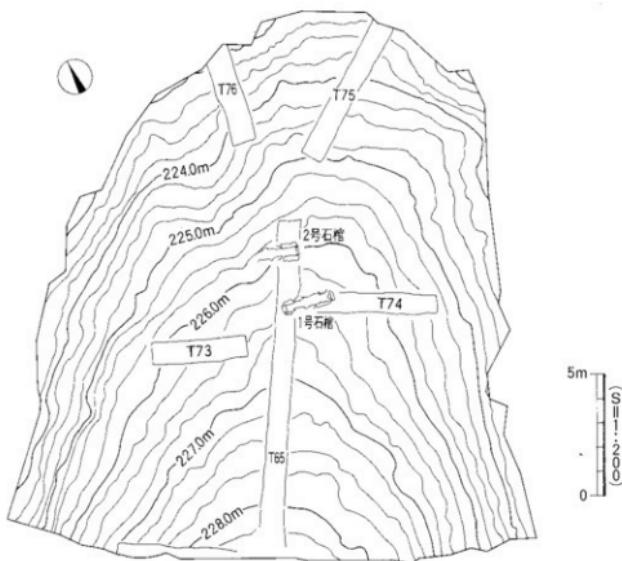
試掘調査時に土器片2点が採取されている。石棺の所属時期を推定できる資料としては乏しいものである。

弥生土器（第50図）

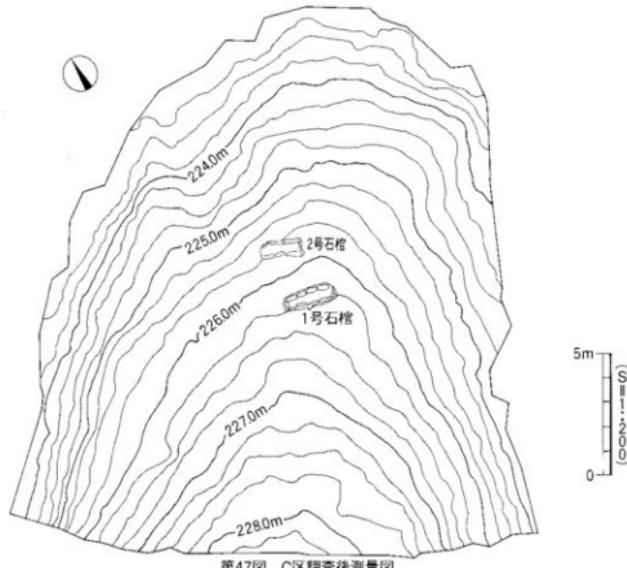
壺（143）

143は瀬戸風鉢遺跡で唯一出土した弥生土器である。壺の肩部から頸部にかけての破片で頸部に押圧突起を巡らしている。

箱式石棺

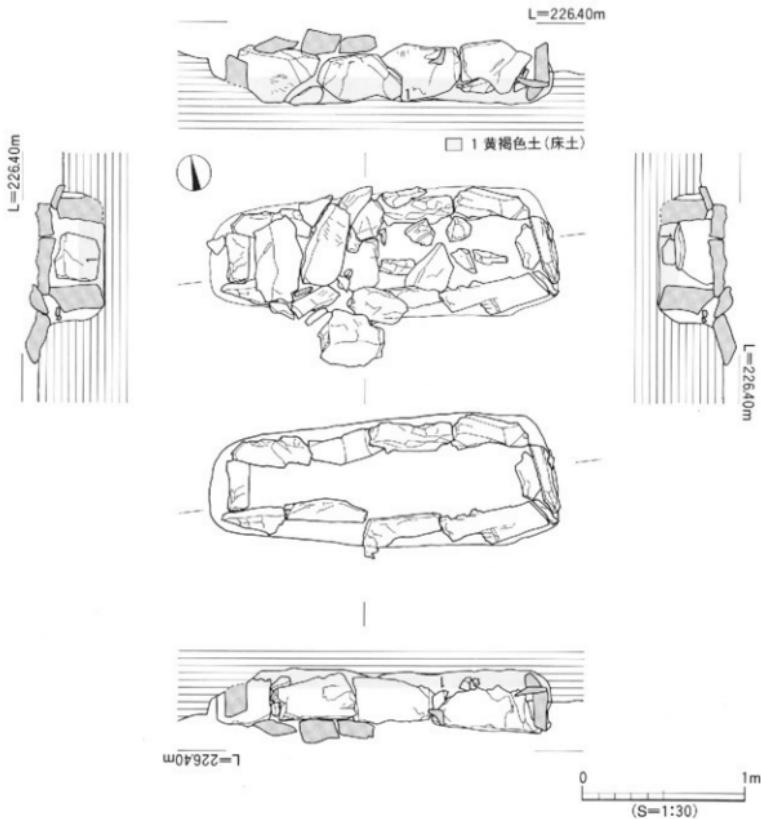


第46図 C区調査前測量図



第47図 C区調査後測量図

C 区の調査



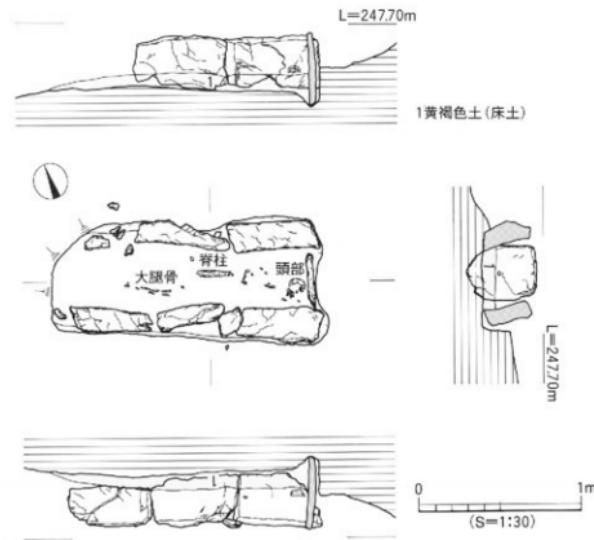
第48図 1号箱式石棺測量図

箱式石棺

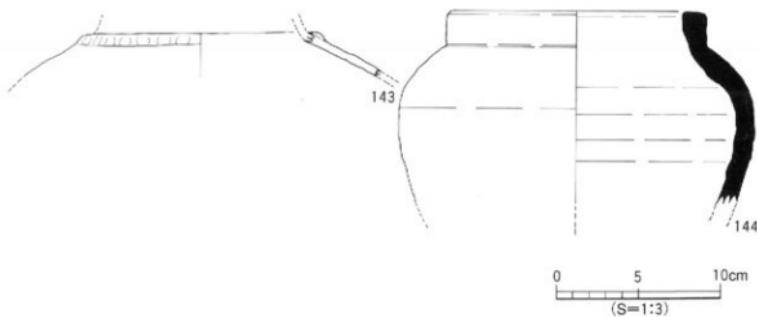
瓦質土器（第50図）

壺（144）

144は瓦質の短頸壺である。底部は消失し、口縁部から体部にかけての破片である。推定口径16.0cm、残高11.8cmを測る。口縁部は垂直に短く立ち上がり、口縁端部は平面になる。全体的に器壁は厚く仕上げられている。



第49図 2号箱式石棺測量図



第50図 C区表採遺物実測図

第6章 D区の調査

1. 検出遺構 (第51・52図)

D区は、瀬戸風岬1号墳のあるB区丘陵部から小谷を挟んだ南西130mの丘陵上に位置し、標高228m～234mに立地する。調査では古墳1基(瀬戸風岬4号墳)と木棺墓1基を検出している。したがって、試掘調査よりも遺構数は増加している。

2. 瀬戸風岬4号墳

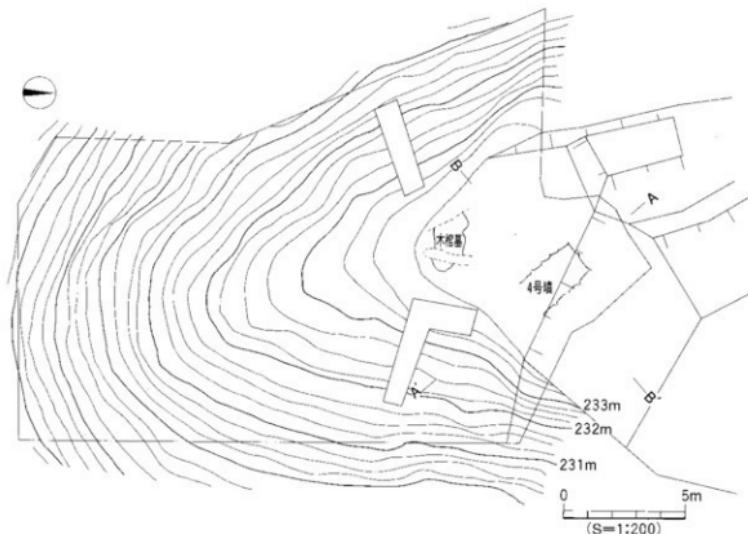
(1) 位置と現状 (第52図)

瀬戸風岬4号墳は1号墳から南西へ130m、標高234mの丘陵頂部に立地する。この丘陵は4号墳一帯を頂とし、南北に下る尾根となり、東側と西側は谷地形になっている。4号墳は1号墳から見下ろされる位置にあたるが、1号墳と同様な眺望を誇る。

調査前には、農業灌水用の配水施設が建設されており、丘陵の頂部は平坦に造成されていた。試掘調査時には既存建物があったため、頂部にはトレンチを設定することができなかった。しかし、トレンチ中には古墳に使用されたと思われる石材が散見された事から、古墳の存在が想定されていた。

(2) 墳丘

墳丘の盛土は全て失われ、周溝などの外部施設も検出できず、墳形や規模は不明である。



第51図 D区調査前測量図

D区の調査

(3) 石室 (第54図)

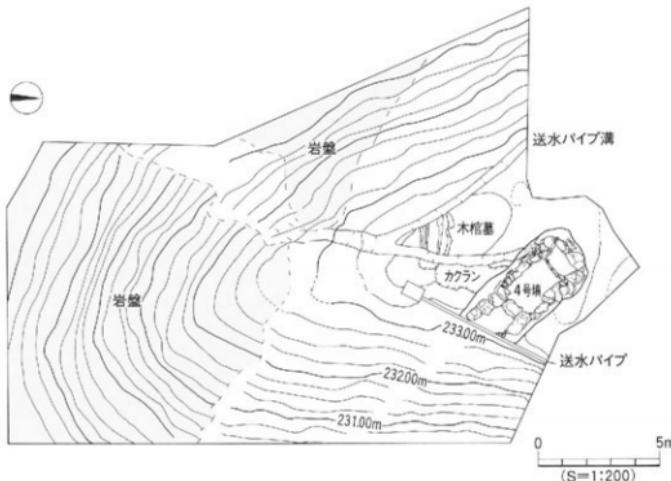
4号墳の主体部は、横穴式石室で南東に開口し、主軸方位をN42°Wにとる。石室の現存長は5.15mを測る。壁体の遺存状況は、天井石は失われ、奥・側壁は基底石を含め3段を残す程である。玄室入り口から羨道部までの壁体は全て失われている。框石と羨道部側壁の基底石とは、抜き取り痕跡を検出したにすぎない。袖の構造は、抜き取り痕跡から両袖をなすものと思われる。羨道部の基底面は玄室床面より高くなっている。前部と墓道は不明である。

墓坑は、遺存する壁体と同レベルの地山で検出したが、上部から掘削された可能性が高い。壁体に使用された石材は花崗岩で、割石と塊石がある。

(4) 玄室

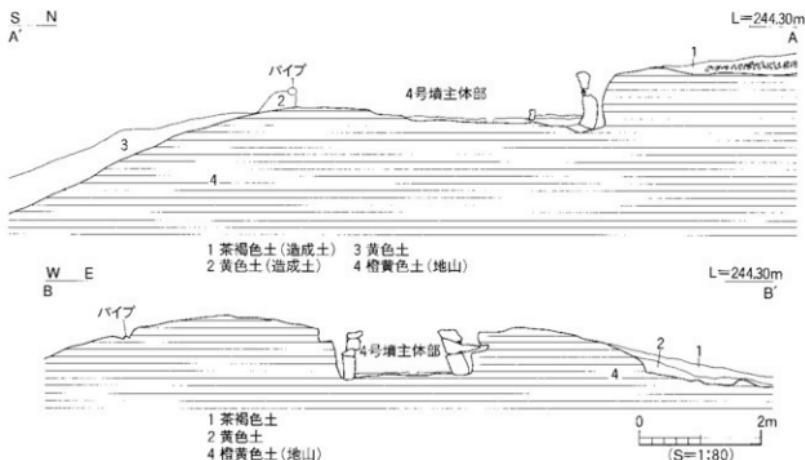
玄室の規模は、検出長2.70m、幅1.50m~1.60m、現存高0.90mを測る。側壁は基底石を含む2段目から持ち送られている。奥壁の基底石には大きな割石を使用し、2石を立て並べる。奥壁は、側壁に挟まれる構造になっている。玄門部の石材は抜き取られているが、抜き取り痕跡からは袖石が框石を挟んでいるように思われる。床面には敷石は見られない。掘り方基底面の地山上には、厚さ4cm~12cmの床土を構築している。床土には黄褐色土を用い、部分的に白色粘土も使用している。

玄室内には、偏平な割石が玄室中央左側、玄室奥右側、玄室右側の玄門近くに計3個みられる。枕石か棺台に使用されたと思われる。玄室奥には、木炭を敷き詰めた木炭床がある。



第52図 D区調査後測量図

瀬戸風鈴4号墳



第53図 瀬戸風鈴4号墳埴丘土層図

(5) 木炭床 (第55図)

木炭床は、玄室奥で検出された。木炭床は奥壁から約80cm入り口側に、板石状の塊石4枚を奥壁と平行して立て並べ、玄室を仕切った中にある。この板石の高さは、玄室床面から15cm前後を測る。仕切られた中には、直径0.5cm~3.0cm、長さ2.0cm~9.0cm程の木炭を厚さ5cm~8cm敷き詰めている。木炭上には、頭蓋骨を西にした人骨が遺存していた。人骨には焼けた形跡はみられない。人骨は、田中良之氏の指摘によれば成人男性(若い)とみられ、大腿骨・上腕骨・前腕骨などが不揃いに1地点に集中することから、集骨された様子が伺えるものであった。人骨以外の遺物は、木炭上で人骨の南側に須恵器の甕片3点、頭部西側に土師器壺1点、床東側に耳管1点が出土している。木炭中と下部からは、遺物は出土していない。

(6) 石室内の遺物出土状況

副葬品は、木炭床以外では玄室左側に多く配置されている。玄室奥には須恵器高壺4個体、玄室中央左側の板石の北側には鉄鎌が束となり、南側では須恵器長頸壺・高壺・土師器壺・皿が出土している。高壺は6個出土しているが、そのうち4個は伏せられた状態であった。

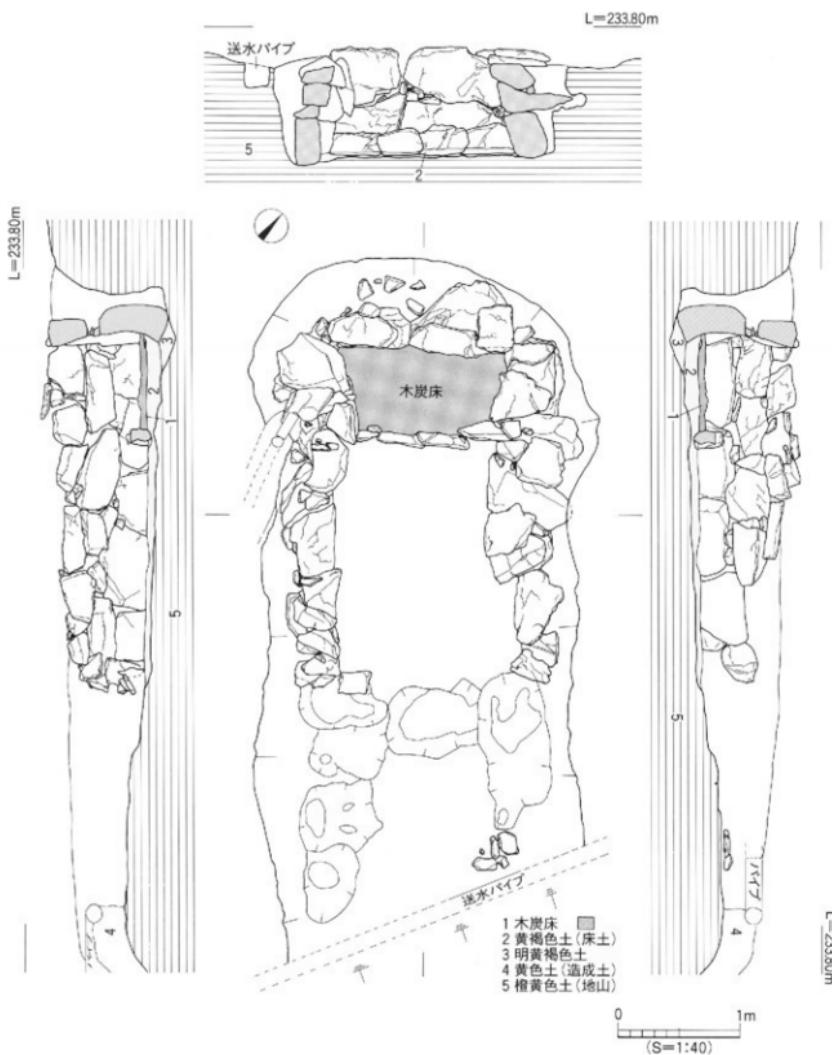
(7) 石室内出土遺物

須恵器 (第56図)

高壺 (145~150)

145は石室中央の左側で、153の長頸壺の横に伏せられた状態で出土したものである。口径9.8cm、器高8.8cmを測る。壺部は焼き歪んでいる。146~148、150は玄室左奥から出土したもので、146は正置する。147・150は壺部を伏せられて置かれていた。148は横倒しとなっている。146は口径11.0cm、

D区の調査



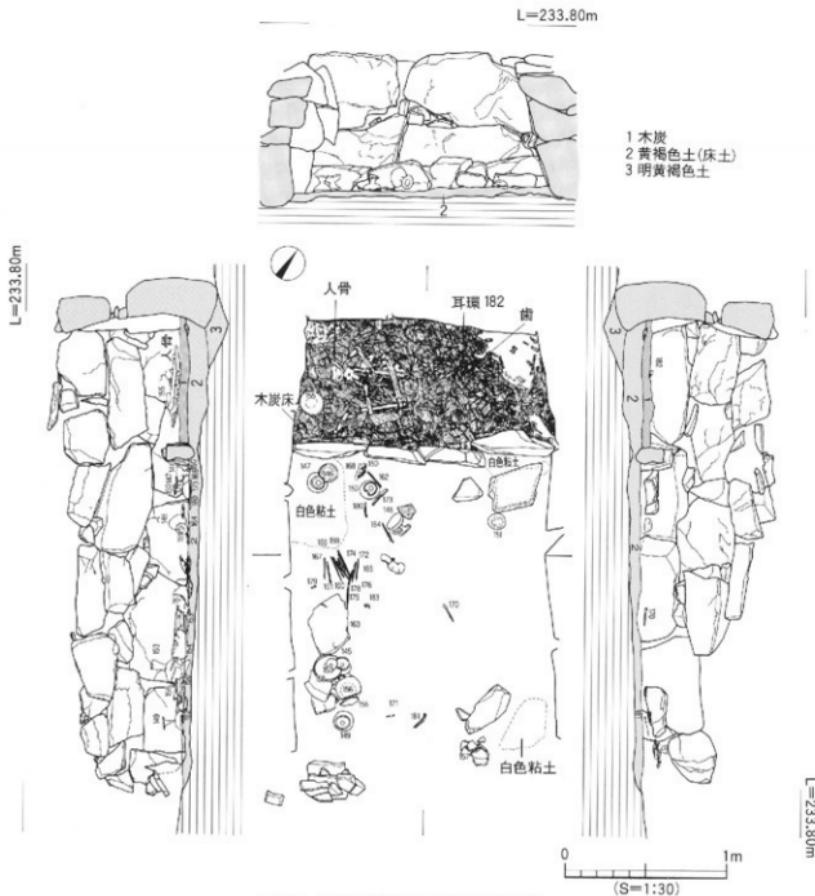
第54図 濑戸風崎4号墳石室測量図

瀬戸風峠4号墳

器高9.2cmを測る。坏部は歪んでいる。147は口径12.0cm、器高9.6cmを測る。坏部は歪んでいる。148は口径12.5cm、器高9.1cmを測る。150は口径11.4cm、器高9.6cmを測る。149は玄室左の玄門近くで出土したもので、坏部が伏せられている。口径12.8cm、器高9.7cmを測る。

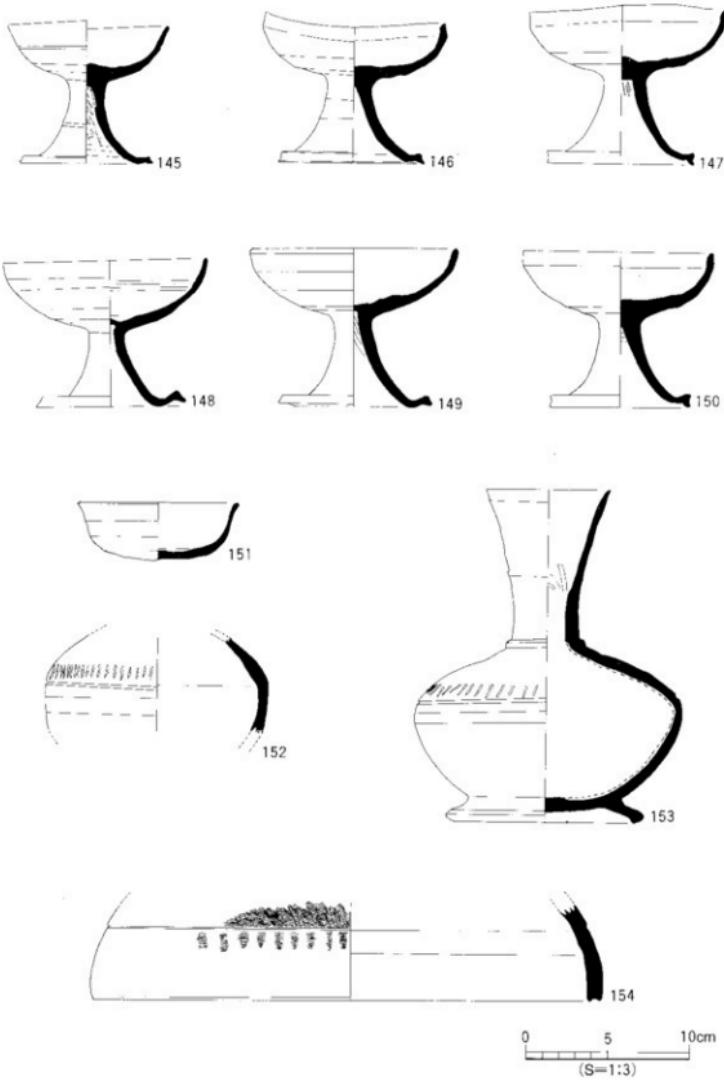
坏身（151）

151は玄室右奥の棺台とみられる石の南側で出土したもので、坏部が伏せられている。口径9.9cm、器高3.8cmを測る。



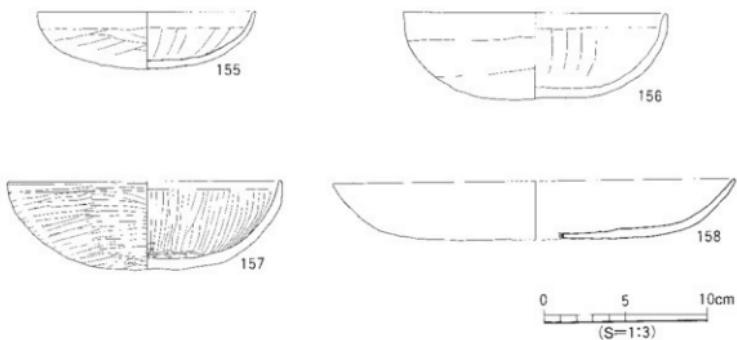
第55図 瀬戸風峠4号墳石室内遺物出土状況

瀬戸風峠4号墳



第56図 瀬戸風峠4号墳石室内出土遺物実測図(1)

D 区の調査



第57図 濑戸風呂4号墳石室内出土遺物実測図(2)

長頸壺（152・153）

152は胴部片で、玄室入り口付近の埋土から出土したものである。胴部中央に刺突文を施している。153は口径7.6cm、器高20.4cmを測る。口縁部は直立して立ち上がる頸部から外上方にのびる。口縁端部は丸くおさめる。胴部は偏平で肩が張る。肩部には刺突文を巡らしている。脚は内に接地する。

器台（154）

154は器台の脚部片で、玄室入り口付近の埋土から出土したものである。波状文と刺突文が施されている。

土師器（第57図）

坏（155～157）

155は木炭床の西側で出土したものである。口径13.4cm、器高3.5cmを測る。器壁が剥離しているため明瞭ではないが内外面ともヘラミガキが施されている。口縁部は内外面とも横ナデが施されている。156は口径16.2cm、器高5.3cmを測る。器壁が剥離しているため外面の調整は明瞭ではないが口縁部は横ナデ調整を施している。体部内面はヘラミガキが施される。157は口径16.7cm、器高5.4cmを測る。内外面ともヘラミガキが施され、底部内面には弧状の暗文が施されている。

皿（158）

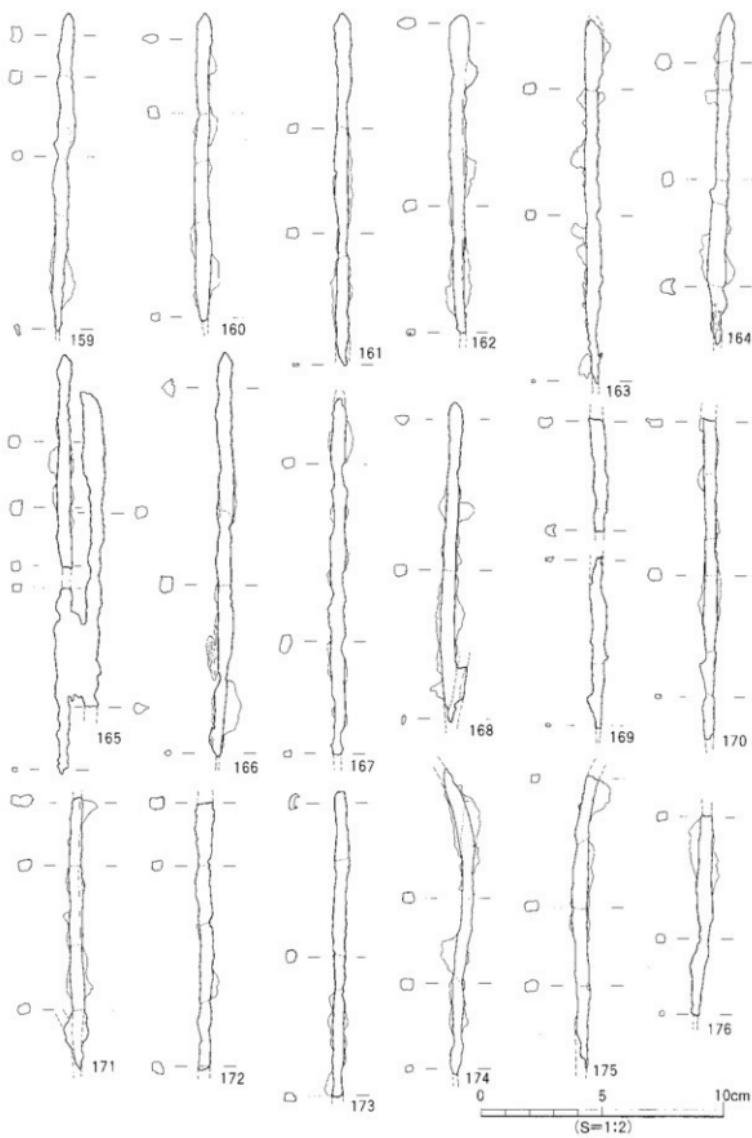
158は153の長頸壺の下から出土したものである。推定口径24.6cm、器高3.6cmを測る。

鉄製品（第58・59図）

鉄鎌（159～181）

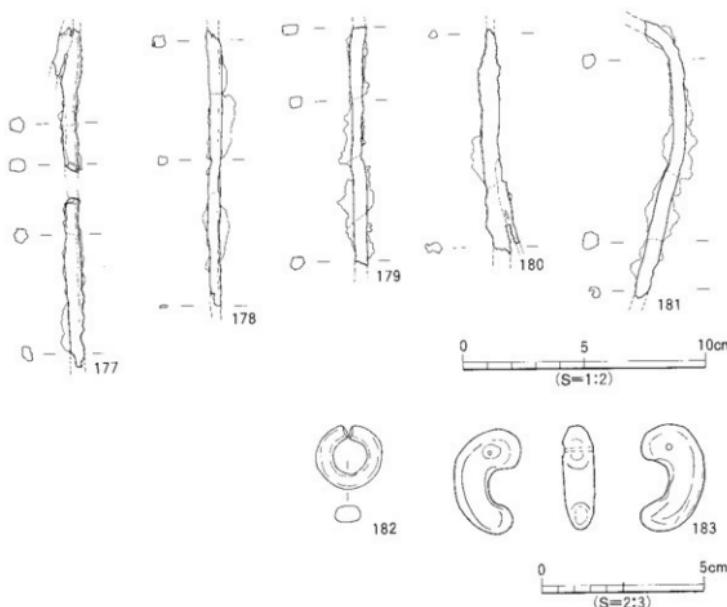
出土した鉄鎌はすべて長頸鎌である。出土地点は玄室内中央左側で東となって出土したものが殆どである。いずれも鋒化が著しい。鎌身を残すものに159～168があり、鎌身の平面形は159～161、164～168は柳葉形式、162・163は片刃式を呈するものと思われる。鎌身の断面形態の知れるものは両丸造りのもの160・162があり、片丸造りのもの168がある。159～167の頸部断面形は方形を呈するが、168はやや長方形を呈する。164・166の茎部には木質が遺存している。166は最も遺存がよく全体を残すもので、長さは16.6cmを測る。169～181は鎌身部を欠失するものである。頸部の断面は方形を呈している。茎部に木質を残すものはない。181は曲がっており鉄鎌ではない他の製品の可能性がある。

瀬戸風呂4号墳



第58図 濑戸風呂4号墳石室内出土遺物実測図(3)

D 区の調査



第59図 濑戸風呂4号墳石室出土遺物実測図(4)

装飾品（第59図）

耳環（182）

182は木炭床で出土した耳環である。木炭床上の人骨頭部とは少し離れているところから出土している。この耳環については科学分析を行っているので、第10章 保存科学分析（P.125）を参照していただきたい。

勾玉（183）

183は鉄鎌が束になって出土した南側で出土したものである。材質は瑪瑙製である。長さ3.3cm、幅2.0cm、厚さ1.0cmを測る。

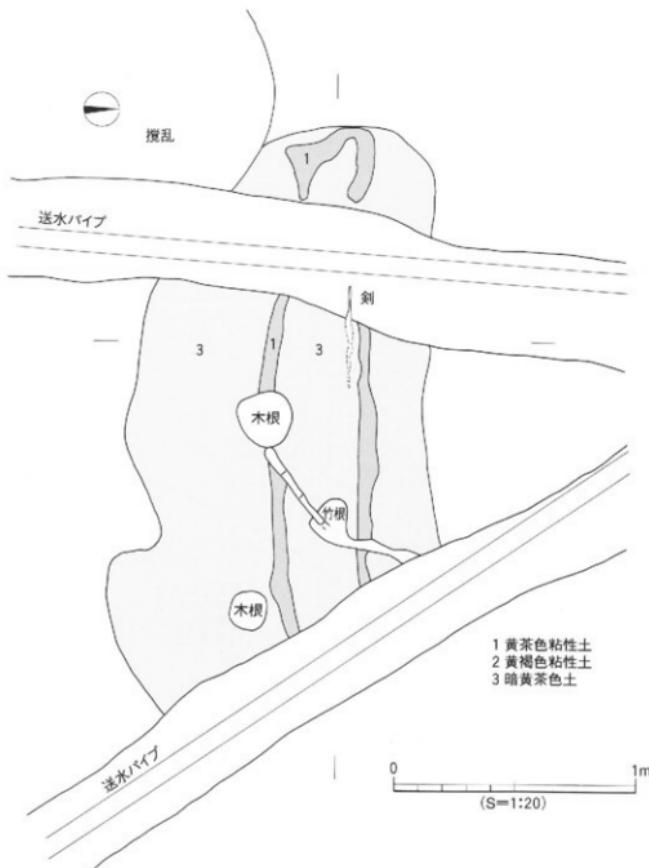
3. 木棺墓（第60・61図）

木棺墓は、4号墳石室から南西へ3mの位置にあり、標高233.70mに立地する。木質は遺存していないが、平・断面精査により木棺痕跡とみられる黄茶色粘性土（1）と黄褐色粘性土（2）を検出した。墓坑埋土は、暗黄茶色土（第60図3）であるが木棺痕跡部は黄茶色粘性土（第60図1）になっている。棺基底部は、暗黄茶色土（第61図4）を床土としている。木棺痕跡の規模は長さ1.90m、幅0.20m～0.30m、高さ0.08m～0.10mを測る。

木棺墓

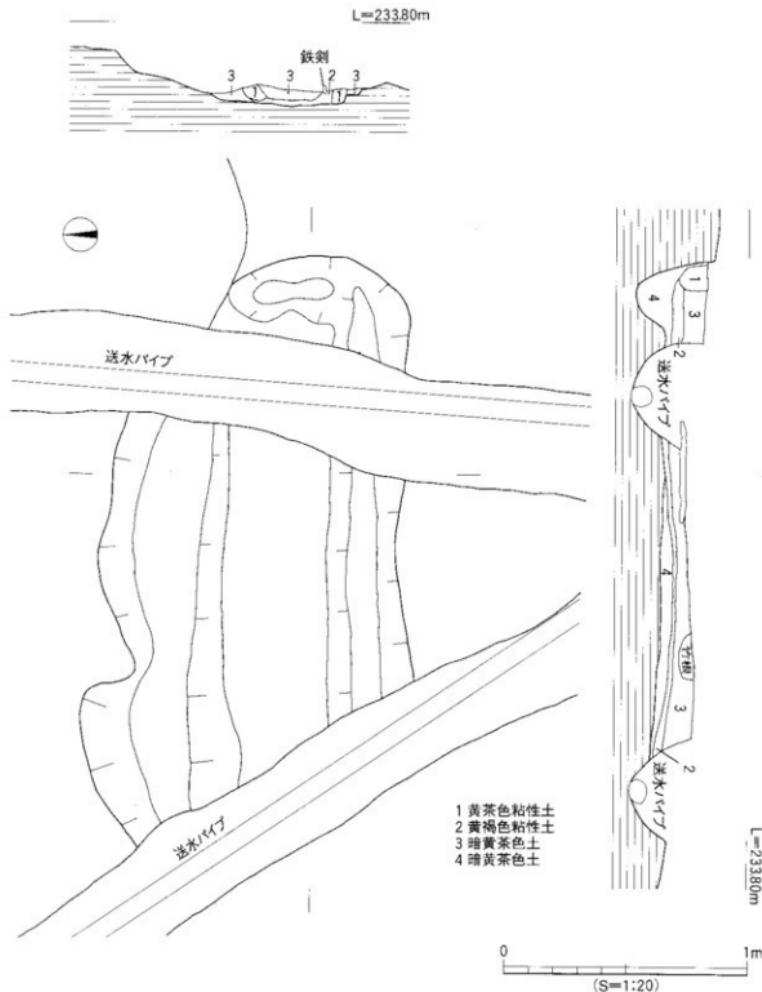
墓坑は、地山を浅く掘り込んで2段掘りとなる。墓坑の西側と東側は、送水管敷設のために削られている。外側の掘り方は、東端の北側も一部削平されているため、検出時の平面形態は不確定である。検出規模は長軸2.20m、短軸1.20m、深さ0.04~0.20mを測る。内側の掘り方は、外側の掘り方の南寄りにある（以下、「棺部」と記す）。西側が失われているため全容は不明であるが、平面形態は長方形を、棺部の横断面形態は幅広の浅い逆台形状を呈する。棺部の基底部は、東側小口部が深く掘られている。検出規模は長さ2.10m、幅0.56m~0.70m、深さ0.10m~0.30mを測る。

副葬品は、木棺痕跡の内側から鉄剣1振りが出土している。鉄剣は棺内南側の黄褐色粘性土（2）の上にあり、剣先を西に向け、刃を立てた状態で出土した。人骨は遺存していない。



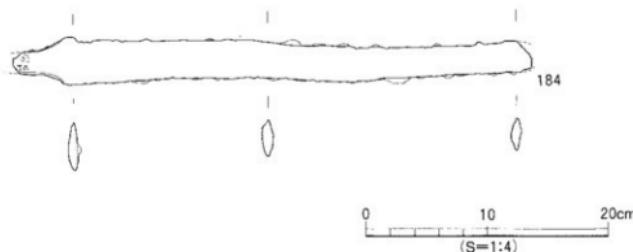
第60図 木棺墓検出図

D区の調査



第61図 木枠基測量図

木 棺 墓



第62図 木棺墓出土遺物実測図

出土遺物（第62図）

鉄剣（184）

184は棺内南側から出土した副葬品である。茎先と切先が欠失している。残存長42.8cm、身厚0.8cm、身残存長38.2cm、茎残存長4.6cm、身幅2.4cm～3.5cmを測り、先細りとなっている。鍔は鏽のためか明瞭でなく、断面形態は紡錘形を呈する。

第7章 E区の調査

1. 検出遺構

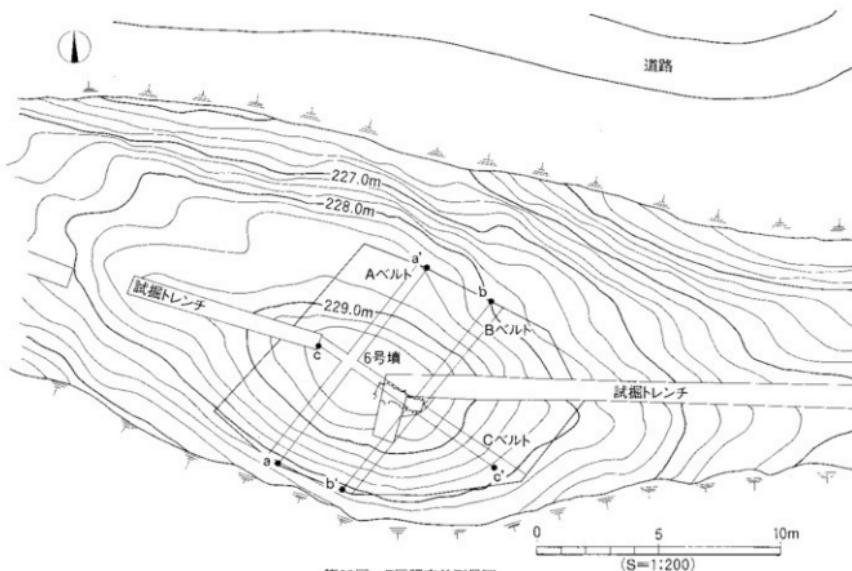
E区は瀬戸風峠の西側30m、B区の主丘陵から分岐する東側の尾根の鞍部、標高228m～229mに立地する。調査区の範囲は、試掘調査をもとにして堅穴式石室が確認された地点を中心に設定した。検出した遺構は古墳1基である。

2. 瀬戸風峠6号墳

(1) 位置と現状（第64図）

瀬戸風峠6号墳は西から東へのびる尾根が中央で小高く平坦になった部分に占地し、標高は229.60mになる。尾根は、東西方向に緩やかな傾斜となって下り、その先では丘陵部が高くなる。南北方向は急峻な傾斜となり、北側は崖地となる。

6号墳からの視界は南方に開け、眼下には道後地区を見下ろし、平野南部が見渡せる。一方、東西方向の視界は丘陵がせまり、閉ざされている。北方向は、現在は丘陵が削平され開けた視界だが、本来は丘陵によって視界は遮られていたものと思われる。6号墳主体部の北側には、尾根筋に沿って農業灌水用の送水管が埋設されている。



(2) 墳丘(第65図)

6号墳が立地する周囲は、後世の人为的な造成によって地形の改変が行われており、検出した土層は全て造成土で、盛土は消失している。地山成形や周溝等の外部施設は検出されず、墳形と規模は不明である。

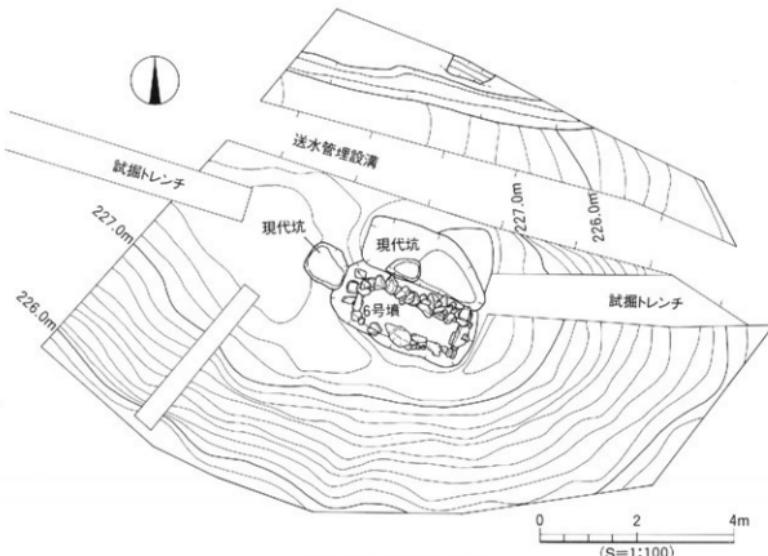
(3) 墓坑

墓坑は、尾根筋に沿って掘られている。北側と西側は近現代坑に切られる。墓坑の検出規模は長軸3.00m、短軸1.50m、深さ0.48mを測る。平面形態は隅丸長方形を呈する。

(4) 石室(第66図)

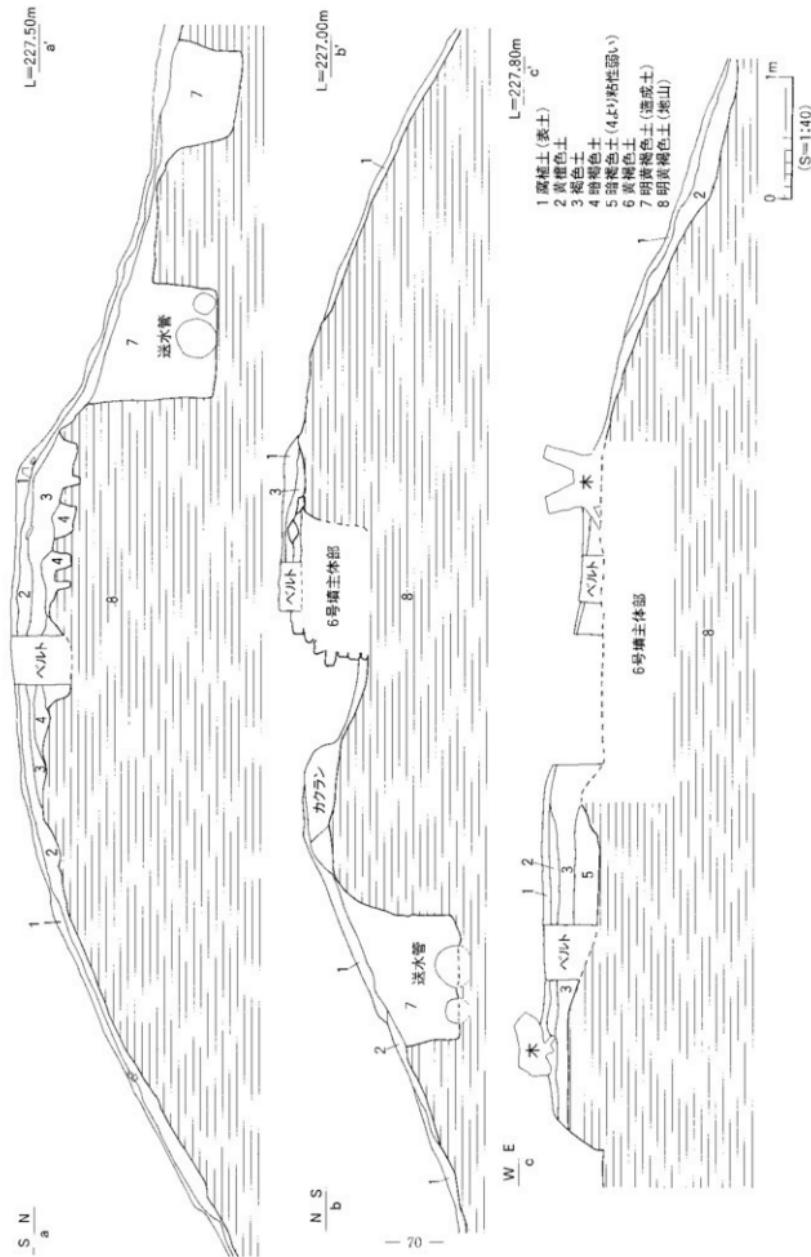
6号墳の主体部は竪穴式石室で、主軸方位をE26°Sにとる。石室の遺存状況は悪く、天井石は失われ、北側の側壁は削平により一部を壊されている。南側の側壁は、西側の基底石の一部が抜き取られ、上部の壁体もすべて壊されている。

石室規模は室長2.19m、幅0.60m～0.70m、残存高0.72mを測る。壁体に使用された石材は、花崗岩である。西側小口には、側壁の構材に比べて大きめな板状の割石を立てて使用し、東側の小口には花崗岩の塊石を使用している。小口部は側壁に挟まれる構造になる。基底石は大きさが不揃いな割石を使用している。側壁は偏平な割石を使用し、雑な積み方になっている。床面には河原石の小礫が散かれている。ただし、床面は部分的に掘り返されているようで、小礫が散乱していた。礫の下から墓坑基底面までには、暗黄色土が3cm～6cmあり、床上を形成する。石室内には人骨が遺存し、



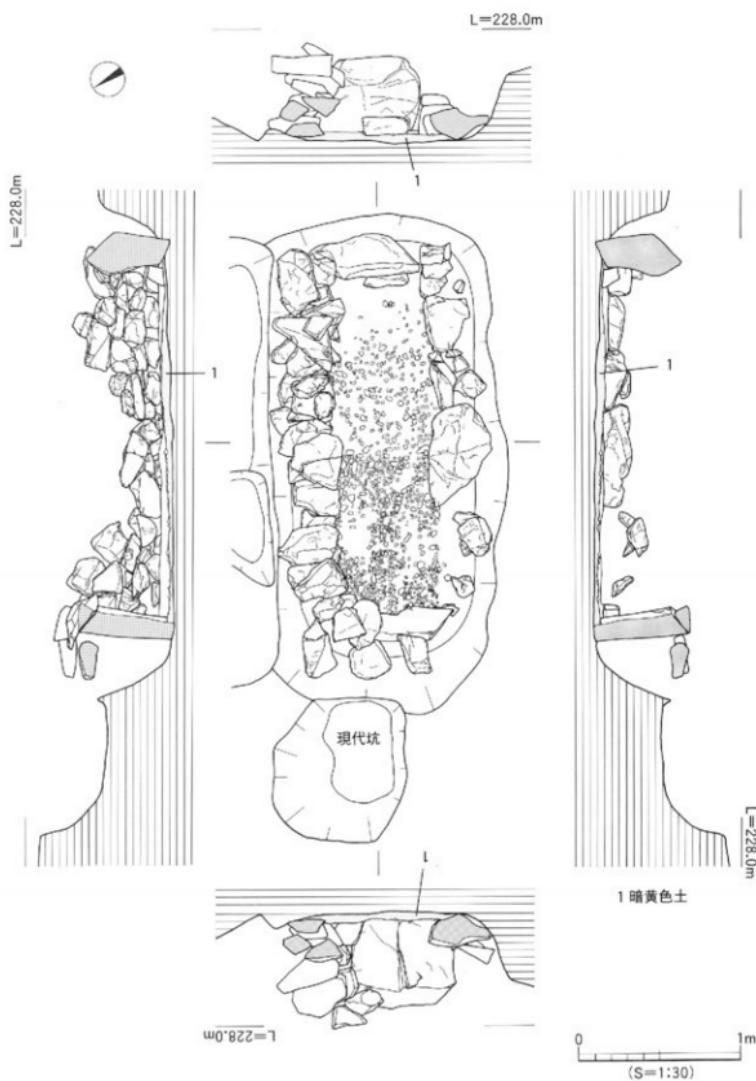
第64図 E区調査後測量図

E 区 の 調 査

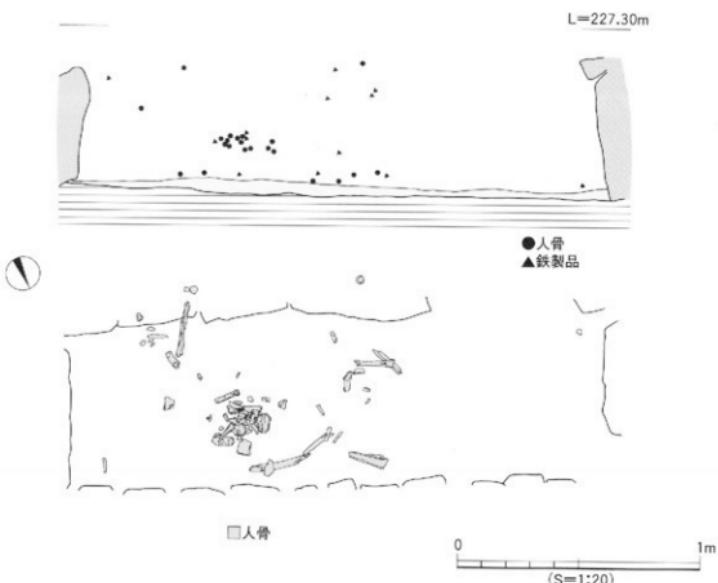


第65図 潟戸風井6号填土上層

瀬戸風峠 6号墳



第66図 瀬戸風峠6号墳石室測量図



第67図 濑戸風岬6号墳石室内遺物測量図

頭部は東側で出土した。田中良之氏の鑑定では老年男性と推定された。

(5) 石室内の遺物出土状況（第67図）

石室内部からは老年とみられる人骨、刀鎌、刀子状の鉄製品等が出土している。床面上から検出した遺物はわずかで、遺物のほとんどが床面から遊離した状態で出土している。遊離遺物は、近現代の削平によるものである。

(6) 石室内出土遺物

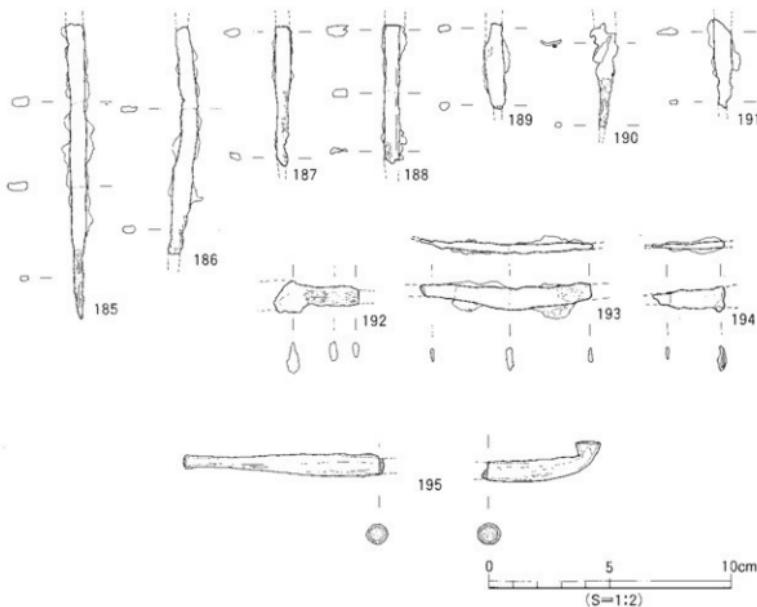
鉄器（第68図）

鉄鎌（185～191）

185～191は鉄鎌および鉄鎌とみられる破片で、完存するものはない。185は長頭鎌で鎌身が欠失している。出土中で最も残りがよいもので、残存長12.3cmを測る。頭部断面形は長方形を呈する。茎部には木質が遺存している。

186は鎌身は欠失している。遺存長9.4cmを測る。187は鎌身から頭部にかけて欠失している。茎部に木質が遺存している。188・189・191は頭部片である。190の茎部には木質が遺存している。

瀬戸風峠6号墳



第68図 瀬戸風峠6号墳石室内出土遺物実測図

刀子 (192~194)

192は遺存長3.5cmを測る。茎部に木質が遺存している。193は遺存長7.0cmを測る。身部に木質が遺存している。194は身部の破片で遺存長3.2cmを測る。

縦管 (195)

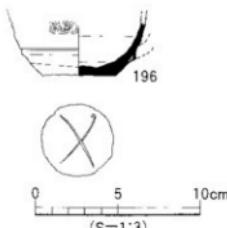
195は石室内流土中から吸口と雁首が揃って出土したものである。吸口長8.2cm、雁首長4.6cmを測る。雁首の首部は脂返しの湾曲が小さく、火皿の形は逆台形状を呈する。18世紀後半以降のものと思われる。

3. E区表採遺物

須恵器 (第69図)

把手付碗 (196)

196は表採遺物で詳しい出土場所は不明である。口縁部と把手は欠失しているが、把手の接合痕が看取できる。底部外面に「×」のヘラ記号が施されている。



第69図 E区出土遺物実測図

第8章 F区の調査

1. 検出遺構（第70・71図）

F区は調査地南端、標高232m～235mの尾根上にある。調査区の地山は尾根線を境とし、西側は花崗岩風化土の貞砂土、東側は花崗岩の岩盤とで形成されている。調査前のF区は、雜木林地である。尾根線上には、北側の丘陵頂部の農業用配水施設から送水管が付設されている。

調査では、古墳1基（瀬戸風峠5号墳）を検出した。

2. 瀬戸風峠5号墳

（1）位置と現状

瀬戸風峠5号墳は、南に緩やかに下る傾斜が急となる尾根線上の傾斜変換点上、標高234mに立地する。5号墳からの眺望は南と西に開け、道後方面と市街地を眼下に見下ろす。

（2）墳丘（第72・73図）

墳丘の盛土は、地形の改変により失われ、調査では造成土を検出したにすぎない。周溝などの外部施設も検出できず、墳形や規模は不明である。

（3）墓坑

墓坑は、南側が大きく削平されている。掘り方は尾根線に沿って地山層を掘り下げ、平面形態は隅丸長方形を呈し、北東部がやや外側に膨む。検出規模は長軸6.50m、短軸2.70m、深さは奥壁側の最深部で1.96mを測る。

（4）石室（第72～74図）

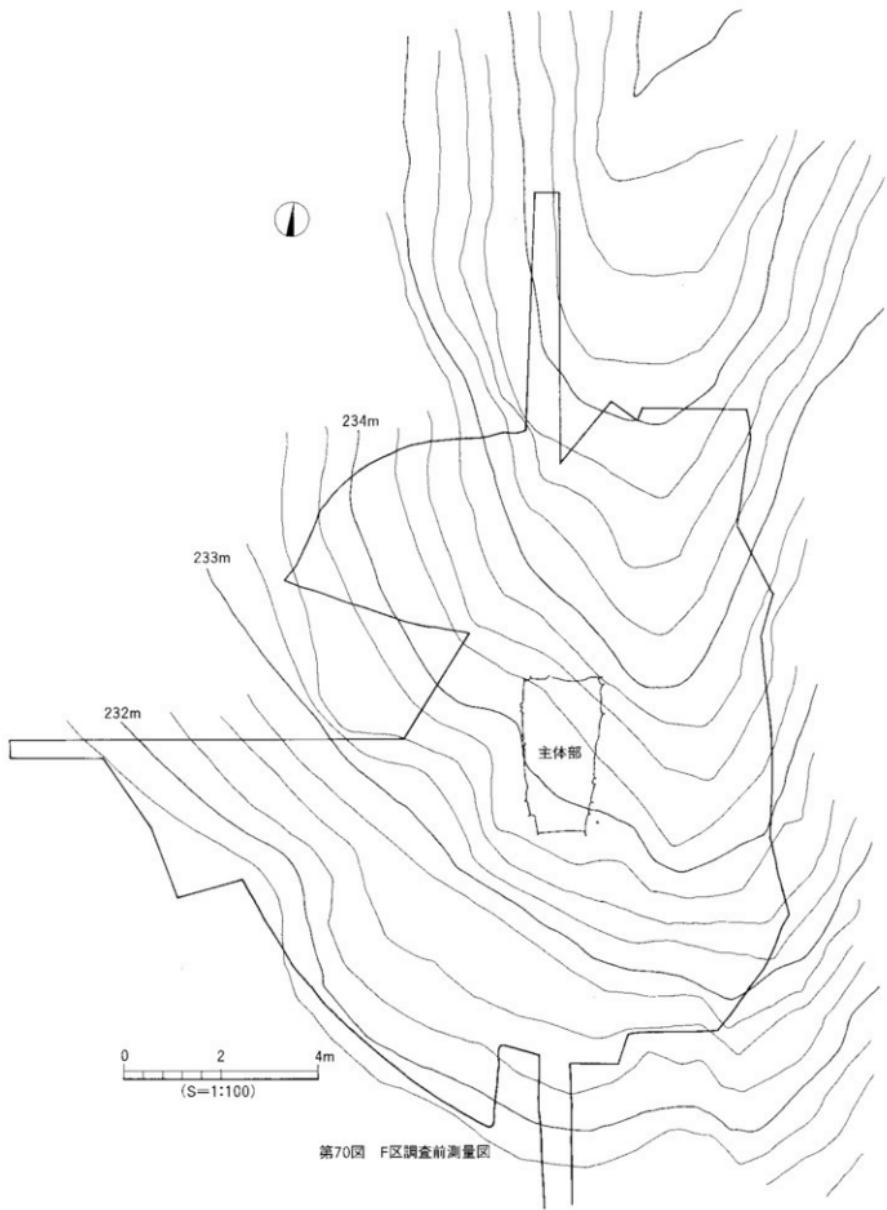
5号墳の主体部は、無袖の横穴式石室で、主軸方位をN 3°Wにとり、南に開口する。石室の規模は現存長4.92m、幅1.60m～1.00mを測る。壁体の遺存状況は、天井石が失われ、奥壁・両側壁とともに基底石を含めた1～3段が残るにすぎない。壁体に使用された石材は花崗岩で割石と塊石がある。石室の裏込土には、黄褐色系の土（第72・73図15）を使用している。前庭部、閉塞施設と墓道は削平され不明である。

（5）玄室（第74図）

玄室の規模は室長3.12m、幅1.60m～1.04m、現存高1.32m～0.60mを測る。平面形態は長方形を呈する。側壁間の幅は、奥壁側に比べ玄門部側が狭い。玄室内には、樋石から約1.0mの所に仕切り石がある。仕切り石は、地山上に3石が置かれる。中央には長方形の割石を横長で使用し、その両側には側壁との隙間に正方形を呈する割石を用いる。壁体の石材の特徴は、基底石には上部と比べて大きな割石を使用している事である。

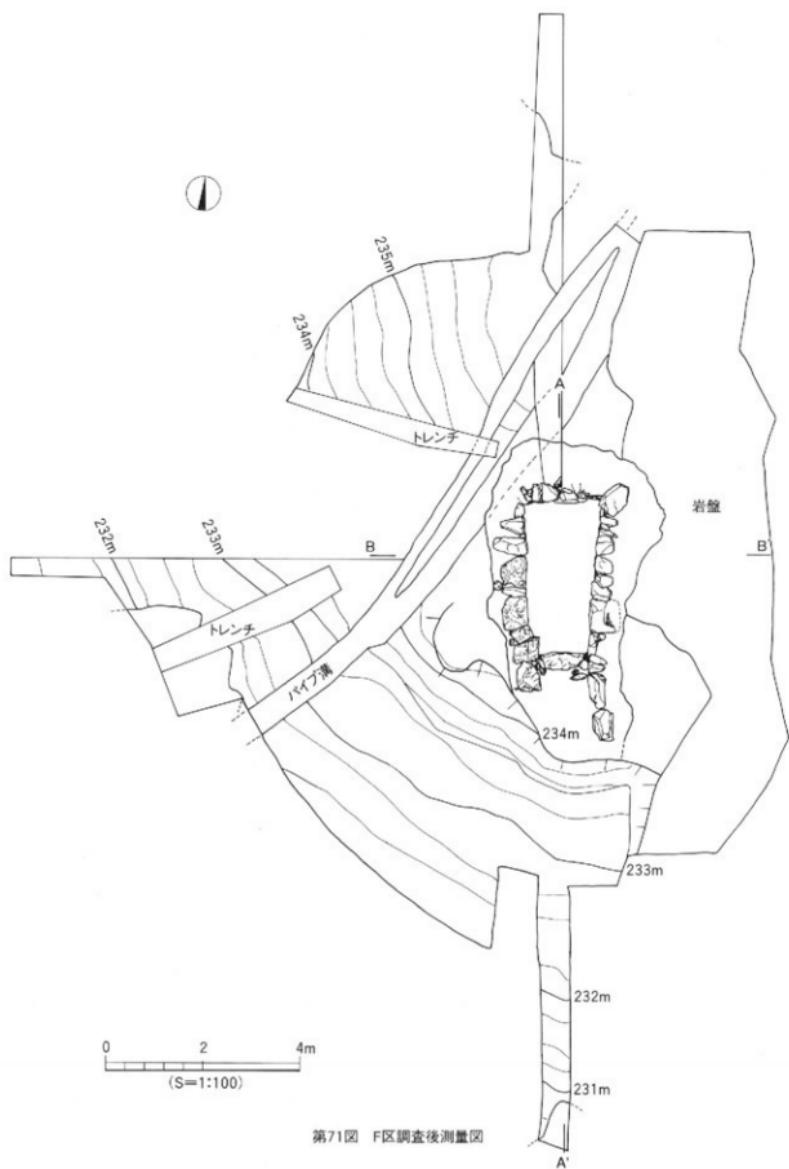
床面は、径2cm～24cmの花崗岩の割石が床上上に敷かれ、礫床となる。床土は、仕切り石と奥壁と

瀬戸風崎5号墳



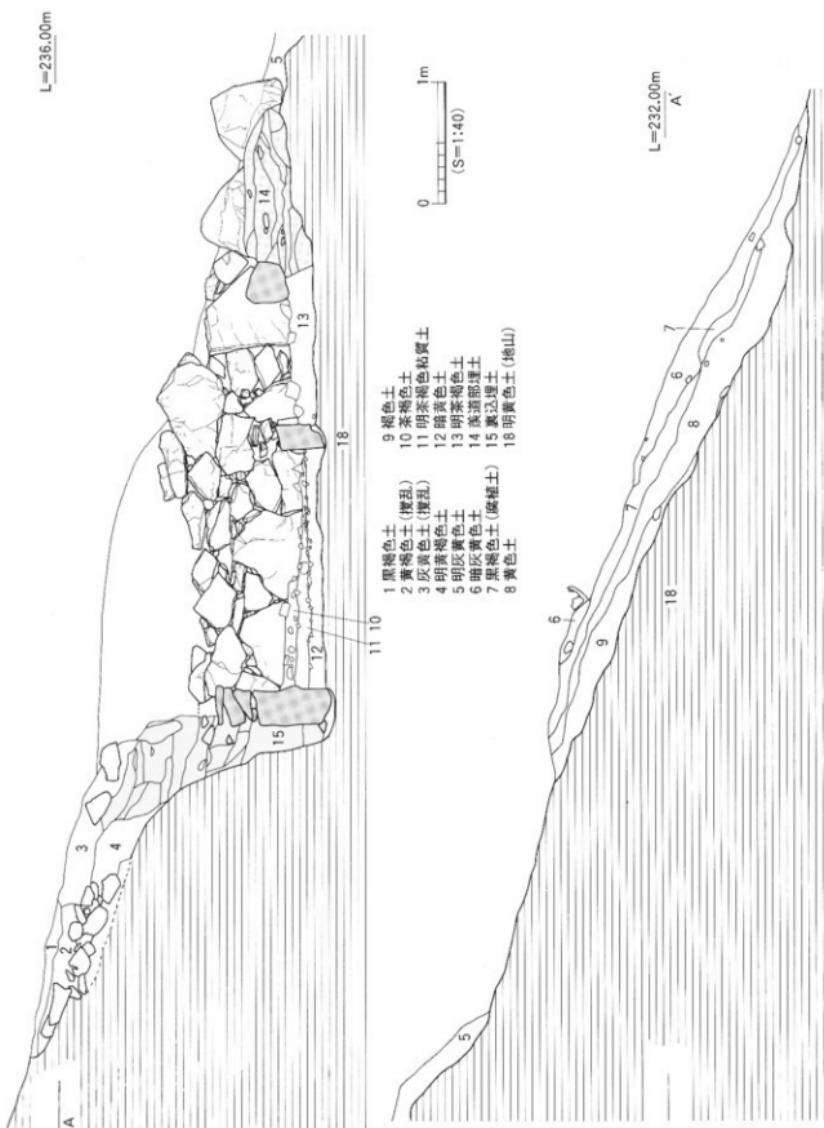
第70図 F区調査前測量図

F区の調査



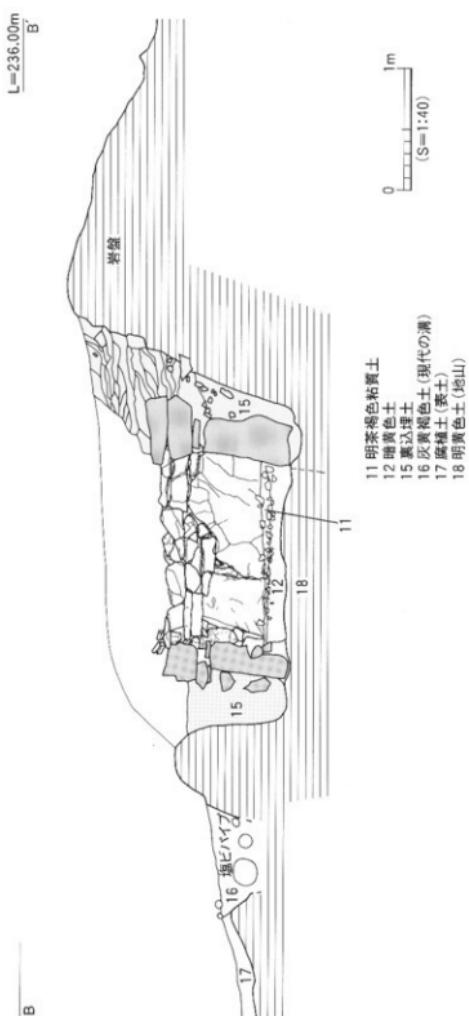
第71図 F区調査後測量図

瀬戸風呂5号墳



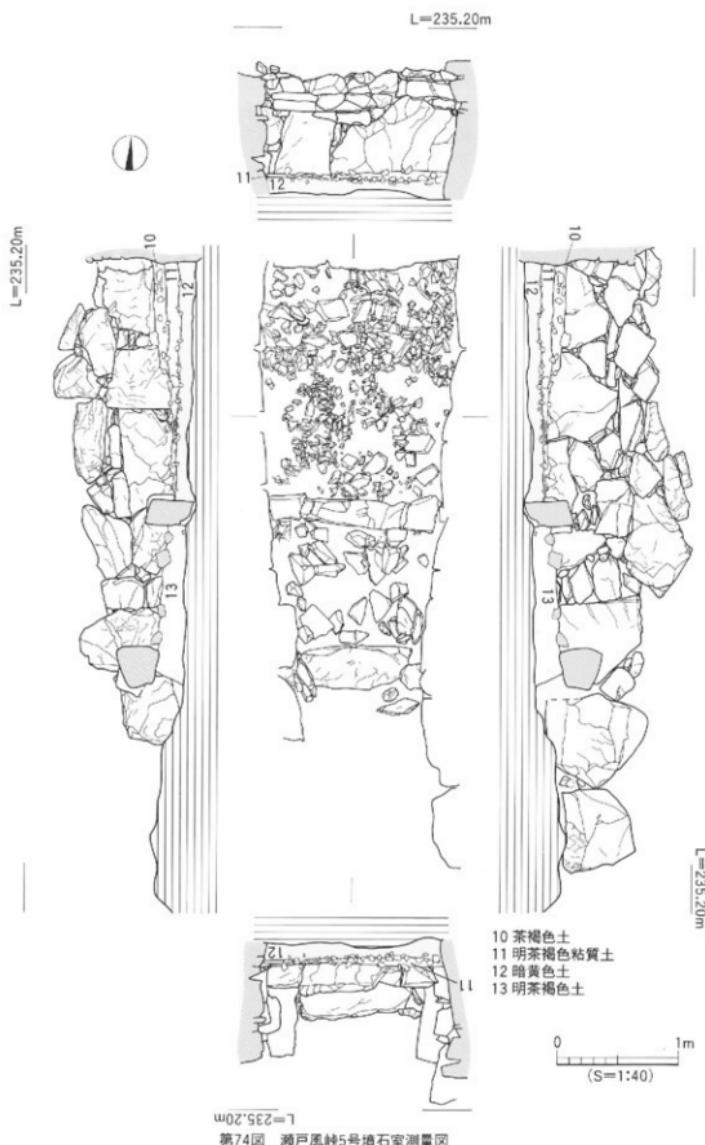
第72回 瀬戸風呂5号墳埴丘土層図(1)

F 区 の 調 査



第73図 海戸風神5号墳堆丘土層図(2)

F区の調査



第74図 潟戸風神5号填石室測量図

の間は、厚さ12cmの暗黄色土（第72・74・75図12）が敷かれ、仕切り石と玄門部の間には、厚さ20cmの明茶褐色土（第72・74・75図13）が敷かれる。床土上には礫が敷かれ、仕切り石から玄門部までの礫は、奥壁側に比べて大きな割石になる。したがって床土と礫床は、仕切り石を境に土色や礫の大きさに違いが見られることになる。

玄門部は、無袖で両側壁の間に框石を置き、玄室と羨道とを分ける。框石は、長方形を呈する割石を横長に使用し、床土である茶褐色土の上面に置かれる。框石と両側壁との隙間には、径10cm～20cmの割石を用いて塞いでいる。

なお、仕切り石から奥壁側の床土上には、花崗岩の小礫を含む茶褐色土（10）と明茶褐色粘質土（11）の2土層を検出した。検出当初は、明茶褐色粘質土（11）は床面の可能性を考えたが、2つの層の上面からは遺物が出土しないことから、床土および床面として取り扱わなかった。よって、仕切り石と奥壁との間の床土は暗黄色土（12）の一層になり、床面は1面とした。

（6）羨道（第72図）

羨道部は検出長1.88m、幅1.00m～1.04mを測る。羨道部の側壁基底石は、奥壁に向かって左側に1石、右側に2石が遺存する。羨道部の基底面は、框石から開口方向へ約50cmの地点で、玄室の基底面より20cm～24cm高くなる。羨道部には、明茶褐色土（第72図13）を切って、茶褐色系（14）の土層が検出された。土層（14）は検出長1.40m、基底面より高さ0.40m～0.56mを測り、南側が削られている。この土層は、框石上部の高さとほぼ同一になることから、羨道部の床土の可能性が高い。

（7）石室内遺物出土状況（第75図）

遺物は玄室内に出土が限られる。出土遺物には須恵器、鉄製品、装飾品がある。土器は須恵器で占められ、土師器は1点も出土していない。

遺物の出土状況は、仕切り石から奥壁までの間では、仕切り石の東側に須恵器が集中する。鉄製品は、釘が広い範囲で出土し、刀子が玄室中央部から出土している。装飾品は耳環、勾玉、管玉、ガラス小玉が中央部で多く出土した。

仕切り石から玄門部までの間では、東側に壊身と壠があり、西側壁沿いからは高壺と長頸壺が出土する。鉄製品は、釘が数点出土し、装飾品は出土していない。

（8）出土遺物

須恵器（第76図）

壺蓋（197）

197は玄室内の埋土除去中に出土した破片で、床面からは遊離している。推定口径8.0cm、残高1.5cmを測る。

壺身（198～202）

198は口径8.7cm、器高3.3cmを測る。口縁端部は内に屈曲する。底部は丸味をもつ。199は口径9.4cm、器高3.2cmを測る。口縁端部は内に屈曲する。底部は平坦。200は口径9.2cm、器高3.6cmを測る。口縁端部は内に屈曲し、端部は上方に短くのびる。底部は丸味をもつ。201は口径8.8cm、器高3.7cmを測る。口縁端部は内に屈曲する。底部はやや突出する。202は口径8.5cm、器高3.3cmを測る。口縁部は内に

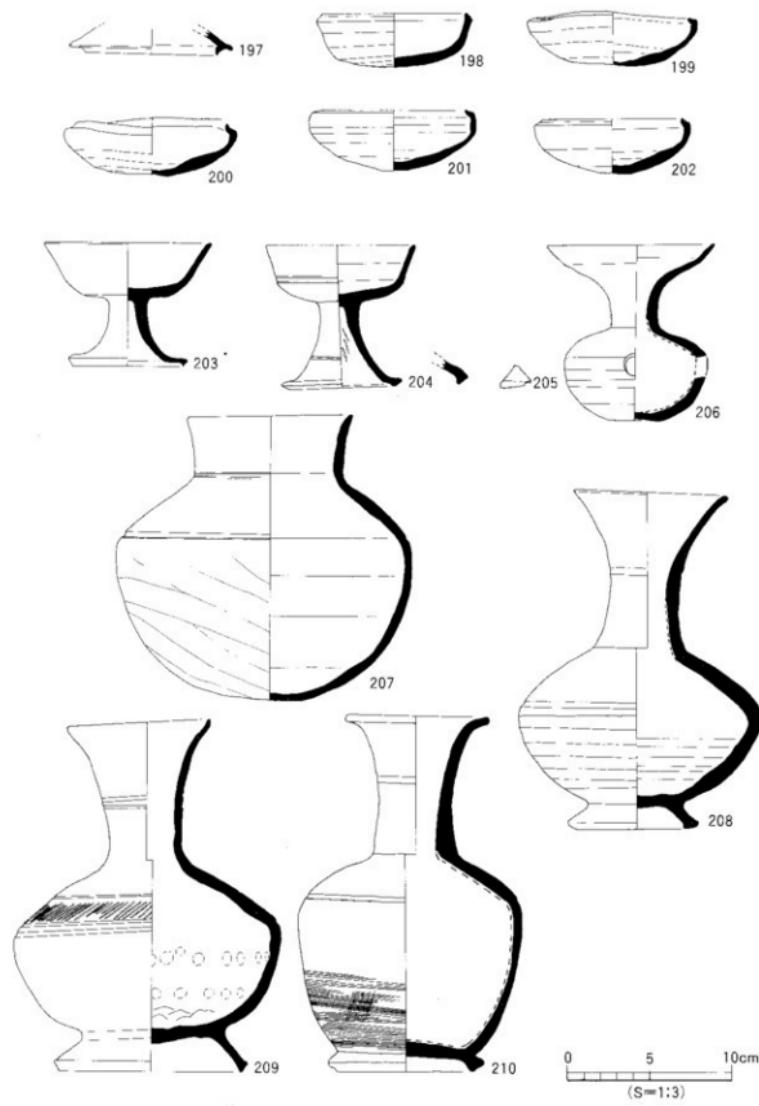
瀬戸風峠5号墳

L=234.30m



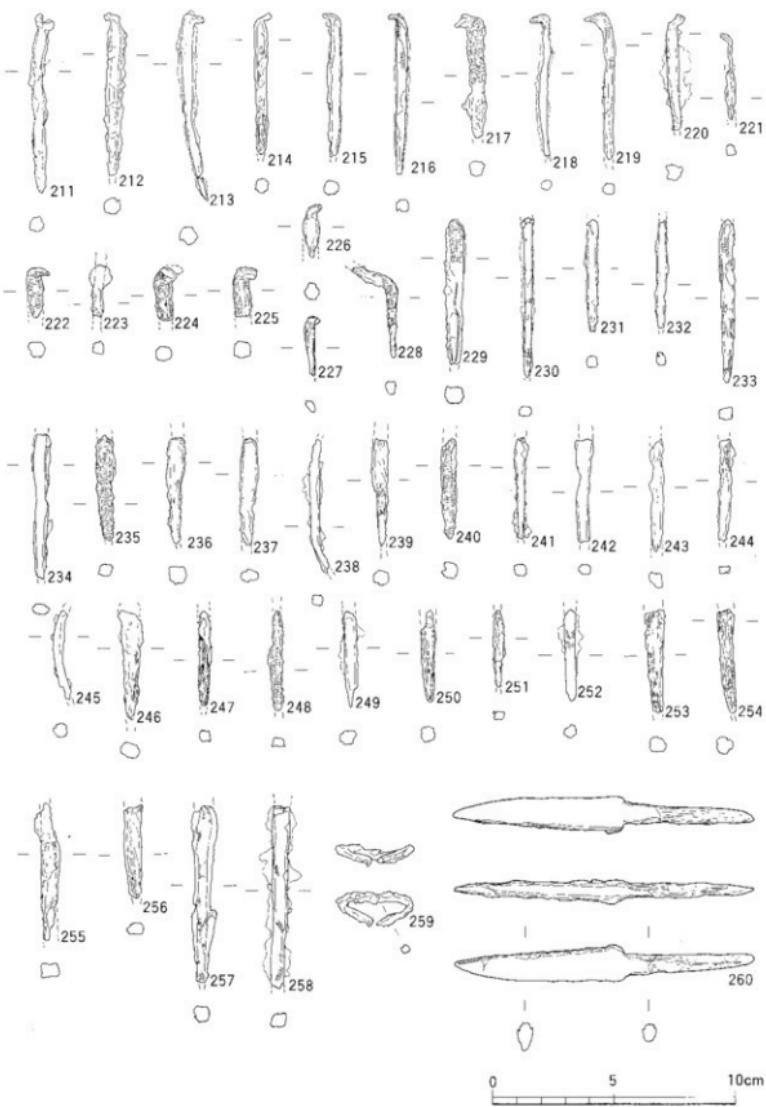
第75図 瀬戸風峠5号墳石室内遺物測量図

F 区の調査



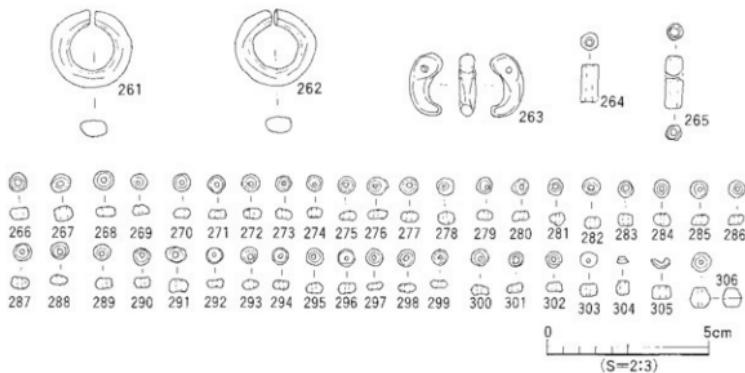
第76図 湖戸風峠5号墳石室内出土遺物実測図(1)

瀬戸風岬5号墳



第77図 瀬戸風岬5号墳石室内出土遺物実測図(2)

F 区の調査



第78図 濑戸風軒5号墳石室内出土遺物実測図(3)

屈曲し、端部は上方に短くのびる。底部はやや突出する。

高坏 (203~205)

203は推定口径10.0cm、器高7.6cmを測る。坏部は平坦で、口縁部は外上方にたちあがる。脚端部は内に屈曲して接地する。204は口径9.0cm、器高8.9cmを測る。坏部外面には底部と口縁部の境に2条の凹線が施され、脚柱には凹線が1条施される。205は床面から遊離して出土したもので、残高1.4cmの脚端部である。

甌 (206)

206は口径10.3cm、器高10.9cmを測る。底部は平坦で、胴部は偏球形を呈する。口縁部は外方に開き、口縁端近くで屈曲して外上方にたちあがる。胴部内には穿孔時の粘土塊が残る。

直口壺 (207)

207は口径10.0cm、器高17.4cmを測る。口縁部はわずかに外上方に開く。口縁端部は丸い。肩部に1~2条の凹線を施す。

長頸壺 (208~210)

208は口径9.2cm、器高20.8cmを測る。口縁部は外上方に大きく開き端部は丸い。頸部外面に1条の凹線が巡る。胴部の形は算盤形を呈し、胴部最大径を胴中位にもつ。肩部に1条の凹線を施す。脚端は内に肥厚する。209は口径8.8cm、器高21.6cmを測る。口縁部は外上方に開き、端部は屈曲して上方に短くのびる。頸部外面に2条の凹線を施す。胴部の形は算盤形を呈し、肩部の文様帶には斜位の刺突文を施す。脚端は内で接地する。210は口径8.6cm、器高21.9cmを測る。口縁部は外上方に開き、端部は水平に短くのびる。頸部外面に2条の凹線を施す。胴部最大径を胴上位にもつ。肩部に1条の凹線を施す。脚台は外方に短く開き、脚端は内で接地する。

鉄製品 (第77図)

鉄釘 (211~258)

釘は48本出土している。釘頭が残るもの17本 (211~227)、破損品が31本 (228~258) ある。横断

瀬戸風崎5号墳

面形態は、いずれも方形を呈する。完形のもの3本(211・213・216)がある。長さは、211が7.4cm、213が7.9cm、216が6.6cmを測る。257・258は鉄錐の可能性がある。

刀子(260)

260は造存状態が良好である。刀身は長さ7.0cmを測る。茎には木質が残る。

不明品(259)

259は厚さ0.3cmの鉄棒を折り曲げたものである。金具の一種と思われる。

装飾品(第78図)

耳環(261・262)

261・262とも銅芯金張製の耳環である。261は重量8.37g、262は重量9.25gを測る。

勾玉(263)

263はガラス製の勾玉で、長さは1.94cm、直径0.50cmを測る。色調は淡い水色である。

管玉(264・265)

264・265はガラス製の管玉である。264は長さ1.19cm、直径0.57cmを測る。色調は紺色である。265は長さ1.60cm、直径0.50cmを測る。色調は濃青色である。

ガラス小玉(266~305)

ガラス小玉は、床面から出土したものと土洗いでみつかったものを含め40点が出土している。304・305は破片で、他は完形である。直径は、0.48cm(283)~0.63cm(276)を測る。色調は266は青紫色、267は濃青紫色、268~303は濃青色、304・305は黄色である。

切子玉(306)

306は長さ0.60cm、幅0.60cmを測る。色調は半透明である。

遺物觀察表

—凡 例—

(1) 以下の表は遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 各記載について

法量欄 () : 復元推定値。

形態・施文欄: 土器の各部位名称を略記。

例) 口→口縁部、胴上→胴部上半、天→天井部。

胎土・焼成欄: 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製上。

() 内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

焼成欄の略記について。○→良好、○○→良、△→不良。

表 1 1号墳石室内出土遺物觀察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調査		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	(1) 図版
				外面	内面				
1	壺蓋	口径 14.0 器高 3.9	天井部は偏平。天井部と口縁部を分ける凹溝や棱はみられない。 口縁端部は丸くおさめる。	②回転ヘラケズリ ④回転ナデ	②ナデ ④回転ナデ	灰色 黄灰色	長・4(1~3) ○		36
2	壺蓋	口径(12.8) 残高 2.7	天井部は欠失。天井部と口縁部の間に浅い凹溝が延る。口縁端部は丸くおさめる。	②回転ナデ	②回転ナデ	暗青灰色	長・石(0.5~1) ○	自然釉	
3	壺蓋	口径(12.6) 残高 3.1	天井部は欠失。天井部と口縁部を分ける凹溝や棱はみられない。 口縁端部は丸くおさめる。	②回転ヘラケズリ ④回転ナデ	②ナデ ④回転ナデ	青灰色 赤灰色	長・4(0.5~1) ○	自然釉	
4	壺身	口径(8.7) 残高 2.8	たちあがりは内傾し端部は丸くおさめる。受部は水平にのげる。	②回転ナデ	②回転ナデ	灰色	石(0.5~1) ○	自然釉	
5	壺身	口径(11.0) 残高 4.0	たちあがりは内傾し端部は丸くおさめる。受部とたちあがり境に沈模がある。	②回転ナデ ②回転ヘラケズリ →目字ナデ	②回転ナデ →目字ナデ	灰色	石(0.5~1) ○		36
6	壺身	口径(10.1) 器高 4.9	たちあがりは内傾し端部は丸くおさめる。受部は上方にのげる。 底盤は丸い。	①回転ナデ ②回転ヘラケズリ	横ナデ ②ナデ	灰白色	石(0.1~1) ○	自然釉	
7	広口壺	口径 14.9 器高 22.9	L型部は大きく外反する。口縁端部は棱をもつ。腹部に2条の波状文と2条の沈模を施す。底盤は丸い。	②カキヨ ④横ナデ ④カキヨ ④タタキ	①横ナデ ④横ナデ ④タタキ	灰色	石・長(1~25) ○	自然釉	37
8	短頸壺	口径 9.2 器高 13.7	L型部は下方に肥厚しややくみをもつ。肩部は円錐形。	②横ナデ ②カキヨ	②横ナデ ④指頭痕ナデ	青灰色	石・長(1~4) ○		36
9	短頸壺	口径 12.2 器高 14.0	L型部は鋭く外反する。L型端部は丸みをもつ。底部は崩壊形で、底部は丸い。	②横ナデ ④カキヨ ④ヘラケズリ	横ナデ ④カキヨ ④ヘラケズリ	灰白色 灰色	石・長(1~5) ○		36
10	長颈壺	口径 7.1 器高 15.0	L型部は外傾し下方にのげる。L型端部は丸い。肩部に2条の沈模を施す。底部に凹曲された間に刺突文を構す。	②横ナデ ④ヘラケズリ	横ナデ ④ヘラケズリ	灰白色	石・長(1~5) ○		36
11	脚付壺	口径 8.6 底径 11.1 器高 15.9	L型端部は丸い。体部に3条の凹溝を施す。脚部は中央が凹む。	②横ナデ ④バタケ→ナデ ④横ナデ	横ナデ ④バタケ→ナデ ④横ナデ	灰色	石・長(0.5~1.5) ○	自然釉	36
12	脚付壺	口径 8.4 残高 10.6	L型部は直立て長いのびる。L型端部は丸い。体部の肩は張らない。 脚部に1条の沈模を巡らす。	②ナデ ④ヘラケズリ →横ナデ	横ナデ ④ヘラケズリ →横ナデ	赤灰色	石・長(1~3) ○	自然釉	36
13	脚付壺	底径 13.8 残高 21.5	丸い底部から内側してたちあがる臺部、肩部と脚の接合部は棱をなす。脚は外反して引き通し内削して瘤部で鋭く外反する。	④タタキ→横 ナデ ④シボリ直 横ナデ	④横ナデ ④シボリ直 横ナデ	緑灰色 灰色	石・長(1~3) ○	自然釉	37

遺物観察表

1号墳石室内出土遺物観察表(土製品)

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面)色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
14	甕	口径(21.4) 残高 8.3	口縁部は端部近くで肥厚し外反する。口縁端部は丸い。	①横ナデ ②タキ→ナデ	灰色・緑色 灰色	石(0.5~3) ○	自然乾	37	
15	甕	口径(46.0) 残高 12.3	口縁部は外反して開き、端部は上下に張張する。口縁部には沈線で区画した上下2段に刺突文を施す。	①カキ目 ②タキ	①横ナデ ②タキ	青灰色	石(0.5~1) ○		37
16	器台	直径(25.5) 残高 16.3	使き込みが美しい脚である。脚には波状文を施したあと三角形のスカシを施している。	カキ目	横ナデ	青灰色	石(0.1~3) ○		37

表2 1号墳石室内出土遺物観察表(鉄製品)

(1)

番号	器種	遺存状態	材	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
17	大刀	刀身	鉄製	25.9	2.6	1.5	132.8		39
18	大刀	刀身	鉄製	16.7	3.6	0.7~ 2.2	144.0		39
19	大刀	刀身	鉄製	13.1	2.6	0.9	62.3		39
20	大刀	刀身	鉄製	14.8	2.3	1.1	66.5		39
21	鐸	一部欠損	鉄製	7.5	6.0	2.3	75.2		39
22	鉄鎌	鎌身部	鉄製	7.5	2.3	0.6	14.8		38
23	鉄鎌	鎌身部	鉄製	7.4	2.6	0.5	15.3		38
24	鉄鎌	鎌身部	鉄製	9.5	2.0	0.4	19.7		38
25	鉄鎌	鎌身部	鉄製	(9.4)	3.2	0.5	13.5		38
26	鉄鎌	定形	鉄製	11.8	3.2	0.7	32.3	木片付着	38
27	鉄鎌	茎部欠損	鉄製	11.1	3.1	0.7	32.6	木片付着	38
28	鉄鎌	茎部欠損	鉄製	11.1	3.5	0.4~ 0.5	23.3	木片付着	38
29	鉄鎌	鎌身部	鉄製	6.1	3.0	0.6	14.7	木片付着	38
30	鉄鎌	鎌身部	鉄製	7.9	2.2	0.4	14.6	木片付着	38
31	鉄鎌	鎌身部	鉄製	5.2	1.8	0.4	6.7		38

瀬戸風呂遺跡

1号墳石室内出土遺物観察表(鉄製品)

(2)

番号	器種	遺存状態	材	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
32	鉄 鐸	頭部	鉄 製	8.6	2.0	0.4	12.8	木片付着	38
33	鉄 鐘	頭部	鉄 製	6.7	2.3	0.4	13.1	木片付着	38
34	鉄 鐘	ほぼ完形	鉄 製	15.9	1.4	0.5	21.3	木片付着	38
35	鉄 鐘	錐身部	鉄 製	11.5	1.3	0.6	14.0		38
36	鉄 鐘	ほぼ完形	鉄 製	10.8	1.3	0.4	14.6	木片付着	38
37	鉄 鐘	茎部欠損	鉄 製	14.8	1.3	0.5	18.7	木片付着	38
38	鉄 鐘	茎部欠損	鉄 製	13.5	1.7	0.6	15.5	木片付着	38
39	鉄 鐘	ほぼ完形	鉄 製	12.8	1.3	0.6	16.3	木片付着	38
40	鉄 鐘	完形	鉄 製	12.9	1.1	0.6	16.4	木片付着	38
41	鉄 鐘	錐身部欠損	鉄 製	10.0	1.0	0.5	14.8	木片付着	38
42	鉄 鐘	茎部欠損	鉄 製	12.1	1.1	0.4	19.1	木片付着	38
43	鉄 鐘	錐身部	鉄 製	7.4	1.4	0.5	14.1	2本がくっついている	38
44	鉄 鐘	茎部欠損	鉄 製	13.3	1.3	0.5	15.3	木片付着	38
45	鉄 鐘	茎部欠損	鉄 製	12.9	1.3	0.5	17.0	木片付着	38
46	鉄 鐘	錐身部欠損	鉄 製	15.4	1.1	0.5	20.3	木片付着	38
47	鉄 鐘	頭部	鉄 製	7.0	1.0	0.4	7.7		38
48	鉄 鐘	錐身部欠損	鉄 製	4.5	1.7	0.3	6.2	木片付着	38
49	鉄 鐘	錐身部欠損	鉄 製	13.6	1.0	0.6	14.7	木片付着	38
50	鉄 鐘	頭部	鉄 製	5.9	0.8	0.5	6.9	木片付着	38
51	鉄 鐘	茎部	鉄 製	4.8	1.0	0.4	4.4	木片付着	38

遺物観察表

1号墳石室内出土遺物観察表(鉄製品)

(3)

番号	器種	調査状態	材	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
52	鐵 崩	頭 部	鉄 製	2.9	0.5	0.4	2.3		38
53	鐵 崩	頭 部	鉄 製	7.6	0.7	0.7	12.1	木片付着	38
54	轡	鍍板、引手	鉄 製	23.9	17.8	1.9	587.0		39
55	轡	鍍板、引手	鉄 製	14.7	9.4	1.1	253.0		39
56	錐	完 形	鉄 製	16.4	3.1	0.8	81.4		40
57	錐	完 形	鉄 製	16.2	3.0	0.8	75.4		40
58	錐	先端部欠損	鉄 製	13.9	3.6	0.6	51.4		40
59	錐	先 端 部	鉄 製	4.3	2.5	0.3	8.1		
60	錐 先	一部欠損	鉄 製	23.0	20.5	1.3	561.0		40
61	錐 先	一部欠損	鉄 製	21.3	17.2	1.6	372.0		40
62	錐 先	完 形	鉄 製	17.3	22.4	0.7	114.0		40
63	鐵 斧	ほぼ完形	鉄 製	14.7	5.9	3.6	422.0		40
64	鐵 斧	1/3残存	鉄 製	6.0	4.2	2.0	57.9		40
65	鐵 斧	1/4欠損	鉄 製	9.6	4.9	1.3	78.7		40
66	刀 子	切 先	鉄 製	3.6	1.3	0.6	3.1		38
67	刀 子	茎 部	鉄 製	3.9	2.0	0.6	10.3	木片付着	38
68	刀 子	茎 部	鉄 製	6.8	1.9	0.6	19.6	木片付着	38
69	刀 子	茎 部	鉄 製	3.9	1.9	1.5	6.2	木片付着	38
70	刀 子	轍 身 部	鉄 製	12.7	2.3	0.7	31.2	木片付着	38
71	鑿	刀部欠損	鉄 製	23.9	2.2	1.9	147.8		40

瀬戸風峠遺跡

1号墳石室内出土遺物観察表（鉄製品）

(4)

番号	器種	遺存状態	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
72	鑿	茎部	鉄製	9.0	2.8	2.7	110.8		40
73	鑿	茎部	鉄製	9.3	2.0	0.9	30.2		40
74	鑿	完形	鉄製	13.1	1.1	0.6	19.2	木片付着	38
75	鑿	完形	鉄製	13.5	2.2	0.6	37.0	木片付着	
76	鑿	茎部	鉄製	6.8	1.5	1.0	17.1	木片付着	
77	鑿	刃部	鉄製	4.4	1.4	1.0	11.8		
78	鉗	茎部	鉄製	7.3	1.7	0.6	11.0		40
79	鉗	(は)完形	鉄製	9.1	1.2	0.8	17.2	木片付着	40
80	鉗	はは完形	鉄製	10.7	2.5	2.2	53.9	木片付着	40
81	不明	(刀部) 頭部および 茎部	鉄製	(11.4)	2.3	0.9	27.8		
82	不明	完形	鉄製	3.4	3.2	1.8	14.7		

表3 1号墳石室内出土遺物観察表（耳環）

番号	器種	遺存状態	材質・色	法量				備考	図版
				縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
83	耳環	芯部	銅製 灰オリーブ色	2.7	2.6	0.3	2.33		41
84	耳環	光形	銀製? 灰色	1.8	1.7	0.3	1.14		41
85	耳環	完形	銀製? 暗灰色	1.8	1.8	0.3	1.80		41

表4 1号墳石室内出土遺物観察表（玉類）

(1)

番号	器種	遺存状態	材質・色	法量				備考	図版
				長さ(cm)	直径(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
86	管玉	完形	碧玉 暗緑色	1.80	0.50	上 0.25 下 0.10	0.85		41
87	管玉	完形	碧玉 暗緑色	2.32	0.65	上 0.20 下 0.09	1.97		41

遺物観察表

1号墳石室内出土遺物観察表（玉類）

(2)

番号	器種	遺存状態	材質・色	法量			備考	図版
				長さ(cm)	直径(cm)	孔径(cm)		
88	管玉	ほぼ完形	碧玉 暗緑色	2.28	0.64	上 0.27 下 0.12	1.98	41
89	管玉	完形	碧玉 暗緑色	2.50	0.80	上 0.25 下 0.10	3.14	41
90	管玉	完形	碧玉 暗緑色	2.28	0.78	上 0.28 下 0.10	2.94	41
91	丸玉	完形	ガラス 濃青色	0.65	0.65	上 0.20 下 0.18	0.58	41
92	丸玉	完形	ガラス 濃青色	0.65	0.75	0.20	0.55	41
93	丸玉	完形	ガラス 濃青色	0.50	0.78	0.20	0.46	41
94	丸玉	完形	ガラス 濃青色	0.62	0.80	0.20	0.44	41
95	丸玉	完形	ガラス 濃青色	0.52	0.75	上 0.20 下 0.15	0.55	41
96	丸玉	完形	ガラス 濃青色	0.51	0.75	0.15	0.45	41
97	丸玉	完形	ガラス 濃青色	0.65	0.82	0.18	0.67	41
98	丸玉	完形	ガラス 濃青色	0.55	0.70	0.15	0.43	41
99	丸玉	完形	ガラス 濃青色	0.50	0.75	上 0.20 下 0.15	0.44	三ヶ月状の孔円が上下 面に有り、貫通してい るかは不明。41
100	丸玉	完形	ガラス 濃青色	0.50	0.60	上 0.20 下 0.15	0.23	41
101	丸玉	完形	ガラス 濃青色	0.42	0.53	0.20	0.18	41
102	丸玉	完形	ガラス 濃青色	0.38	0.58	0.18	0.20	41
103	丸玉	完形	ガラス 青色	0.38	0.51	0.18	0.14	41
104	丸玉	完形	ガラス 濃青色	0.50	0.50	0.20	0.19	41
105	小玉	完形	ガラス 濃青色	0.20	0.40	0.10	0.06	41
106	小玉	完形	ガラス 青色	0.30	0.40	0.10	0.08	41
107	小玉	完形	ガラス 濃青色	0.25	0.35	0.15	0.04	41

瀬戸風崎遺跡

1号墳石室内出土遺物観察表(玉類)

(3)

番号	器種	遺存状態	材質・色	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	直径(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
108	小玉	完形	ガラス 淡緑色	0.19	0.34	0.14	0.03		41
109	小玉	完形	ガラス 水色	0.28	0.45	上 0.20 下 0.15	0.07		41
110	小玉	完形	ガラス 青色	0.26	0.39	0.12	0.07		41
111	小玉	完形	ガラス 水色	0.27	0.38	0.16	0.06		41
112	小玉	完形	ガラス 緑色	0.50	0.30	0.10	0.08		41
113	小玉	完形	ガラス 黄色	0.25	0.35	0.11	0.05		41
114	切子玉	一部欠損	水晶 透明	1.52	1.0	上 0.18 下 0.29	1.86		41
115	切子玉	完形	水晶 透明	1.70	1.10	上 0.40 下 0.20	2.26		41
116	不明	1/4欠損	銅芯・陶質 赤桃色	1.35	1.43	0.22	4.00	穴の中に管がさされている。	

表5 1号墳石室外出土遺物観察表(土製品)

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外側) (内面)	粘土 焼成	備 考	図版
				外 面	内 面				
117	坏蓋	口径(13.2) 残高 3.1	天井部欠失。稜は丸く口縁部は外方に開く。口縁端部は凹面をなす。	②回転ナデ	⑤回転ナデ	青灰色	石(1~1.5) ○		
118	坏蓋	口径(13.9) 残高 2.8	天井部欠失。稜は複数によってあらわされる。口縁端部は丸くおさめる。	①回転ナデ	④回転ナデ	明青灰色	石(0.5~1) ○	自然釉	
119	坏蓋	口径(13.6) 残高 2.5	天井部欠失。稜はみられない。口縁端部は丸くおさめる。	②回転ナデ	④回転ナデ	暗青灰色	石(1~2) ○	自然釉	
120	坏身	口径(11.2) 残高 3.6	たちあがりは内傾して上方にたちあがる。端部は丸くおさめる。受部は上方にのびる。底部は丸くおさめる。	②回転ナデ ⑥回転ヘラケズリ	④回転ナデ ⑦回転ナデ	青灰色	石(0.5~1) ○		
121	坏身	口径(13.8) 残高 4.6	たちあがりは外反気味に上方にたちあがる。端部は丸くおさめる。受部は水平にのびる。底部は平坦気味。	②回転ナデ ⑥回転ヘラケズリ	④回転ナデ ⑦回転ナデ	明灰色	石(1~2) ○		
122	坏身	口径(11.8) 残高 2.8	たちあがりは内傾してたちあがる。端部は丸くおさめる。受部は上方にのびる。底部は欠失。	②回転ナデ	④回転ナデ	明灰色 明青灰色	石(1~1.5) ○		
123	坏身	口径(12.3) 残高 3.5	たちあがりは内傾して上方にたちあがる。端部は丸くおさめる。受部は上方にのびる。底部は欠失。	②回転ナデ	④回転ナデ	明灰色 灰 色	石(0.5~1.5) ○		
124	坏身	口径(10.6) 残高 3.6	たちあがりは内傾して上方にたちあがる。端部は丸くおさめる。受部は上方にのびる。底部は欠失。	②回転ナデ	④回転ナデ	明青灰色	石(0.5~1) ○		
125	坏身	口径(10.3) 残高 3.2	たちあがりは内傾して握るのびる。受部は水平にのげる。	②回転ナデ ⑥回転ヘラケズリ	③回転ナデ ⑧回転ナデ	明青灰色	石(0.5~1) ○		

遺物観察表

1号墳石室外出土遺物観察表(土製品)

(2)

番号	基種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外側) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
126	広口壺	残高 9.0	口縁部片。口縁端部外側に刺突文を施す。口縁部には円錐形に区画した2段の文様型に波状文を施す。	回転ナデ	回転ナデ	褐灰色	石(0.5~1) ○	自然釉	41
127	広口壺	残高 4.9	口縁部片。口縁端部は斜面方形。口縁部に2条の波状文が施される。	①回転ナデ ②カキ目	回転ナデ	暗灰色	石(0.5~2) ○		41
128	鉢	口径(21.6) 残高 4.3	口縁部片。口縁端部は外に肥厚し丸い。	回転ナデ	回転ナデ ナデ	明灰色	石(1~3) ○		
129	子持壺	口径(3.6) 残高 5.6	LI縁部は上方にのび、端部は先細る。	①ナデ ②ヘラケズリ	横ナデ	暗灰色	石(0.5~1) ○	自然釉	41
130	甕	残高 5.7	口縁端部は断面方形。口縁端部外面直下に1条の凸筋を施せらる。	横ナデ	横ナデ	青灰色	石・長(1~2) ○		41
131	甕	残高 3.5	口縁部片。口縁端部は上下に拡張する。	横ナデ	横ナデ	青灰色	石・長(0.5~1) ○		41
132	甕	残高 10.5	削部片。外面に格子状の叩き目を施す。内面は叩き痕跡を残す。	格子状タキ	タタキ→ナデ	暗灰色	石(1~2) ○		
133	器台	口径(25.2) 残高 10.3	口縁端部は鉗曲して短くのびる。口縁端部下面直下に1条の凸筋を施す。口縁端部には波状文を施す。	①横ナデ ②タタキ	②横ナデ ③タタキ	暗灰色	石(0.5~1) ○		

表6 1号墳石室外出土遺物観察表(玉類)

番号	器種	遺存状態	材質・色	法 量			備 考	図版	
				長さ(cm)	直径(cm)	孔径(cm)			
134	切子玉	完 形	水 晶 透 明	1.46	1.0	上 0.16 下 0.36	1.58		41

表7 3号墳出土遺物観察表(土製品)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外側) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
135	広口壺	L1径(15.5) 器高 15.7 底幅 8.4	LI縁部外側直下に断面三角の凸筋1条を施す。内側直下に斜位のヘラ捺文を施す。	①横ナデ ②回転横ナデ ③回転横ナデ ④回転横ナデ	④回転横ナデ ⑤回転横ナデ ⑥回転横ナデ	暗灰色 明灰色	石(1~3) ○		41

表8 3号墳出土遺物観察表(鉄製品)

番号	器種	遺存状態	材	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
136	釘	先端部欠損	鉄 製	1.9	0.6	0.4	4.3		
137	釘	頭 部	鉄 製	6.6	0.6	0.6	1.7	木片付着	

瀬戸風呂跡

表9 3号石蓋土坑墓出土遺物観察表(耳環)

番号	器種	遺存状態	材質・色	法量				備考	図版
				幅(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
138	耳環	完形	銅芯銀張製 明緑灰色	1.90	1.70	0.20	0.38		41

表10 8号箱式石棺出土遺物観察表(土製品)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
139	広口壺	残高 6.9	口縁端部上面に刺文を施す。口縁部紋様帶には波状文が施される。	横ナデ	横ナデ	暗青灰色	密(砂~1) ○	自然釉	

表11 B区出土遺物観察表(土製品)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
140	环甕	口径(12.2) 残高 2.8	天井部欠失。天井部と口縁部の境は凹窓である。口縁部は丸い。	回転横ナデ	回転横ナデ	明灰色	石(1~1.5) ○		
141	広口壺	口径 7.3	L字縁端部は下方に弧曲する。文様帶にはヘラ状工具による斜位の沈線文が施される。	回転横ナデ	回転横ナデ	暗青灰色	石(1~3) ○		

表12 B区出土遺物観察表(鉄製品)

番号	器種	遺存状態	材	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
142	鉄錐	銀身欠損	鉄製	17.3	1.5	1.0	38.14		41

表13 C区表採遺物観察表(土製品)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
143	壺	残高 2.8	腹部に押捺突帯を巡らす。	ナデ	ナデ	茶褐色	石・長(1~3) ○		
144	短腹甕	口径(16.0) 残高 11.8	全体的に器壁が厚い。口縁部は短く上方にのび、端部は平面。	回転横ナデ	回転横ナデ	暗灰色	石(1~4) ○		

表14 4号墳石室内出土遺物観察表(土製品)

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
145	高环	口径 9.8 底径 8.2 器高 8.8	口縁部は内溝し外上方にたちあがる。脚柱に1条凹溝を施す。 脚部は内に屈曲して接地する。	①回転横ナデ ②凹溝ハケナデ ③脚柱回転横ナデ	④回転横ナデ ⑤凹溝ハケナデ ⑥脚柱回転横ナデ	紫灰色	長・石(延辺~2) ○	自然釉	43
146	高环	口径 11.0 底径 8.9 器高 9.2	口縁部は上方にたちあがる。脚部は内に屈曲して接地する。	⑦回転横ナデ ⑧凹溝ハケナデ ⑨脚柱回転横ナデ	⑩回転横ナデ ⑪凹溝ハケナデ ⑫脚柱回転横ナデ	青灰色	長・石(1~2) ○		42
147	高环	口径 12.0 底径 9.9 器高 9.6	L字縁端部は内溝し上方にたちあがる。脚部は内に屈曲して接地する。	⑬回転横ナデ ⑭凹溝ハケナデ ⑮脚柱回転横ナデ	⑯回転横ナデ ⑰凹溝ハケナデ ⑱脚柱回転横ナデ	灰色	長・石(1~2) ○		42

遺物観察表

4号墳石室内出土遺物観察表（土製品）

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		土焼成	備考	図版
				外	内			
148	高环	口径 12.5 底径 9.2 器高 9.1	口縁部は内溝し上方にたちあがる。脚端は内に屈曲する。	回転横ナダ 回転横ハラタケ 回転横ナダ	回転横ナダ 回転横ナダ 回転横ナダ	灰 灰白色	長・石(1~2) ◎	42
149	高环	口径 12.8 底径 9.5 器高 9.7	口縁部は内溝し上方にたちあがる。脚端は内に屈曲する。	回転横ナダ 回転横ハラタケ 回転横ナダ	回転横ナダ 回転横ナダ 回転横ナダ	明灰色 オリーブ灰色	長・石(1~4) ◎	42
150	高环	口径 11.4 底径 8.6 器高 9.6	口縁部は内溝し上方にたちあがる。脚端は内に屈曲して棲地する。	回転横ナダ 回転横ナダ 回転横ナダ	回転横ナダ 回転横ナダ 回転横ナダ	青灰色	長・石(1~2) ◎	42
151	环身	口径 9.9 器高 3.8	口縁部は外反して上方にのびる。底部はやや丸く不安定。	回転横ナダ ナダ	回転横ナダ 回転横ナダ	灰白色・灰色 灰白色	長・石(1~4) ◎	
152	長頸壺	残高 5.8	体部仄。肩部に刻文と1条の凹線を施せる。	回転横ナダ	回転横ナダ	緑青灰色 青灰色	蜜(秒~1) ◎	
153	長頸壺	口径 7.6 底径 11.0 器高 20.4	口縁部は外上方にのびる。腹部接合部に凸溝がある。腹部は扁平で肩が張る。肩部に刻文を施す。	回転横ナダ 回転横ハラタケ 回転横ナダ	回転横ナダ 回転横ナダ 回転横ナダ	緑灰色 灰色	長・石(1~2) ◎	自然釉 43
154	器台	底径 30.8 残高 5.9	内溝して接する脚部。脚の端部は凹円をなす。波状文と刻文を施す。	回転横ナダ	回転横ナダ	青灰色	蜜(秒~2) ◎	45
155	土師环	口径 13.4 器高 3.5	口縁部は内溝して上方にたちあがる。	横ナダ ヘラミガキ	横ナダ ヘラミガキ	桃白色	長・石(0.5~1) ◎	43
156	土師环	口径 16.2 器高 5.3	口縁部は内溝して上方にたちあがる。口縁部は丸くおさめる。	横ナダ	横ナダ ヘラミガキ	桃白色	長・石(0.5~1) ◎	43
157	土師环	口径 16.7 器高 5.4	口縁部は内溝して上方にたちあがる。口縁部は丸くおさめる。内面底部に划文。	横ナダ ヘラミガキ	横ナダ ヘラミガキ	赤褐色	長・石(0.5~2) ◎	43
158	土師环	口径(24.6) 残高 3.6	半底の底部から外上方にたちあがる口縁部。口縁部は丸くおさめる。	摩滅	摩滅	赤褐色	長・石(0.5~1) ◎	

表15 4号墳石室内出土遺物観察表（鉄製品）

(1)

番号	器種	遺存状態	材	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
159	鉄 鐕	ほぼ完形	鉄 製	13.1	0.7	0.6	11.2		43
160	鉄 鐕	ほぼ完形	鉄 製	12.6	0.5	0.5	11.8		43
161	鉄 鐕	ほぼ完形	鉄 製	14.5	0.7	0.4	11.0		43
162	鉄 鐕	ほぼ完形	鉄 製	12.9	0.8	0.5	11.5		43
163	鉄 鐕	ほぼ完形	鉄 製	14.9	0.8	0.4	13.8		43
164	鉄 鐕	ほぼ完形	鉄 製	13.6	0.8	0.7	10.9	木片付着	43
165	鉄 鐕	ほぼ完形	鉄 製	(17.3)	0.9	0.7	26.2		43

瀬戸風鈴遺跡

4号墳石室内出土遺物観察表(鉄製品)

(2)

番号	器種	遺存状態	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
166	鉄 銛	ほぼ完形	鉄 製	16.6	0.6	0.6	14.8	木片付着	43
167	鉄 銛	ほぼ完形	鉄 製	14.6	0.6	0.7	15.4		43
168	鉄 銛	ほぼ完形	鉄 製	13.1	0.6	0.5	11.0		43
169	鉄 銛	頭部	鉄 製	(11.8)	0.6	0.4	7.8		43
170	鉄 銛	頭部	鉄 製	13.2	0.6	0.5	8.3		43
171	鉄 銛	頭部	鉄 製	11.1	0.6	0.5	9.5		43
172	鉄 銛	頭部	鉄 製	11.0	0.5	0.5	8.4		43
173	鉄 銛	茎部欠損	鉄 製	12.5	0.6	0.5	7.1		43
174	鉄 銛	頭部	鉄 製	12.5	0.6	0.5	12.3		43
175	鉄 銛	頭部	鉄 製	12.1	0.6	0.5	9.9		43
176	鉄 銛	頭部	鉄 製	8.3	0.6	0.4	5.7		43
177	鉄 銛	頭部	鉄 製	12.8	0.7	0.6	10.4		43
178	鉄 銛	頭部	鉄 製	11.4	0.6	0.4	9.6		43
179	鉄 銛	頭部	鉄 製	9.7	0.6	0.4	10.2		43
180	鉄 銛	頭部	鉄 製	9.2	0.6	0.4	9.8		43
181	鉄 銛	頭部	鉄 製	11.4	0.6	0.7	18.8		43

表16 4号墳石室内出土遺物観察表(耳環)

番号	器種	遺存状態	材質・色	法 量				備考	図版
				縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
182	耳 環	完 形	銅芯金張製 金色・緑色	1.80	2.16	0.75	11.27		44

遺物観察表

表17 4号墳石室内出土遺物観察表(玉類)

番号	器種	遺存状態	材質・色	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
183	勾玉	完形	瑪瑙 赤褐色	3.50	2.00	1.00	8.70		44

表18 木棺墓出土遺物観察表(鉄製品)

番号	器種	遺存状態	材	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
184	鉄剣	切先および 茎部欠損	鉄製	42.8	2.4~3.5	0.8	286.0		44

表19 6号墳出土遺物観察表(鉄製品)

番号	器種	遺存状態	材	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
185	鉄劍	腰身部欠損	鉄製	12.3	0.8	0.4	9.5	木片付着	44
186	鉄劍	頭部	鉄製	9.4	0.8	0.3	7.1	木片付着	44
187	鉄劍	頭部	鉄製	5.8	0.7	0.4	3.2		44
188	鉄劍	頭部	鉄製	5.7	0.9	0.4	4.9		44
189	鉄劍	頭部	鉄製	3.1	0.8	0.3	3.4		44
190	鉄劍	頭部	鉄製	4.3	0.8	0.2	2.4	木片付着	44
191	鉄劍	頭部	鉄製	3.7	0.7	0.3	2.6		44
192	刀子	茎部	鉄製	3.5	1.2	0.5	2.8	木片付着	44
193	刀子	茎部	鉄製	7.0	1.2	0.2	5.5	木片付着	44
194	刀子	刃部	鉄製	3.2	0.9	0.3	1.5		44
195	錐管	ラウ欠損	銅製	8.2 4.6	0.9	0.9	12.8		

表20 E区出土遺物観察表(土製品)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (裏面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
196	泥付 鏡	底径 4.5 残高 3.3	平底の底部から内溝してたちあ がる。底部外周に「×」のヘラ 記号。	⑩ヘラケズリ ⑩ナデ	横ナデ	暗灰色	石・黒(0.5~1) ○	内面 自然釉	44

瀬戸風峠遺跡

表21 5号墳出土遺物観察表(土製品)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
197	坏身	口径(8.0) 残高 1.5	口縁のかえりは口縁部より突出する。	回転横ナデ	回転横ナデ	灰白色	石(0.5~1) ○		
198	坏身	口径 8.7 器高 3.3	口縁部は底部から内済して上方にたちあがり、罐部は内に屈曲して突きのびる。	①回転横ナデ ②回転横ヘラケズリ	回転横ナデ	暗灰色	石(0.5~3) ○		45
199	坏身	口径 9.4 器高 3.2	口縁部は底部から内済して上方にたちあがり、罐部は内に強く屈曲する。	①回転横ナデ ②回転横ヘラケズリ →ナデ	回転横ナデ	暗灰色	石(0.5~2) ○	焼造	45
200	坏身	口径 9.2 器高 3.6	口縁部は底部から内済してたちあがり、口縁部近くで内に屈曲し端部は上方に突きのびる。	①回転横ナデ ②回転横ヘラケズリ →ナデ	回転横ナデ	暗灰色	石(0.5~2) ○	焼造	45
201	坏身	口径 8.8 器高 3.7	口縁部は底部から内済して上方にたちあがり、口縁部で内に屈曲する。	①回転横ナデ ②回転横ヘラケズリ →ナデ	回転横ナデ	暗灰色	石(0.5~1) ○		45
202	坏身	口径 8.5 器高 3.3	口縁部は底部から内済して上方にたちあがり、口縁部近くで内に屈曲して突きのびる。	①回転横ナデ ②回転横ヘラケズリ →ナデ	回転横ナデ	暗灰色	石(0.5~1) ○		45
203	高坏	口径(10.0) 底径 6.8 器高 7.6	環部は平坦な底部から外方にたちあがり、口縁部の脚柱は近くで脚端に内に屈曲して接続する。	①回転横ナデ ②回転横ヘラケズリ ③回転横ナデ	回転横ナデ 回転横ヘラケズリ	明灰色	石(0.5~1) ○	自然釉	
204	高坏	口径 9.0 底径 6.2 器高 8.9	環部は底部と口縁部の境に2条の凹縫があり、脚柱には1条の凹縫が施す。	④回転横ナデ ⑤回転横ヘラケズリ ⑥回転横ナデ	回転横ナデ 回転横ヘラケズリ →ナデ押え→ 回転横ナデ	明灰色	石(0.5~1) ○	自然釉	46
205	高坏	口径 1.4 残高 1.4	脚柱片。脚柱部は内に屈曲して接続する。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 明灰色	石(0.5~1) ○	自然釉	
206	底	口径 10.3 器高 10.9 基盤 3.0	口縁部は外上方に脚柱口縁部近くで屈曲して上方にのびる。頭部は屈く底部は平坦で安定する。	⑦⑧⑨回転横ナデ ⑩回転横ヘラケズリ ⑪回転横ナデ	回転横ナデ	明灰色	石(0.5~1) ○		46
207	直口 罐	口径 10.0 器高 17.4	口縁部は直立し罐部近くで屈く外上方に向く。肩部に1条~2条の凹縫を施す。	⑫⑬⑭回転横ナデ ⑯⑰回転横ヘラケズリ ⑮ナデ	回転横ナデ 回転横ヘラケズリ →ナデ	灰 色 暗灰色	石(1~2) ○		45
208	長颈 罐	口径 9.2 底径 6.7 器高 20.8	口縁部は外反して外上方に向く。肩部と胴部の境は後をもつ、肩部ややく1条の凹縫を施す。	⑯⑰⑱回転横ナデ ⑯⑰回転横ヘラケズリ ⑯ナデ	回転横ナデ 回転横ヘラケズリ →ナデ	灰 色	石(0.5~2) ○	自然釉	46
209	長颈 罐	口径 8.8 底径 11.2 器高 21.6	口縁部は外反し口縁部近くで上方に屈曲して突きのびる。肩部に2条の凹縫を施す。蓋はその間に鋒先をもつ。	⑯⑰⑱回転横ナデ ⑯⑰回転横ヘラケズリ ⑯ナデ	回転横ナデ 回転横ヘラケズリ →ナデ	暗灰色 灰 色	石(0.5~3) ○	自然釉	46
210	長颈 罐	口径 8.6 底径 9.6 器高 21.9	口縁部は外反し口縁部は水平に近かのびる。肩部に2条の凹縫、肩部と胴部の境に1条の凹縫を施す。	⑯⑰⑱回転横ナデ ⑯⑰回転横カキ目 ⑯回転横ナデ	回転横ナデ 回転横カキ目 →ナデ	灰 色	石(0.5~1) ○	自然釉	45

表22 5号墳出土遺物観察表(鉄製品)

(1)

番号	器種	遺存状態	材	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
211	釘	完 形	鐵 製	7.4	0.5	0.6	5.4	木片付着	47
212	釘	ほぼ完形	鐵 製	6.7	0.6	0.7	5.9		47
213	釘	完 形	鐵 製	7.9	0.8	0.7	6.1		47
214	釘	ほぼ完形	鐵 製	5.8	0.5	0.5	2.9		47

遺物観察表

5号墳出土遺物観察表(鉄製品)

(2)

番号	器種	調査状態	材	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
215	釘	ほぼ完形	鉄 製	5.9	0.6	0.6	3.7		47
216	釘	完 形	鉄 製	6.6	0.5	0.5	4.9	木片付着	47
217	釘	先端部欠損	鉄 製	5.1	0.4	0.6	4.7	木片付着	47
218	釘	ほぼ完形	鉄 製	5.9	0.3	0.4	3.3	木片付着	47
219	釘	先端部欠損	鉄 製	6.1	0.4	0.5	2.3		47
220	釘	先端部欠損	鉄 製	4.8	0.7	0.7	4.1		47
221	釘	先端部欠損	鉄 製	3.5	0.4	0.4	0.9		47
222	釘	頭 部	鉄 製	2.1	0.6	0.6	1.8		47
223	釘	頭部及び 先端部欠損	鉄 製	2.2	0.4	0.6	1.1		47
224	釘	頭 部	鉄 製	2.1	0.4	0.6	2.0		47
225	釘	頭 部	鉄 製	2.0	0.6	0.7	2.3	木片付着	47
226	釘	頭 部	鉄 製	2.2	0.5	0.7	1.5		47
227	釘	頭 部	鉄 製	2.5	0.4	0.6	1.0	木片付着	47
228	釘	頭部欠損	鉄 製	3.7	0.6	0.5	1.9	木片付着	47
229	釘	ほぼ完形	鉄 製	6.0	0.6	0.6	7.3	木片付着	47
230	釘	ほぼ完形	鉄 製	6.6	0.3	0.4	3.4	木片付着	47
231	釘	頭部欠損	鉄 製	4.6	0.4	0.4	2.2		47
232	釘	頭部及び 先端部欠損	鉄 製	4.4	0.4	0.5	1.8		47
233	釘	頭部欠損	鉄 製	6.7	0.5	0.5	4.6	木片付着	47
234	釘	ほぼ完形	鉄 製	6.0	0.7	0.4	5.4	木片付着	47

瀬戸風岬遺跡

5号墳出土遺物観察表(鉄製品)

(3)

番号	器種	遺存状態	材	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
235	釘	頭部及び先端部欠損	鉄 製	2.0	0.4	0.5	3.1	木片付着	47
236	釘	頭部及び先端部欠損	鉄 製	4.3	0.7	0.7	3.4		47
237	釘	頭部及び先端部欠損	鉄 製	4.4	0.7	0.6	2.5		47
238	釘	頭部及び先端部欠損	鉄 製	5.5	0.6	0.4	2.5		47
239	釘	頭部及び先端部欠損	鉄 製	4.4	0.7	0.6	2.3		47
240	釘	頭部欠損	鉄 製	4.0	0.7	0.6	2.7		47
241	釘	頭部及び先端部欠損	鉄 製	4.1	0.5	0.5	1.8		47
242	釘	頭部及び先端部欠損	鉄 製	4.3	0.5	0.4	2.3		47
243	釘	頭部及び先端部欠損	鉄 製	4.7	0.5	0.6	1.6		47
244	釘	頭部及び先端部欠損	鉄 製	4.2	0.2	0.3	2.3	木片付着	47
245	釘	頭部及び先端部欠損	鉄 製	3.7	0.5	0.5	2.2		47
246	釘	頭部及び先端部欠損	鉄 製	4.5	0.7	0.6	3.3	木片付着	47
247	釘	頭部及び先端部欠損	鉄 製	3.8	0.4	0.4	1.6	木片付着	47
248	釘	頭部及び先端部欠損	鉄 製	4.1	0.3	0.3	1.5	木片付着	47
249	釘	頭部欠損	鉄 製	4.0	0.6	0.6	2.6		47
250	釘	頭部欠損	鉄 製	3.8	0.4	0.6	2.0	木片付着	47
251	釘	頭部及び先端部欠損	鉄 製	3.1	0.3	0.3	1.0	木片付着	47
252	釘	頭部欠損	鉄 製	2.2	0.5	0.5	2.1		47
253	釘	頭部及び先端部欠損	鉄 製	4.3	0.7	0.6	2.9		47
254	釘	ほぼ完形	鉄 製	4.3	0.7	0.7	2.6		47

遺物観察表

5号墳出土遺物観察表(鉄製品)

(4)

番号	器種	遺存状	材	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
255	釘	頭部及び先端部欠損	鉄 製	5.6	0.6	0.5	3.9	木片付着	47
256	釘	頭部及び先端部欠損	鉄 製	3.8	0.7	0.5	2.9	木片付着	47
257	釘	ほぼ完形	鉄 製	7.2	0.4	0.6	10.3	木片付着	47
258	釘	頭部及び先端部欠損	鉄 製	7.5	0.4	0.6	10.2		47
259	不明	完形?	鉄 製	1.4	3.2	0.3	2.0		47
260	刀子	完形	鉄 製	12.4	1.1	1.0	15.7	木片付着	47

表23 5号墳出土遺物観察表(耳環)

番号	器種	遺存状	材質・色	法量				備考	図版
				縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
261	耳環	光形	鋼芯金張製 金色	3.50	2.50	0.80	8.37		46
262	耳環	完形	鋼芯金張製 金色	2.40	2.50	0.90	9.25		46

表24 5号墳出土遺物観察表(玉類)

(1)

番号	器種	遺存状	材質・色	法量				備考	図版
				長さ(cm)	直径(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
263	勾玉	完形	ガラス 淡い水色	1.94	0.50	上 0.22 下 0.18	1.10		46
264	管玉	ほぼ完形	ガラス 紺色	1.19	0.57	上 0.90 下 0.23	0.59		46
265	管玉	一部欠損	ガラス 淡青色	(1.60)	0.50	上 0.28 下 0.20	0.58		46
266	小玉	完形	ガラス 青紫色	0.38	0.59	上 0.22 下 0.20	0.17		46
267	小玉	完形	ガラス 淡青紫色	0.49	0.61	上 0.20 下 0.15	0.23		46
268	小玉	完形	ガラス 淡青色	0.30	0.60	0.20	0.18		46
269	小玉	完形	ガラス 淡青色	0.32	0.52	上 0.10 下 0.12	0.12		46
270	小玉	完形	ガラス 淡青色	0.30	0.55	上 0.15 下 0.10	0.15		46

瀬戸風峠遺跡

5号墳出土遺物観察表(玉類)

(2)

番号	器種	遺存状態	材	法量				備考	図版
				長さ(cm)	直径(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
271	小玉	完形	ガラス 濃青色	0.30	0.55	0.15	0.13		46
272	小玉	完形	ガラス 濃青色	0.33	0.55	0.16	0.15		46
273	小玉	完形	ガラス 濃青色	0.31	0.50	上 0.15 下 0.12	0.11		46
274	小玉	完形	ガラス 濃青色	0.30	0.50	上 0.12 下 0.10	0.12		46
275	小玉	完形	ガラス 濃青色	0.27	0.53	上 0.19 下 0.13	0.10		46
276	小玉	完形	ガラス 濃青色	0.26	0.63	上 0.14 下 0.18	0.13		46
277	小玉	完形	ガラス 濃青色	0.30	0.55	上 0.19 下 0.18	0.12		46
278	小玉	完形	ガラス 濃青色	0.40	0.52	上 0.10 下 0.15	0.15		46
279	小玉	完形	ガラス 濃青色	0.30	0.50	上 0.15 下 0.12	0.12		46
280	小玉	完形	ガラス 濃青色	0.30	0.50	上 0.10 下 0.12	0.12		46
281	小玉	完形	ガラス 濃青色	0.40	0.50	0.15	0.13		46
282	小玉	完形	ガラス 濃青色	0.37	0.56	上 0.17 下 0.15	0.16		46
283	小玉	完形	ガラス 濃青色	0.39	0.48	0.16	0.14		46
284	小玉	完形	ガラス 濃青色	0.40	0.53	上 0.15 下 0.10	0.15		46
285	小玉	完形	ガラス 濃青色	0.32	0.55	0.15	0.16		46
286	小玉	完形	ガラス 濃青色	0.30	0.52	0.15	0.13		46
287	小玉	完形	ガラス 濃青色	0.36	0.57	上 0.16-0.08 下 0.16-0.06	0.17	小さな孔がある	46
288	小玉	完形	ガラス 濃青色	0.30	0.52	上 0.18 下 0.15	0.12		46
289	小玉	完形	ガラス 濃青色	0.33	0.55	上 0.16 下 0.14	0.14		46
290	小玉	完形	ガラス 濃青色	0.31	0.54	0.16	0.15		46

遺物観察表

5号墳出土遺物観察表(玉類)

(3)

番号	器種	遺存状態	材	法量				備考	図版
				長さ(cm)	直径(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
291	小玉	完形	ガラス 淡青色	0.41	0.61	上 0.12 下 0.13	0.16		46
292	小玉	完形	ガラス 淡青色	0.23	0.51	上 0.14 下 0.12	0.10		46
293	小玉	完形	ガラス 淡青色	0.30	0.50	上 0.17 下 0.12	0.11		46
294	小玉	完形	ガラス 淡青色	0.28	0.50	上 0.15 下 0.12	0.10		46
295	小玉	完形	ガラス 淡青色	0.33	0.56	0.15	0.14		46
296	小玉	完形	ガラス 淡青色	0.33	0.53	0.12	0.14		46
297	小玉	完形	ガラス 淡青色	0.23	0.56	上 0.12 下 0.17	0.10		46
298	小玉	完形	ガラス 淡青色	0.28	0.55	上 0.16 下 0.15	0.11		46
299	小玉	一部欠損	ガラス 淡青色	0.24	0.49	0.14	0.08		46
300	小玉	完形	ガラス 淡青色	0.30	0.54	上 0.15 下 0.18	0.12		46
301	小玉	完形	ガラス 明青色	0.30	0.45	0.20	0.09		46
302	小玉	完形	ガラス 淡青色	0.29	0.50	0.17	0.17		46
303	小玉	完形	ガラス 淡青色	0.38	0.51	0.12	0.16		46
304	小玉	1/4	ガラス 黄色	0.43	(0.36)	(0.13)	0.04		46
305	小玉	1/2	ガラス 黄色	0.40	(0.50)	0.20	0.06		46
306	切子玉	完形	水晶 半透明	0.60	0.60	上 0.15 下 0.12	0.31		46

第9章 自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I 瀬戸風峠遺跡における植物珪酸体分析

1. 試 料

調査地点は、瀬戸風峠5号墳と瀬戸風峠1号墳墳丘トレンチT1東壁（第8図）の2地点である。試料は、前者では土器内や右室床土から5点、後者では土層断面から8点の計13点が採取された。試料採取箇所を分析結果第79・80図に示す。

2. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原, 1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対して直径約40μmのガラスピーブを約0.02g添加
(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 檢鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下を行った。計数は、ガラスピーブ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーブ個数に、係数された植物珪酸体とガラスピーブ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： 10^6 g ）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75である。

3. 分析結果

（1）分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表25および表26、表27に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

機動細胞由来：イネ、キビ族型、ススキ属型（ススキ属など）、ウシクサ族型、ウシクサ族型（大型）、シバ属

瀬戸風峠遺跡における植物珪酸体分析

[イネ科—タケ亜科]

機動細胞由来：メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、未分類等

[イネ科—その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

[樹木]

ブナ科（シイ属）、ブナ科（アカガシ亜属？）、クスノキ科、その他

（2）植物珪酸体の検出状況

1) 瀬戸風峠 5号墳（第79図・表25）

石室床面の土壤（試料11・12）および石室床面から出土した土器内土壤（土器201・199・207）について分析を行った。その結果、石室床面の土壤からは棒状珪酸体やイネ科（未分類等）が多量に検出され、ウシクサ族型、タケ亜科（未分類等）も比較的多く検出された。キビ族型、ススキ属型、シバ属、メダケ節型なども検出されたが、いずれも少量である。また、イネ科以外にもブナ科（シイ属）、ブナ科（アカガシ亜属？）、クスノキ科などの照葉樹起源の植物珪酸体も検出された。樹木はイネ科と比較して一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、植物珪酸体分析の結果から古植生を復原する際には、他の分類群よりも過大に評価する必要がある。

土器内土壤（土器201・199・207）でも同様の分類群が検出されたが、ネザサ節型などのタケ亜科はごく少量である。また、土器201（壺）内の土壤からはイネが検出された。イネの密度は600個/gと低い値である。

2) 瀬戸風峠 1号墳墳丘トレント1 東面（第80図・表25）

墳丘盛土（試料5～8）および旧表土と見られる黒色土（試料3）と地山（試料1・2）について分析を行った。その結果、地山（試料1）からは植物珪酸体が検出されなかった。旧表土と見られる黒色土（試料3）では、棒状珪酸体が多量に検出され、ススキ属型やウシクサ族型も比較的多く検出された。また、ブナ科（シイ属）、ブナ科（アカガシ亜属？）、クスノキ科などの照葉樹起源の植物珪酸体も検出された。盛土中の黒色土（試料6）や暗灰色土（試料8）でも同様の分類群が検出されたが、いずれも比較的低い値である。その他の試料からは、植物珪酸体はほとんど検出されなかった。

4. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

（1）瀬戸風峠 5号墳

石室の床面上向きに置かれた土器201（壺）内からは、少量ながらイネの植物珪酸体が検出された。5号墳は丘陵部に位置しており、周辺で水田や畑作が営まれていた可能性は考えにくいことから、石室内に何らかの形で稲わらが持ち込まれた可能性が考えられる。イネ粉（穎の表皮細胞）に由来する植物珪酸体の検出も期待されたが、これはいずれの試料からも検出されなかった。当時はウシクサ族やネザサ節などが生育するイネ科植生であり、周囲にはシイ林やアカガシ林、クスノキ林などの照葉樹林が分布していたものと推定される。

(2) 瀬戸風峠1号墳墳丘トレンチ1東壁

1号墳の構築以前は、ススキ属やチガヤ属などが生育する草原的な状況であったと考えられ、周囲にはシイ林やアカガシ林、クスノキ林などの照葉樹林が分布していたものと推定される。

参考文献

- 杉山真二 1987 タケモ科植物の微動細胞珪酸体 富士竹類植物園報告、第31号、P.70-83
 藤原宏志 1976 プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量化分析法-考古学と自然科学、9、p.15-29
 藤原宏志・杉山真二 1984 プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析による水田址の探索- 考古学と自然科学、17、P.73-85

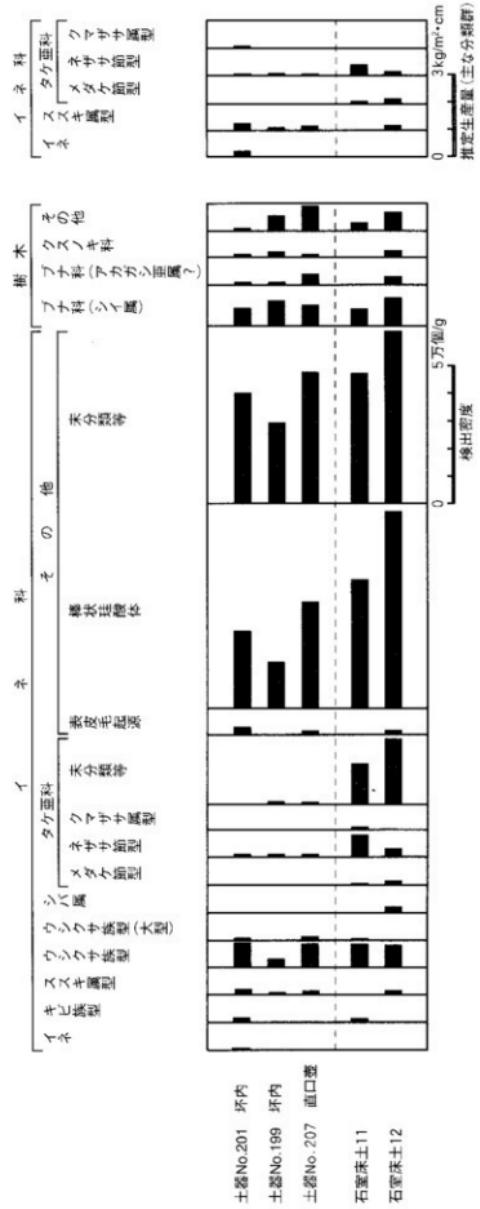
表25 瀬戸風峠1号墳と5号墳における植物珪酸体分析結果
 検出密度 (単位: ×10⁶個/g)

分類群 \ 試料	5号墳			1号墳									
	土器内		石室床下	墳丘トレンチ1東壁		1	2	3	4	5	6	7	8
	201	199	207	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8
イネ科													
イネ	6												
キビ族型	13			14									
ススキ属型	19	7	12	15									
ウシクサ族型	88	30	86	86	83								
ウシクサ族型(大型)	6		12	7									
シバ属					23								
タケモ科													
メダケ節型				7	15					8			
ネザサ節型	6	7	6	79	30								
クマザサ属型	6							7					
未分類等		7	6	150	240					22			
その他イネ科													
表皮毛起源	25		12	15					22	8	8		
棒状珪酸体	278	163	387	472	720				496	15	8	23	53
未分類等	398	290	473	472	630				15	554	30	23	166
樹木起源													
ブナ科(シイ属)	63	89	74	64	105				29	23		15	
ブナ科(アカガシア属?)	6	7	37		30								
クスノキ科	6	15	6		23				14			15	15
その他	6	52	86	29	68				22	15	8		15
植物珪酸体総数	928	669	1199	1380	1996				15	1366	145	30	286
おもな分類群の推定生産量(単位: kg/m ² ·cm)													
イネ	0.19												
ススキ属型	0.23	0.09	0.15		0.19				0.98	0.19	0.09	0.09	
メダケ節型					0.08	0.17				0.09			
ネザサ節型	0.03	0.04	0.03	0.38	0.14						0.04	0.04	
クマザサ属型	0.05								0.05				

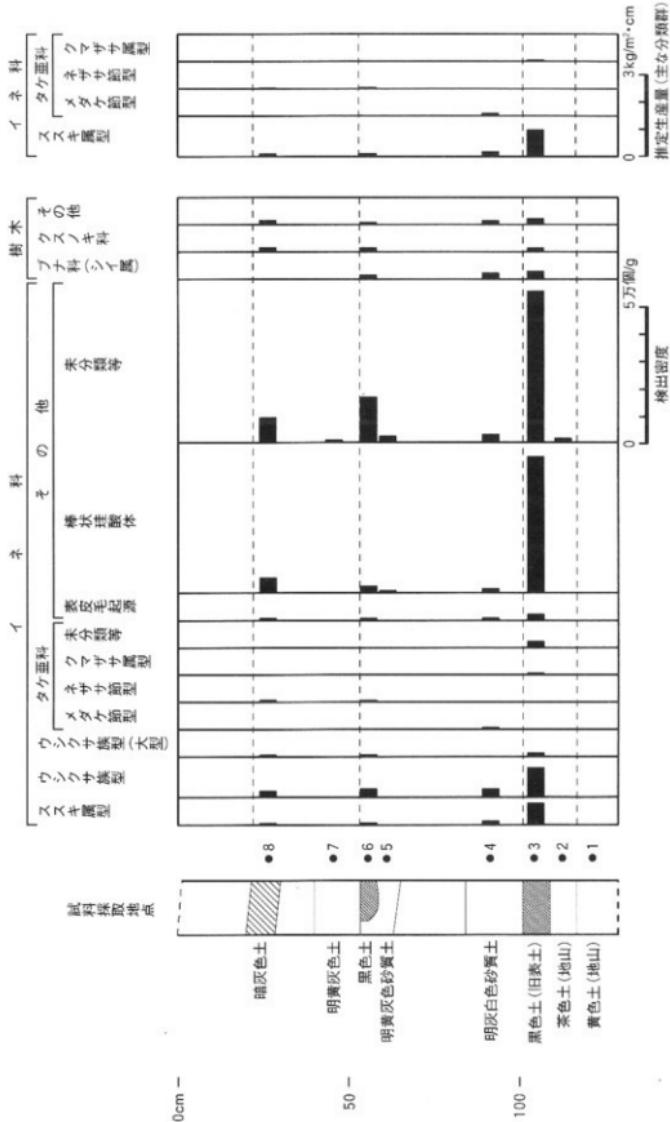
タケモ科の比率(%)

メダケ節型	18	55	100
ネザサ節型	82	45	100
クマザサ属型	61		100

瀬戸風神遺跡における植物硅酸体分析

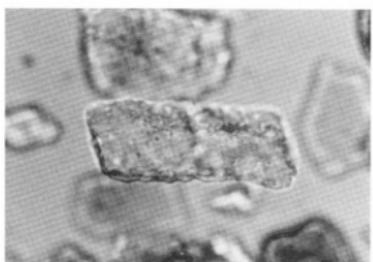


第79図 瀬戸風神5号墳における植物硅酸体分析結果

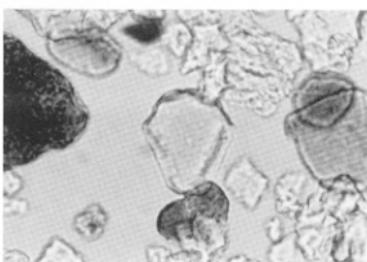


第80図 濑戸風峠1号墳埴丘トレンチT1東壁における植物珪酸体分析結果

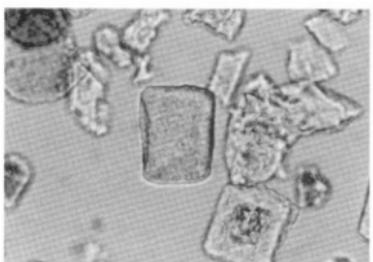
瀬戸風峠遺跡における植物珪酸体分析



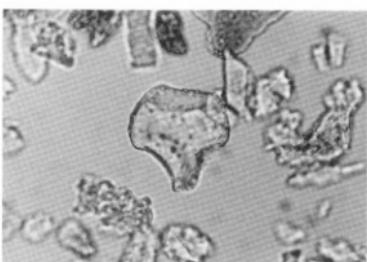
1. キビ族型 5号填



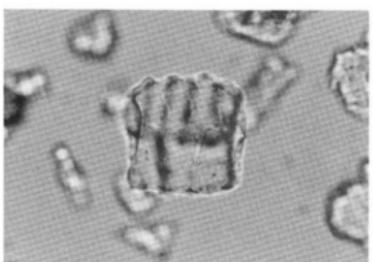
2. ススキ属型 1号填



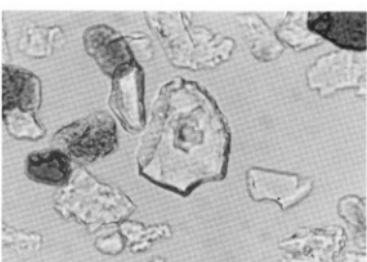
3. ウシクサ族型 5号填



4. シバ属 5号填



5. ネザサ節型 5号填

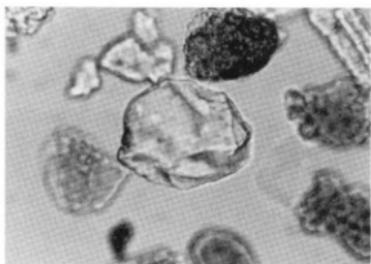


6. クマザサ属型 5号填

0 50 100 μm

第81図 濑戸風峠遺跡の植物珪酸体顕微鏡写真 (1)

自然科学分析



1. ブナ科（シイ属） 5号埴



2. ブナ科（アカガシ亜属？） 5号埴



3. クスノキ科 5号埴

0 50 100 μm

第82図 濑戸風峠遺跡の植物珪酸体顕微鏡写真 (2)

II. 濑戸風峠5号墳出土炭化材の樹種同定

1. 試 料

試料は、瀬戸風峠5号墳の石室床面（上段部11層直下）から採取された2点の炭化材である。

2. 方 法

試料は割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。樹種同定はこれらの試料標本をその解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3. 結 果

結果を表26に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

表26 濑戸風峠5号墳の石室床面から出土した炭化材の樹種同定結果

試 料	樹 種	(和 名 / 学 名)
No 1	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
No 2	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>

マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエビセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

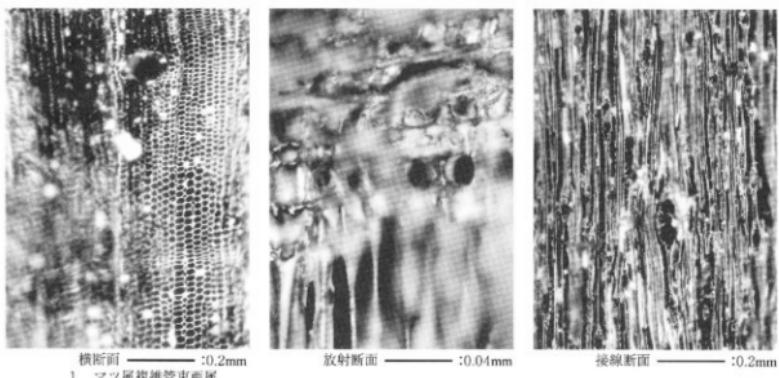
接線断面：放射組織は單列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より、マツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属にはクロマツとアカマツがあり、放射仮道管内壁の鋸歯状肥厚の程度で同定できるが、本試料は鋸歯状肥厚がはく落している部分が多く、十分な観察ができなかった為、マツ属複維管束亜属とした。

参考文献

佐伯清・原田浩 1985 針葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、P.20-48.

佐伯清・原田浩 1985 広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、P.49-100.



第83図 濑戸風峠5号噴出土炭化材の顕微鏡写真

III. 濑戸風峠4号墳から出土した炭化材の樹種同定

1. 試 料

試料は、瀬戸風峠4号墳石室の屍床部（木炭床）に敷き詰められていた木炭のうち、遺体頭部付近、腹部付近、足部付近から採取されたNo. 1～No. 3の3点である。

2. 方 法

試料は割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。樹種同定は試料標本をその解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3. 結 果

結果は表27に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

表27 濑戸風峠4号墳から出土した炭化材の樹種同定結果

試 料	樹 種 (和名／学名)
No. 1	コナラ属クヌギ節 <i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>
No. 2	コナラ属クヌギ節 <i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>
No. 3	コナラ属クヌギ節 <i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>

コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 No. 1・2・3

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の直径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

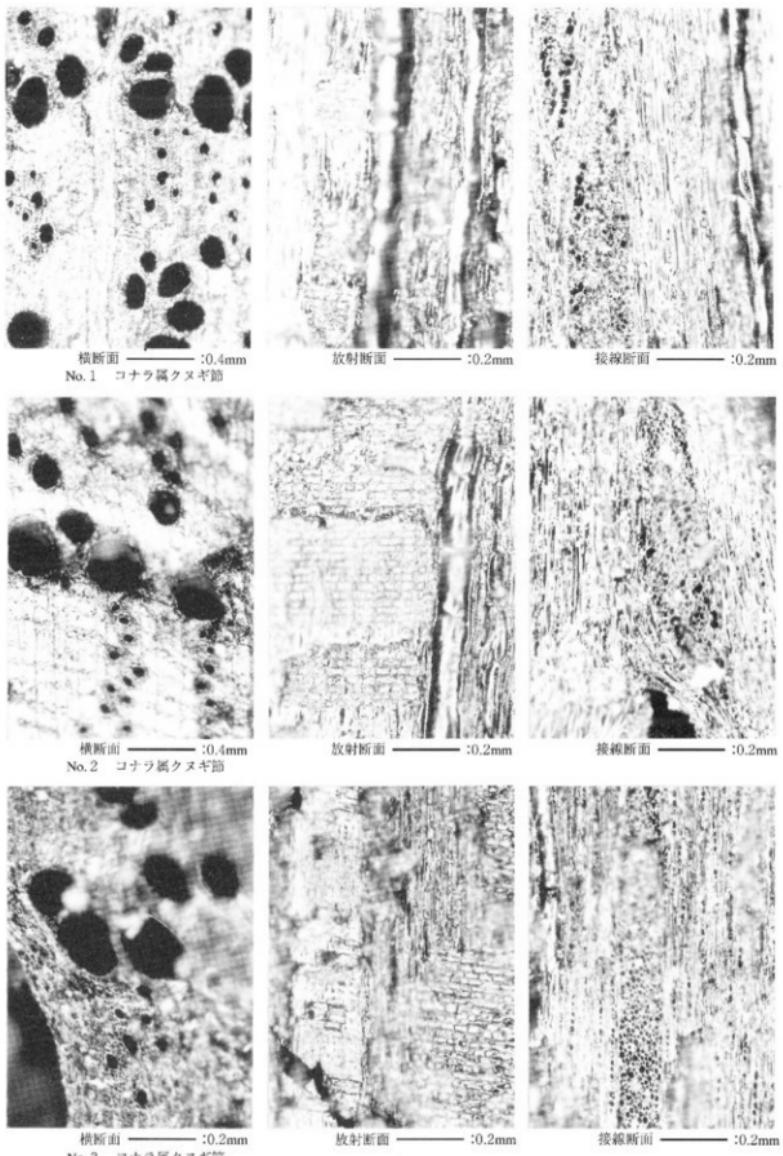
以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強韌で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

4. 所 見

屍床部の木炭材は、いずれもコナラ属クヌギ節と同定された。コナラ属の木材は重硬で、良質の木炭になる。

参考文献

佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、P.49-100.



第 84 図 濑戸風峠 4 号墳出土炭化材の顕微鏡写真

IV. 濑戸風峠4号墳における放射性炭素年代測定結果

表28 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	4号墳屍床	炭化材 (クヌギ節)	酸一アルカリ一酸洗浄 ベンゼン合成	β 線法 (長時間測定)
No. 2	4号墳屍床	炭化材 (クヌギ節)	酸一アルカリ一酸洗浄 ベンゼン合成	β 線法
No. 3	4号墳屍床	炭化材 (クヌギ節)	酸一アルカリ一酸洗浄 ベンゼン合成	β 線法 (長時間測定)

表29 測定結果

試料名	^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	曆年代 交点(1 σ)	測定No (Beta-)
No. 1	1430 ± 50	-26.7	1400 ± 50	AD650 (AD630~670)	101078
No. 2	1310 ± 60	-26.6	1290 ± 60	AD705 (AD675~785)	101079
No. 3	1340 ± 50	-26.2	1320 ± 50	AD685 (AD665~770)	101080

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

4) 曆年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより算出した年代(西暦)。補正には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値を使用した。この補正是10,000年BPより古い試料には適用できない。曆年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と曆年代補正曲線との交点の曆年代値を意味する。1 σ は補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した曆年代の幅を示す。

V. 濑戸風峠4号墳における寄生虫卵分析

1. 試 料

試料は、屍床部の遺体腹部直下から採取された土壤である。

2. 方 法

微化石分析法を基本に以下のように行った。

- 1) サンプルを採量する。
 - 2) 脱イオン水を加え攪拌する。
 - 3) 酶別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈殿法を施す。
 - 4) 25% フッ化水素酸を加え30分静置。(2・3度混和)
 - 5) 水洗後サンプルを2分する。
 - 6) 片方にアセトリシス処理を施す。
 - 7) 両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製する。
 - 8) 検鏡・計数を行う。なお、併せて花粉の定量値の計数・算定も行った。
- 以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てての操作を3回繰り返して行った。

3. 結果と考察

分析の結果、遺体腹部直下の試料からは寄生虫卵が検出されず、明らかな消化残渣も検出されなかった。また、花粉もほとんど検出されなかった。遺体埋葬に伴う分析では、乾燥した堆積環境で寄生虫卵が分解されることが指摘されている(金原ほか, 1996)。4号墳石室内においても寄生虫卵が分解される環境であった可能性が考えられる。

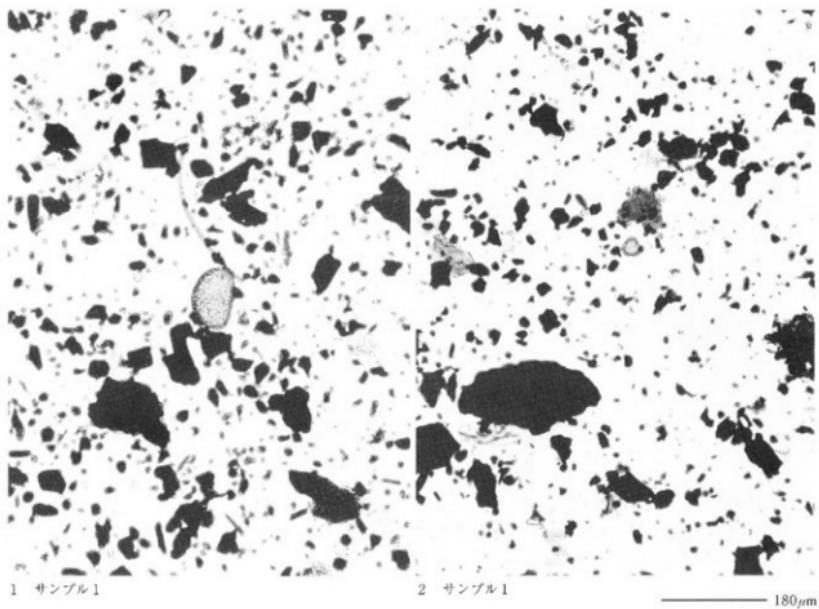
参考文献

- Peter J. Warnock and Karl J. Reinhard (1992) Methods for Extracting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. Journal of Archaeological Science. 19, p.231-245.
- 金原正明・金原正子(1992)花粉分析および寄生虫。藤原京跡の便所遺構—藤原京7条1坊—、奈良国立文化財研究所, p.14-15.
金原正明・金原正子・岡山邦子(1996)新宮東山古墳群における寄生虫卵および花粉分析。新宮東山古墳群、龍野市教育委員会, p.119-125.

瀬戸風岬4号墳における寄生虫卵分析

表30 瀬戸風岬4号墳における寄生虫卵（含む花粉分析結果）

学名	分類群 和名	遺体腹部
		直下
Helminth eggs	寄生虫卵（1cc中に算定）	(一)
	明らかな消化残渣	(一)
Arboreal pollen	樹木花粉	
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属	2
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	1
Fern spore	シダ植物胞子	
Monocolate type spore	単条溝胞子	1
Arboreal pollen	樹木花粉	3
Nonarboreal pollen	草本花粉	1
Total pollen	花粉总数	4
	タ (1cc中に算定)	44
Unknown pollen	未同定花粉	0
Fern spore	シダ植物胞子	1



第85図 瀬戸風岬4号墳の寄生虫卵分析

VI. 濑戸風峠4号墳における植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 1987）。

2. 試 料

試料は、4号墳石室内に置かれた土器の内部から採取された6点、および石室の床面から採取された2点の計8点である。試料採取箇所を分析結果図に示す（表31・第86図）。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原, 1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料の絶乾（105°C・24時間）
- 2) 試料約1gを秤量、ガラスピーブ添加（直径約40μm・約0.02g）
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散（300W・42kHz・10分間）
- 5) 沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥
- 6) 封入剤（オキット）中に分散、プレパラート作成
- 7) 檢鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーブ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーブ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーブ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10~5g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、ネザサ節は0.48、クマザサ属は0.75である。

4. 分析結果

（1）分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表31および第86図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

機動細胞出来：イネ、エノコログサ属型、キビ族型、ヨシ属、サヤヌカグサ属、ススキ属型（スス

瀬戸風峠4号墳における植物珪酸体分析

キ属など)、ウシクサ族、Bタイプ、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型(おもにクマザサ属)、タケ亜科(未分類等)

その他:表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、茎部起源、未分類等

[カヤツリグサ科]

[樹木]

クスノキ科、その他

(2) 植物珪酸体の検出状況

1) 土器150

石室の床面にうつ伏せに置かれた高壺内の試料(試料1~3)について分析を行った。その結果、試料2ではBタイプ、タケ亜科(未分類等)、棒状珪酸体が多量に検出され、ヨシ属も比較的多く検出された。また、キビ族型、サヤヌカグサ属、ネザサ節型、カヤツリグサ科なども検出された。イネ科Bタイプの給源植物は不明であるが、泥炭層などの湿地性堆積物から一般的に検出されている。おもな分類群の推定生産量(図の右側)によると、ヨシ属が圧倒的に卓越していることが分かる。

試料1と試料3でもほぼ同様の分類群が検出されたが、密度は比較的低くなっている。また、試料1ではエノコログサ属型が700個/gと少量検出された。

2) 土器147

石室の床面に上向きに置かれた高壺内の土壤(試料4)について分析を行った。その結果、タケ亜科(未分類等)や棒状珪酸体が比較的多く検出され、イネ、ヨシ属、サヤヌカグサ属、ネザサ節型、クスノキ科なども検出された。イネの密度は1,500個/gと比較的低い値であり、稻作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/gを大きく下回っている。

3) 土器149

石室の床面にうつ伏せに置かれた高壺内の土壤(試料5)について分析を行った。その結果、Bタイプ、タケ亜科(未分類等)、棒状珪酸体が多量に検出され、ヨシ属やネザサ節型なども検出された。

4) 土器155

屍床部の遺体頭部付近に上向きに置かれた壺内の土壤(試料6)について分析を行った。その結果、イネ、キビ族型、ヨシ属、ウシクサ族、ネザサ節型、クマザサ属型、棒状珪酸体などが検出された。イネの密度は3,000個/gと比較的高い値である。

5) 石室床面

石室床面の土壤(試料7・8)について分析を行った。その結果、棒状珪酸体が比較的多く検出され、イネ、ヨシ属、Bタイプ、クマザサ属型、クスノキ科なども検出された。イネの密度は試料7で2,300個/g、試料8で1,500個/gと比較的低い値である。

5. 考 察

以上のように、石室の床面に上向きに置かれた高壺内（147）、屍床部の遺体頭部付近に置かれた壺内（155）、および石室床面（試料7・8）からは、比較的少量ながらイネの植物珪酸体が検出された。4号墳は丘陵の頂上付近に位置しており、周辺で水田や畑作が営まれていた可能性は考えにくいことから、石室内に何らかの形で稻わらが持ち込まれた可能性が考えられる。イネ粉（穂の表皮細胞）に由来する植物珪酸体の検出も期待されたが、これはいずれの試料からも検出されなかった。

石室の床面にうつ伏せに置かれた高壺内（150）からは、エノコログサ属型の植物珪酸体が検出された。エノコログサ属には栽培種のアワの他にエノコログサなどの野生種が含まれるが、現時点ではこれらを完全に識別するには至っていない（杉山ほか、1988）。これは、植物分類上でも両者の差異が不明確なためである。

その他の分類群では、ほとんどの試料からヨシ属やイネ科Bタイプが検出され、とくに土器150ではヨシ属が多量に検出された。遺跡の立地条件から、4号墳近辺にこれらの植物が生育する湿地があつたとは考えにくいくことから、石室内に何らかの形でヨシ属などの茎葉が持ち込まれた可能性が考えられる。なお、少量ながらクスノキ科が検出されることから、遺跡周辺にはクスノキ科などの照葉樹林が分布していたものと推定される。

参考文献

- 杉山真一：1987 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点。横生史研究、第2号、p.27-37。
- 杉山真二：1987 タケアキ科植物の機動細胞壁珪体。富士竹類植物園報告、第31号、p.70-83。
- 杉山真二・松田隆二・藤原宏志：1988 機動細胞壁珪体の形態によるキビ族植物の同定とその応用－古代農耕遺跡のための基礎資料として－。考古学と自然科学、20、p.81-92。
- 藤原宏志：1976 プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－。考古学と自然科学、9、p.15-29。

瀬戸風呂4号墳における植物珪酸体分析

表31 瀬戸風呂4号墳石室内における植物珪酸体分析結果
検出密度(単位:×100個/g)

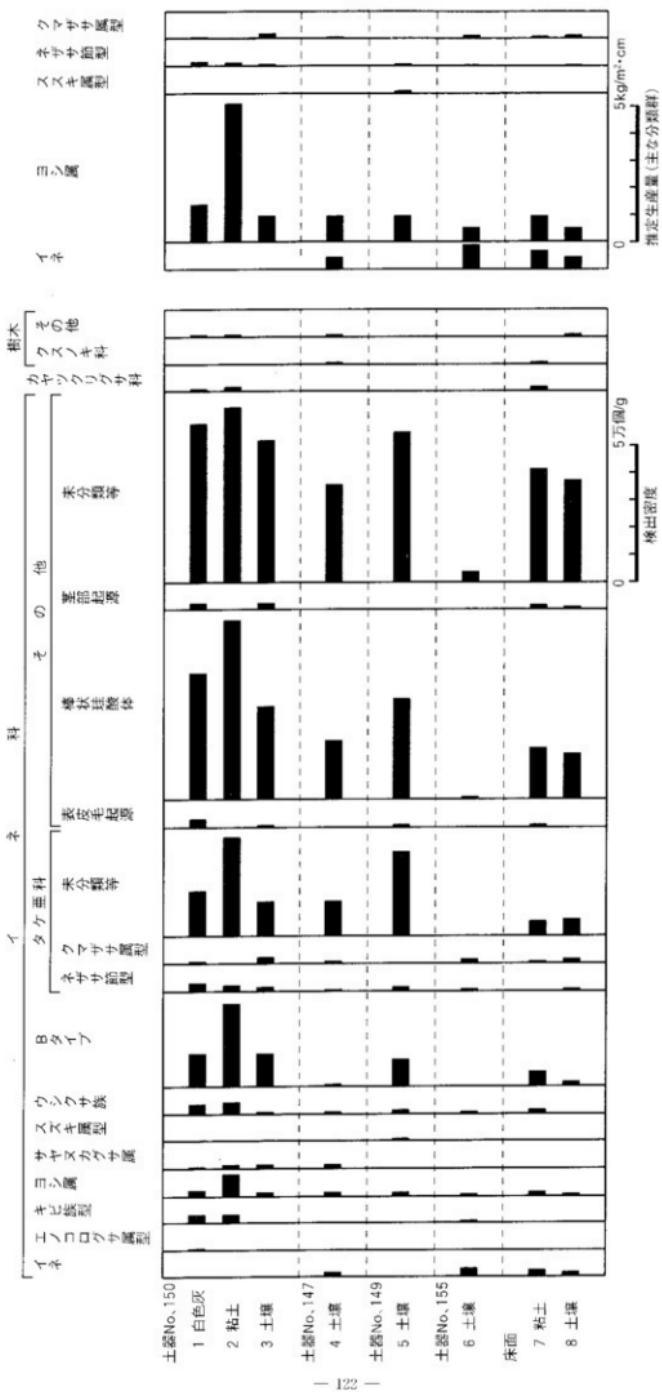
分類群 \ 試料	土器No.150			土器No.147		土器No.149		土器No.155		床面	
	1	2	3	4	5	6	7	8			
	白色灰	粘土	土壤	土壤	土壤	土壤	粘土	土壤			
イネ科											
イネ				15				30	23	15	
エノコログサ属型	7										
キビ族型	30	30						8			
ヨシ属	22	81	15	15	15			8	15	8	
サヤヌカグサ属	7	15	15	15							
ススキ属型					8						
ウシクサ族	37	44	7	7	15			8	15		
Bタイプ	119	303	119	7	98			53	15		
タケ亜科											
ネザサ節型	30	22	15	7	15			8		8	
クマザサ属型	7		22	7				15	8	15	
未分類等	164	362	126	127	308			53	61		
その他のイネ科											
表皮毛起源	30		7		8			8			
棒状珪酸体	463	657	341	216	369			8	188	167	
莖部起源	22		22						15	8	
未分類等	582	642	519	358	549			38	414	372	
カヤツリグサ科	7	15							15		
樹木起源											
クスノキ科				7				8			
その他	7	7		7						8	
植物珪酸体総数	1537	2178	1210	790	1384			120	812	676	

おもな分類群の推定生産量(単位:kg/m²·cm)

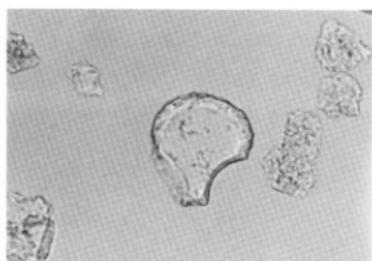
イネ				0.44		0.88	0.66	0.45
ヨシ属	1.41	5.12	0.94	0.94	0.95	0.47	0.95	0.48
ススキ属型					0.09			
ネザサ節型	0.14	0.11	0.07	0.04	0.07	0.04		0.04
クマザサ属型	0.06		0.17	0.06		0.11	0.06	0.11

※試料の仮比重を1.0として算出。

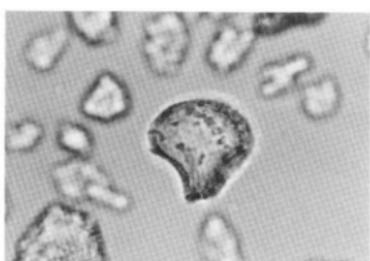
第86図 濱戸風情4号墳石室内における植物遺物分析結果



瀬戸風岬4号墳における植物珪酸体分析



1. イネ



2. イネ



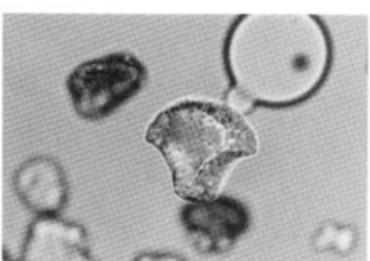
3. イネ (側面)



4. キビ族型



5. ヨシ属



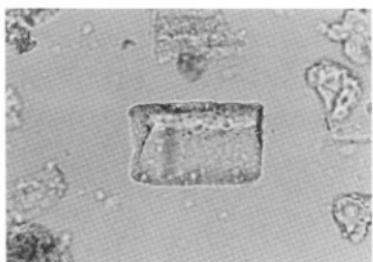
6. サヤヌカグサ属

0 50 100 μm

第87図 瀬戸風岬4号墳の植物珪酸体顕微鏡写真 (1)



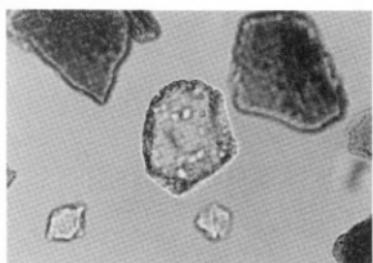
1. ウシクサ族



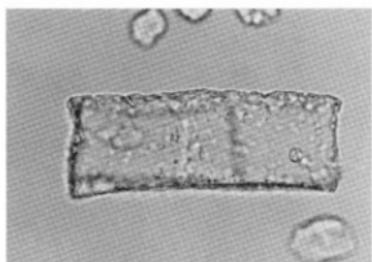
2. イネ科 B



3. ネザサ筋型



4. クマザサ属型



5. カヤツリグサ科



6. クスノキ科

0 50 100 μ m

第88図 濑戸風峠4号墳の植物珪酸体顕微鏡写真 (2)

第10章 保存科学分析

(財)元興寺文化財研究所

I 濑戸風峠4号墳出土の耳環分析

1. 分析の概要

(1) 使用機器・原理

- 1) エネルギー分散型ケイ光X線分析装置(XRF)
(セイコー電子工業㈱製SE A 5200)
- 試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有のケイ光X線を検出することにより元素を同定する。
- 2) 実体顕微鏡㈱オリンパス製SZH-II LD)

(2) 分析方法

肉眼及び実体顕微鏡による残存状況の観察後、XRFによる定性分析を非破壊で行った。

(3) 分析条件

大気条件下、管電圧50KV

(4) 分析箇所

各耳環の表面状態の異なる箇所を選択した(写真参照)。

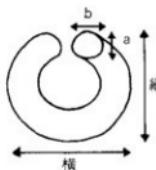
2. 分析結果

(1) 耳環の残存状況

今回分析を行った耳環1点は、残存状態は良好で、やや赤みの強い金色を呈する表面層に被われている。表面層には、細かい擦痕が認められる。法量は表32に記した。

表32 耳環の法量

耳環No.	重量(g)	縦(mm)	横(mm)	a (mm)	b (mm)
182	11.27	1.80	2.16	0.75	0.53

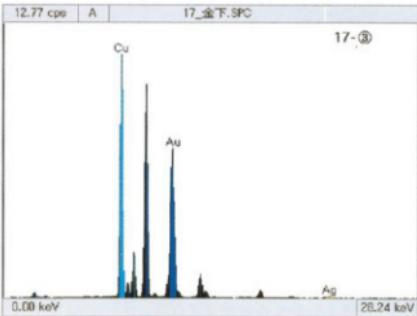
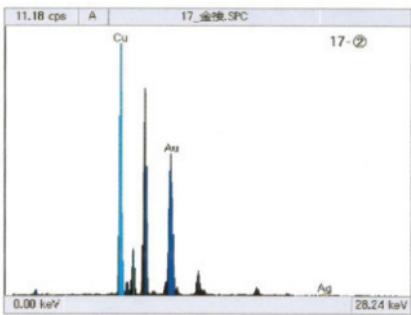
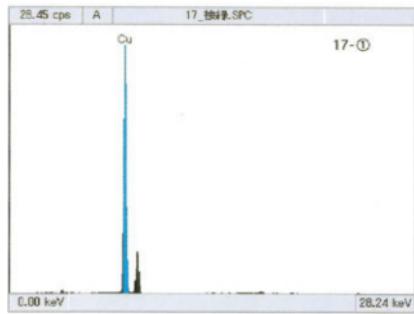


第69図 耳環測量部図

(2) 耳環の分析結果および推定される製作技法

やや小振りの耳環である。表面は緑青に被われていたが、部分的に表面層が露呈していた。接面(17-①)も鈎に被われており、形状等は、確認できない。表面層(17-②、③)は赤みの強い金色を呈し、Au(金)、Cu(銅)および微量のAg(銀)が検出された。Cuは緑青に起因するものと考えられる。X線写真、重量等より中実の耳環であると推定される。またHg(水銀)が検出されないことから、金貼り技法で製作されたものと推定される。

保存科学分析



第90図 耳環の顕微鏡写真と分析表

第11章 まとめ

今回の調査地は、松山市が指定する「瀬戸風峠古墳群」内にあり、周知された遺跡地帯である。ただし、この地域での発掘調査は極めて少なく、本調査では瀬戸風峠古墳群の一端を明らかにするものになった。ここでは、調査を行った古墳5基と箱式石棺8基・石蓋土坑墓1基・木棺墓1基の時期や特徴、方位について、まとめてみる。なお、須恵器の編年観は田辺昭一氏の陶邑編年にもとづいた。

1. 古 墳

(1) 瀬戸風峠 1号墳 (第11~28図)

1号墳の石室内から出土した环蓋2と环身5・6はTK10に、环蓋1・3はTK209に、4はTK217に比定できる。のことから、1号墳は6世紀中頃に築造され、7世紀前半まで追葬があったものと考える。

墓坑は、玄室部の下部が収まるように掘られている。その結果、奥壁・両側壁・玄門部は基底石を含めた3~4段目までが墓坑内に構築されることになる。このため、羨道部の床面は、玄室部の床面より高くなり、羨道部(入り口)から玄室に入るには段を降りることになる。このような右室構造は、竪穴系横口式石室と呼ばれ、道後平野の横穴式石室にはよく認められるものである。道後平野北部においては、「この種の右室構造の築造は、確実なものではTK10段階からTK209段階まで続く」(栗田茂敏 1993)とされている。したがって、1号墳はこの種の石室としては、比較的古い段階に築造されたものになる。

玄室に使用された石材の大きさにも特徴が認められた。下から3~4段目までの石材は上部に比べて石材が小さく、石の積み方も丁寧である。一方、上部は大型石材が多く使用される。石の積み方も下部に比べて雑である。これは、石室上部の持ち送りは4段目以上が急になることに起因するものである。

1号墳の羨道は、玄門から閉塞石までが、0.7mと短いものになっている。これについては、栗田茂敏氏が「段を降りる石室については、当初は、玄門部で閉塞を行われたものが、6世紀末ごろには短い羨道をもつようになる」(栗田茂敏 1993)と指摘している。筆者も同じ考えである。

墓道は、羨道部にある閉塞石まで掘られ、掘り方は2つを確認した。また、閉塞石の下からは管玉が1点出土し、閉塞する際に何らかの祭祀が行われたようである。

羨道部では、作業道を検出している。作業道の用途は、玄室の基底石から3~4段目までは小型の石材が使用されている状況から、これらの「石材の運搬」や、墓坑掘削時の「土の運び出し」が想定される。

石室内の遺物は大きく分けて玄室右奥、玄室左奥、玄室南西隅の3地点に集中している。3地点の遺物群が埋葬に伴うものとすれば、少なくとも2回の追葬があったものと考えられる。これは、墓道の掘り込み検出数と一致し、1号墳の追葬が2回であることを立証するものである。

段を降りる構造をもつ石室については、墓坑形態、構築法、羨道、墓道との関係などを整理・検討し、該当石室の系譜を明らかにしていかなければならない。

(2) 濱戸風峠 3号墳 (第31・32図)

3号墳は石室床面が削半され、石室内からは土器が出土していない。ただし、石室外からはTK43ないしTK209に比定される広口壺135が出土している。この土器が3号墳の副葬品と仮定すれば、6世紀後半～末に築造されたものになる。

石室は破壊され、玄室部の基底石が残るにすぎない。奥壁の基底石には、大型の石材3石が使用されていたが、この石材の使用法は4・5号墳と共通していた。

(3) 濱戸風峠 4号墳 (第55～57図)

石室内から出土した須恵器は、高杯145～150がTK217に、長頸壺153がTK46ないしTK48に比定できる。また、石室から出土した土師器壺156・157と皿158は飛鳥II・IVに比定でき、木炭床から出土した土師器壺155は飛鳥IIIに比定できる。したがって、4号墳は7世紀中頃に築造され、7世紀後半までの追葬が考えられる。

木炭床は、石室の築造当初に設置されたものか、最終埋葬時に設置されたものかは判断がつかない。ただし、木炭床上の人骨は集骨されており、石室内に埋葬された人物が後の改葬により、木炭床を構築し、埋葬した可能性がある。

木炭床は、全国的に見ても類例がない。石室内に木炭が残る例としては、兵庫県西宮市の6世紀後半の具足塚(石室地山面、玄室と羨道部の埋葬施設がある部分に敷かれる)、兵庫県宝塚市の7世紀前半～7世紀中葉の長尾山古墳群中に3基(内1基の箱式石棺中には厚さ30cmを測る木炭が充満する)がみられ、奈良県の高田墳内古墳群中の6世紀後半の室の谷3号墳では灰や土が交じる例が知られている。このように、木炭の使用は4号墳に先行する古墳に見られることから、木炭使用の葬法が当地において開始されたとは考えられず、他地域との影響下で構築されたものと思われる。

木炭の使用については、木炭には防湿・防臭の効果があることから、遺骸の保存を目的としたものか、または、4号墳が木炭に強く関係する人物・集団であった事などを考えるが、想定の域を脱しない。今後の資料の増加を待ちたい。

なお、木炭床は立体的な記録保存と遺構の有効活用を目的として、木炭床と人骨及び奥壁・側壁の一部を複製した。製作は(株)京都科学に委託し、レプリカは、松山市考古館併設の松山市文化情報館(平成9年開館)に啓蒙普及活動の一環として常時展示公開している。

(4) 濱戸風峠 5号墳 (第72～78図)

5号墳から出土した高杯203・204はTK217に比定でき、長頸壺208はTK217ないしTK46に、209はMT21に比定できることから、4号墳と同時期の7世紀中頃に築造され、8世紀前半までの追葬を考える。なお、壺身198～202は色調が黒灰色を呈し、石室内から出土した他の須恵器とは異なる様相をもつ。県内においては類例がなく、その出自は、他地域からの搬入品の可能性を含め検討していくべき。

石室の袖部構造は、上部が欠失しているため袖部を形成するかどうかは断定できない。ただし、袖部にあたる地点では、石材が10cmほど石室内に突出し、玄室基底石と並び方が異なることから、羨道部を意識した造りになっている。このことから、報告書では本石室を片袖式の石室とした。

樋石は、玄室側の袖石の端から、30cm入り口方向に置かれている。一般的に樋石は、袖石に合わせて配するものと思われるが、本墳では樋石が袖石からはずれて置かれている。この要因には、次のような事が考えられる。床面は、仕切り石を境にして奥壁側と入り口側とでは、床面に敷かれる磧の大き

古墳以外の埋葬施設

さて、床土の埋土色が異なる。また、入り口側から出土した長頸壺は奥壁側から出土した長頸壺に比べ胸部の長胴化と脚台の短小化がみられ、出土物に時期差が認められる。したがって、最終埋葬時に入り口側の石室床面の改裝が行われ、入り口側に玄室を拡張した可能性が考えられる。

石室から出土した副葬品には、武器が欠落するようである。1・4・6号墳の副葬品中からは、器種と数量に違いがみられるが、大刀や鉄鎌が出土している。この副葬品の違いは、時期もしくは被葬者の階層や集團を現しているものと考えられるが、当古墳群内の資料増加を待って再度検討したい。

玄室内からは、鉄釘が出土している。今回の調査では、3号墳からは鉄釘2点が出土し、1・4・6号墳からは、鉄釘が出土していない。同じ古墳群にありながら、鉄釘の使用・非使用が認められる。

(5) 濑戸風峠 6号墳 (第66~70図)

6号墳の時期は、土器が出土していないため、石室から出土した鉄鎌で決めなければならない。鉄鎌は、長頸鎌であることから5世紀後半~6世紀に築造されたものと考えられる。さて、6号墳のあるE区では、把手付椀が表探されている。この遺物は、瀬戸風峠遺跡で出土した最も古い須恵器で、5世紀後半~末に比定される。長頸鎌との時期的関係もよく、6号墳の遺物の可能性がある。

2. 古墳以外の埋葬施設

(1) 箱式石棺 (第35~43図・第47~49図)

箱式石棺は8基を検出し、このうち、人骨が遺存するものは2・5・7・9号石棺である。また、人骨以外の出土物は無く、出土物からの各箱式石棺の時期比定はできない。ただし、7・8・9号箱式石棺は、1号墳の墓坑に切られることから、1号墳の築造前の6世紀中頃以前には、構築されていた事になる。

粘土の被覆は、7号石棺の蓋石の一部に認められるが、全体を粘土で被覆するものはない。

(2) 石蓋土坑墓 (第33・34図)

石蓋土坑墓は、1基(3号石蓋土坑墓)を検出した。3号石蓋土坑墓からは、耳環が出土している。この耳環は細身のもので、1号墳から出土したものと方量・形がほとんど同じである。よって、1号墳と同時期に構築されていたものと考える。

(3) 木棺墓 (第60~62図)

木棺墓は、1基を検出した。木質は残っていないが、腐食によってできた変色土を検出した。木棺構造は、変色土と墓坑底部の様子から、組合せ式木棺の可能性が高い。

遺物は、鉄剣が1口出土している。出土状況は、棺内に納められ、刃を立てた状態であった。刃を立てるという行為は、弥生期の青銅祭器の埋納方法と共通している。

時期は、鉄剣が古墳時代前期・中期に多く副葬される遺物である。よって、上限は古墳時代前期に、下限は4号墳が構築される7世紀以前に求められる。

3. 濑戸風峠遺跡の埋葬施設の方向性

今回の調査で検出した埋葬施設の主軸方位は、古墳では東西方向となるものが1・6号墳、南北方向が3・4・5号墳となり、箱式石棺・石蓋土坑墓・木棺墓はすべてが東西方向になっている。さら

ま　　と　　め

に、東西方向のものは東を基点とし北へ最大で36°（3号石蓋土坑墓）、南へは最大26°（6号墳）の範囲でおさまり、南北方向のものは北を基点として西へ3°（5号墳）～42°（4号墳）の範囲でおさまる。これらは、主軸方位を基準にすると、東西方位のI類と、南北方位のII類に分類できる。さらに、I類は6世紀中まで、II類は6世紀後半以降に時期比定される。今回調査した瀬戸風峠古墳群中では、主軸方位による時期差が認められる事になってくる。

以上、各埋葬施設の時期と特徴等について述べてきた。今回の調査では、4号墳の木炭床の検出をはじめ、古墳と箱式石棺・石蓋土坑墓・木棺墓の埋葬施設を検出し、瀬戸風峠古墳群の一端を明らかにした事は大きな成果と言える。また、1号墳と3・4・5号墳の横穴式石室にみる石材使用方法と石室形態の相違は、石室形態の変遷が同一地域で追える良好な資料といえる。

さて、県内における箱式石棺は、その多くが副葬品を伴わないので、時期判断が不明確なものが多く、相田則美氏は「箱式石棺の構造等において具体的な編年研究が必要」（相田則美 1983）と提言している。今回、1号墳の墓坑に切られる7・8・9号箱式石棺は、石棺上部の土盛り状況と整地状況を明らかにできる遺存状況にあった。しかしながら、石棺以外の外部構造を明確に出来なかったことは大いに反省すべき点であった。

参考文献

- 田辺昭一 「海邑古窯址群」 平安学園 1966
『須恵器大成』 角川書店 1981
柳沢一男 「堅穴系横穴式石室再考」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』 1982
栗山茂敏 「影浦谷古墳」 1993
大森一成 「松山跡7号墳」「松山市埋蔵文化財調査年報」 1996
古代の土器研究会編 「古代の土器 I 郡城の土器集成」 1992
正岡勝夫 「愛媛県の箱式石棺」「遺跡」 1983
相田則美 「愛媛県における箱式石棺の編年」『伊豫史談』 1984
多田 仁 「原池遺跡」「四国縱貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書XII - 伊予市編(3)-」 1998
山本一郎 「埋葬施設」「古墳時代の研究 - 墓丘と内部構造 -」 1992

写 真 図 版

写 真 図 版 例 言

1. 造構の撮影は、調査担当者及び大西朋子が行い、D区は高所作業車を用いた。

使用機材：

カ メ ラ トヨフィールド45A	レ ン ズ スーパーアンギュロン 90mm他
アサヒペンタックス67	ペンタックス67 55mm他
ニコンニューFM2	ズームニッコール 28~85mm他
フィルム プラスXパン・ネオパンSS・エクタクロームEPP	

2. 遺物の撮影は、大西が行った。

使用機材：

カ メ ラ トヨ／ビューア45G	レ ン ズ ジンマーS 240mm
ストロボ コメット／CA-32・CB2400（パンク使用）	
スタンド他 トヨ／無影撮影台・ウエイトスタンド101	
フィルム プラスXパン	

3. 白黒写真の現像・焼き付けは、一部を除いて大西が行った。

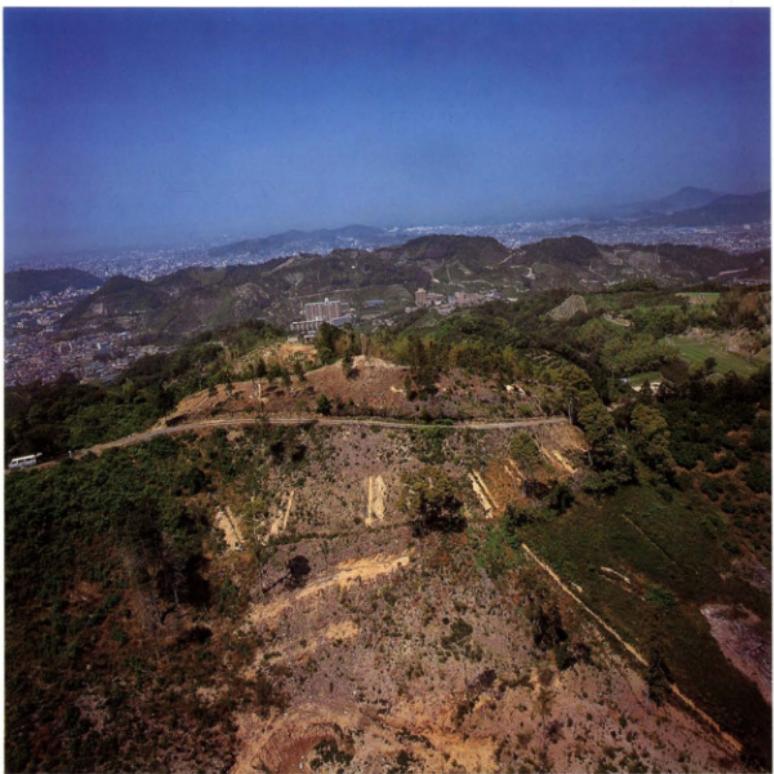
使用機材：

引伸機 ラッキー450MD	レ ン ズ エル・ニッコール135mm
ラッキー90MS	エル・ニッコール50mm
印画紙 イルフォードマルチグレードIVRC	
フィルム現像剤 コダックD-76・HC110	

【参考】『埋文写真研究』Vol. 1 ~ 9

〔大西 朋子〕

B区の調査



1. B区遠景（東より）

B区の調査

図版
二



1. 濑戸風峠1号墳床面検出状況（西より）

B区の調査



1. 濑戸風峠 1号墳石室内出土遺物

B区の調査

図版
四



1. 7号箱式石棺人骨検出状況（西より）

D区の調査

図版
五



1. 濑戸風峠 4号墳石室内出土遺物

F区の調査

図版
六



1. 濑戸風峠 5号墳床面検出状況（北東より）



1. 濑戸風峠 5号墳石室内出土遺物

調査の概要



1. B·D·F区遠景（南西より）



2. B区遠景（南より）



3. B区遠景（真上より）

B区の調査

図版
九



1. 濑戸風峠 1号墳調査前（南より）



2. 濑戸風峠 1号墳調査前開口部（南より）



3. 濑戸風峠 1号墳盗掘坑（東より）

B区の調査



1. 濑戸風峠 1号墳調査前（西より）



2. 濑戸風峠 1号墳道土屑（西より）



3. 濑戸風峠 1号墳閉塞部遺存状況（西より）

B区の調査



1. 濑戸風峠1号墳T1西壁土層（南東より）

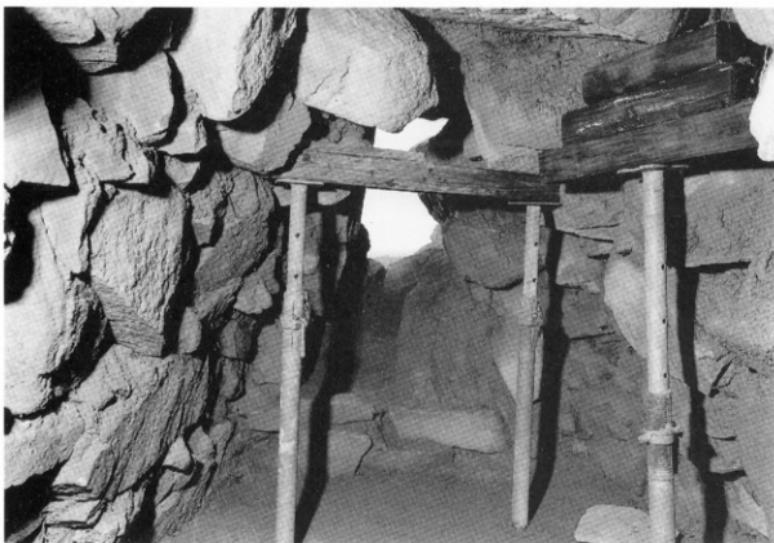


2. 濑戸風峠1号墳T1東壁土層（南西より）

B区の調査



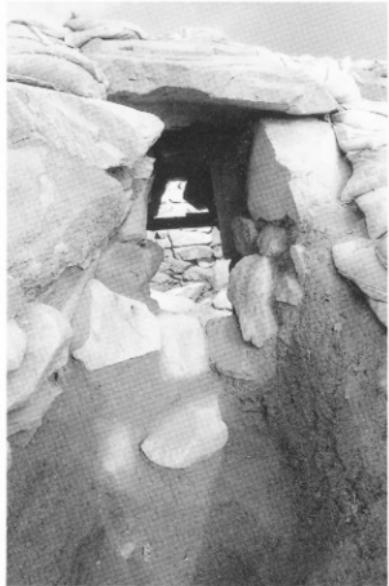
1. 濑戸風峠 1号墳調査前石室内（西より）



2. 濑戸風峠 1号墳調査前石室内（東より）

B区の調査

図版
一三



1. 濑戸風峠 1号墳閉塞部（西より）



2. 濑戸風峠 1号墳天井石（玄室内より）



3. 濑戸風峠 1号墳天井石検出状況（西より）



1. 濑戸風峠 1号墳天井石遺存状況（東より）



2. 濑戸風峠 1号墳天井石遺存状況（北東より）

B区の調査

図版
一五

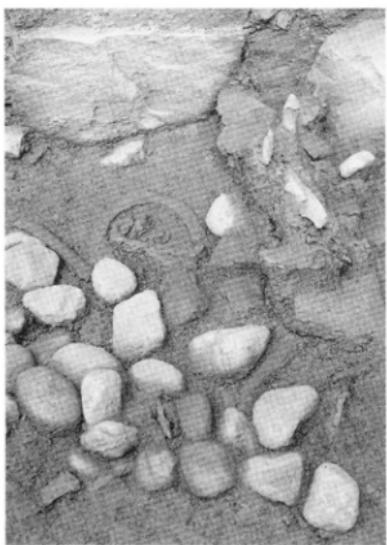


1. 濑戸風峠 1号墳床面検出状況（西より）

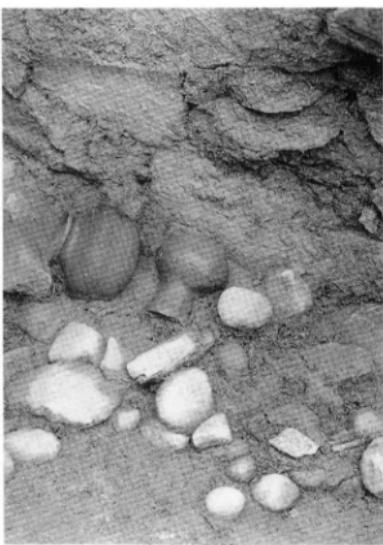
B区の調査



1. 濑戸風峠 1号墳遺物出土状況（東より）



2. 濑戸風峠 1号墳遺物出土状況（南より）



3. 濑戸風峠 1号墳遺物出土状況（北より）

B区の調査

図版
一七



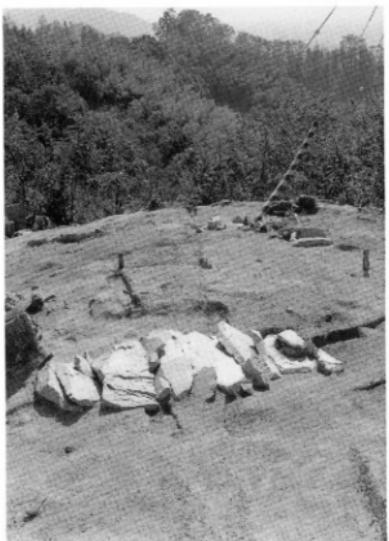
1. 濑戸風峠 3号墳検出状況（北より）



2. 濑戸風峠 3号墳石室検出状況（南より）

B区の調査

図版
一八



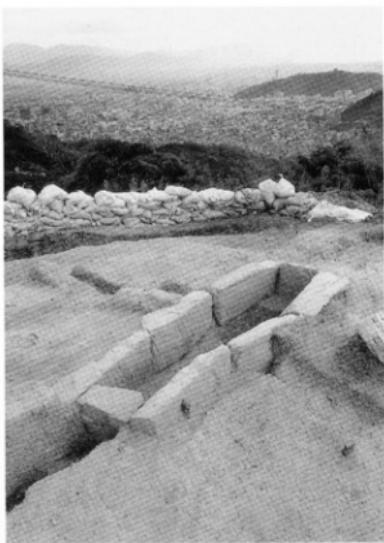
1. 3号石蓋土抗墓検出状況（北より）



2. 3号石蓋土抗墓完掘状況（東より）



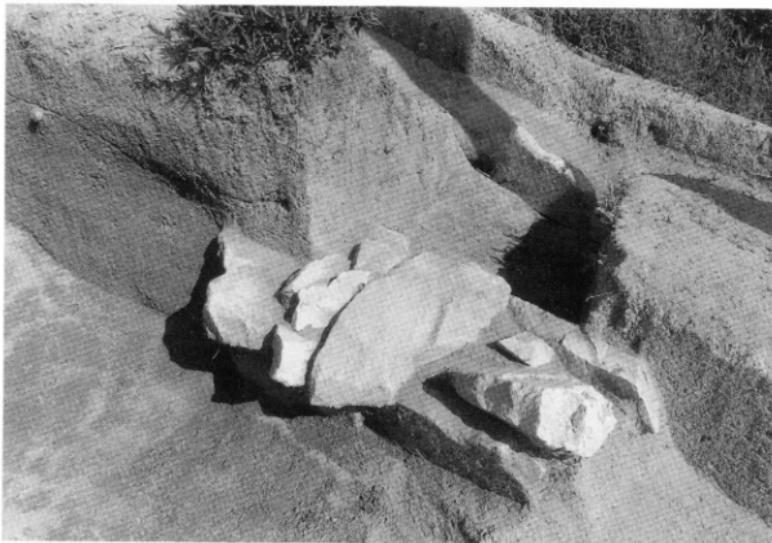
3. 5号箱式石棺（西より）



4. 4号箱式石棺（北東より）

B区の調査

図版
一九

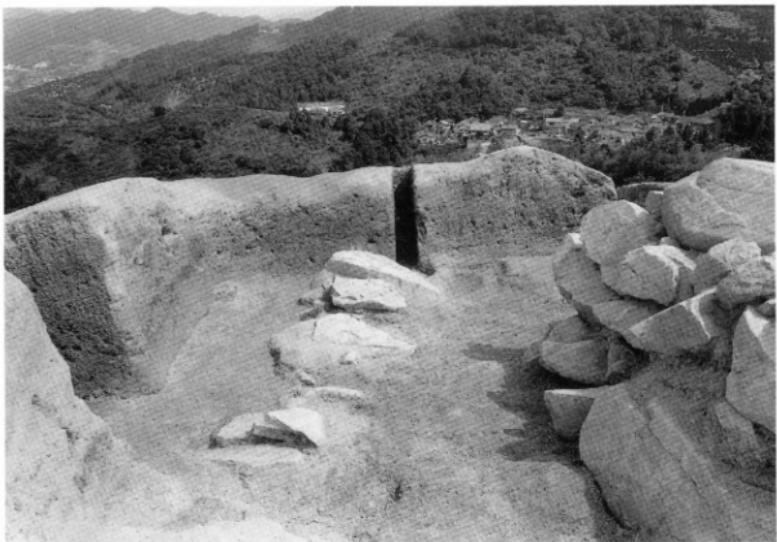


1. 6号箱式石棺検出状況（北西より）



2. 7号箱式石棺と1号墳（北西より）

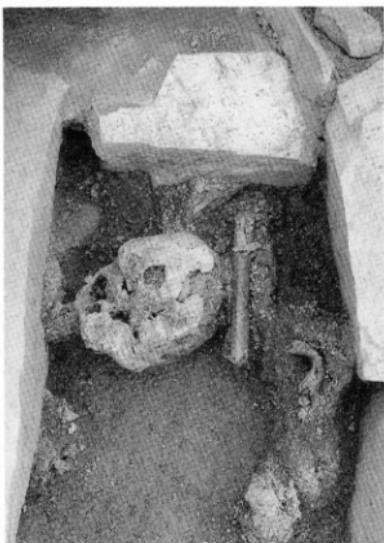
B区の調査



1. 7号箱式石棺検出状況（西より）



2. 7号箱式石棺人骨出土状況（西より）



3. 7号箱式石棺頭骨（西より）